
ネギまで夜天の主(偽)番外編・魔法老人リリカルカナメと魔法人外エヴァンジェリン

開店休業状態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまで夜天の主（偽）番外編・魔法老人リリカルカナメと魔法人外エヴァンジェリン

【Nコード】

N0487N

【作者名】

開店休業状態

【あらすじ】

魔法少年リリカルカナメが魔法老人リリカルカナメとなり、彼の所持する夜天の書の元ネタとなった世界へと移動！

生物なら誰でも持つ力、気。遍く万象に宿る精霊の力を借り、行使される変換資質や変換過程が要らず、少ない魔力にて行使する事が可能な魔法。そして、魔力を持たぬ一般人であろうと強い力を手に入れることが出来るアーティファクト。

この三つの要素が加わり、元祖チートキャラのエヴァンジェリンと

養殖チートキャラのカナメが織り成す原作輪姦物語！

三人の合法口リ魔法少女と一人の合法シヨタ魔法騎士。

そして鏡に映る無限の旅路。弱虫な少年と、心優しき少女。

三人の思いと二人の想いが重なる時、新たな奇跡は幕開ける。

プロローグ（前書き）

この番外編は、ネギ達が魔法世界に旅立った直後の面々がリリな世界に来る話です。

私の妄想が天元突破した結果に生まれた作品ですので、粗が目立ちますが、ご勘弁の程をお願いします。

プロローグ

ネギたちは魔法世界に旅立った。これからきつと、色々あるだろう。既に闇の魔法を習得済みの上に、餞別にネギ専用に作り上げたデバイスとカートリッジを渡したんだ。

きつと、どんな波乱と困難が待ち受けていても、それを切り抜けて勝つだろう。俺は信じてる。絶対に勝つて。

もう、俺達が出る幕はない。既に紅き翼は20年前に解散したのだ。何時まで経っても俺達が居たんじゃ、後釜が育たない。

ただ、弟子であるネギと小太郎を育て、俺に出来ることはもう無くなった。なら、俺達がした事を教訓に、俺達が正したことも教訓にいつか、俺のした事が後世になっても教訓として残るように。ただ、俺達の誇りはこの世界の人間の中に息づく。それでいい。老兵は死なず、ただ去るのみ。それでいい。

『神、頼む』

『本当によいのか？このままその世界で伝説の人間になる事も出来るんじゃないぞ？』

『いいんだ。歴史書の何処かに書かれてるくらいで。何時までもここに居たんじゃ、誰も前に進めなくなっちゃう』

『ふむ……潔いの。それでは、送るぞ？ワシでも何処に送られるかはわからぬ。それでよいな？』

『ああ、それでいい』

『うむ、では、送るぞ』

そう言うと同時に、足元に光が満ちる。周りに騎士甲冑を身に纏い、俺達を守るように立つ俺の守護騎士達。

俺と手を繋ぎ、何時までも俺と共に在ると誓ったエヴァンジェリン。その世界に行くのは俺達だけでいい。そう、俺達だけでいいのだ。

「本当にいいんだな？今ならまだ、ここに残ることも出来るぞ？」

俺の言葉に、シグナムがフツと笑う。

「我等夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり」

「我等が主、夜天の王、国後要の名の下に」

「我等、雲耀の騎士団。朽ち果てるその時まで、主が下に」

最後にリインフォースが付け加える。どこかで聞いた覚えも在るセリフだ。

「フンッ……私は契約で縛られているのを忘れたか？エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは国後要を支え続ける……とな」

「ああ……分かった。それじゃあ、行こうか」

そう言うと、俺達は光に包まれ……この世界から消え去った。

この日、魔法世界に名だたる紅き翼の大英雄、国後要と、その騎士団、ヴォルケンリッターは永遠に歴史の表舞台から消える。その功績と誇り高き姿のみを人々の間に残してだ。

俺達が転移した場所は、どうやら日本らしい。幸いにして夜だったから、気候と星の位置で大体分かったのだ。季節は夏の終わり頃のようにだ。

まずは情報収集だな。戦闘の音も聞こえてこないし、強い魔力を感じる人間も居ない。日本は何処でも平和なのだろうか。

ふと気付く。随分と街が暗い。電灯が殆ど灯っていないのだ。もしや、平和ではなく、殆どの住人が死に絶えているのか？

状況調査の為に、町中にサーチャーを放つ。その結果分かったことはとんでもない事だった。人が死んでるわけではなかった。電灯がないだけだ。

本当に全くない。火を使って灯りを取っているのだ。頭がどうにかなりそうになりながらも情報収集を続けていく。結局分かったのは、今が1840年だと言う事だ。

既にアヘン戦争は勃発しているらしい。どうしろっていうんだろっね……魔法はどう考えても広まってないし、オカルト系統もあるわけじゃない。

強いて言うなら、世界各地に突然変異のような形でA A以上からSランク程度の魔力資質を持つ奴が居るってくらいか。たまにCやB辺りも居るが、そいつらは少ない。

全体からすると、不思議とA A以上の魔力持ちが多い。まあ、リンカーコアを蒐集する必要も無いのだから魔力を調べる必要もないのだが、不思議な物だ。

この世界の魔法技術は秘匿されているのだろうか？秘匿されてるにしても、もっと魔力持ちがいてもいいものだと思うが……？

「カナメちゃん」

「うん？」

「次元世界があるわ。けど……戦争をやってる」

「戦争……か」

大戦を思い出すな。

「魔法技術はあるか？」

「ええ。それも、強力な質量兵器も使ってる。核爆弾以上の威力を持つ化学兵器が……」

「恐ろしいな……」

「……うそ……これ、ミッドチルダ式の……？」

「なにっ！？見せる！」

言うと同時に、シャルルが映像を映し出す。映像の状態は悪い。サポート専門のクラーヴイントでこれなのだから、夜天の書では何も見えまい。

デバイスらしきものを扱い、魔導師たちが血みどろの戦争を繰り広げている。魔法世界よりも酷い戦争だ。

核爆弾以上の威力を持つ兵器を使い、ロストロギアと思わしき兵器すらも使用されている。体ごと魔力を貪り喰われ、巨大な魔獣がロストロギアから生まれる。

放たれた巨大な魔力砲が、Sランク以上の实力を持っていると思わしき魔導師を一撃で葬り去る。艦載兵器の猛攻を受けても、魔獣は堪えた様子を見せない。

このままいけば、恐らくはアルカンシエル並みの兵器が使用される可能性がある。数百キロ単位の次元歪曲攻撃を受ければ、この星は崩壊を迎えるだろう。

「チツ……援護に向かおう。シャルル。転移魔法頼む」

「はい」

カナメちゃんは優しいんだから。とでも言いたそうな表情をしているシャルルが転移魔法の準備を始める。

「フン……やはりカナメは優しいのだな」

「ここで恩を売っとけば、この先やりやすいただけ……」

「素直じゃないんだから、カナメちゃんは」

うぜえ。

他の騎士達もみんなそんな顔してた。夜天の書に戻したるか。そんな事を思いながらも、転移魔法の準備が完了した事を告げられる。すでに全員騎士甲冑を装着しているので問題ない。

ちなみに、エヴァには最近俺が作り上げたデバイスを贈ってある。武器を使うこともないし、魔法は自分だけでどうとでもなる。なので魔法の補助をする為のブーストデバイスで十分だった

ブーストデバイス、ノーライフキング。味方の補助ではなく、自分の魔法の威力をブーストするためだけのデバイスだ。俺達は俺達で必要ない。

バリアジャケットは黒いドレスのようなものだ。見せパンでも見せるのは腹立つので、貞淑なデザインにもらった。エヴァは気に入ってるようなのでいいや。

転移が完了すると、魔獣が放つ莫大な魔力が風のように感じられる。恐らく、魔力値は俺と同等。しかし、こっちには俺並みの騎士が五人と歴戦の魔法使いが居るのだ。

（あー、あー、本日は夜天なーりー、本日は夜天なーりー。こちら通りすがりの夜天の王。こいつヤバそうなんで助太刀します）

それだけ言うと、俺とリインフォースがベルカ式の砲撃魔法を次々と起動していく。唐突に現れた巨大な魔力反応に反応したか、魔獣が涎をたらしてこちらを見つめる。捕食するつもりか。

振るわれた豪腕。ヴィータとザフィーラが前に出て、防御魔法で受け止める。シャマルがさかさず二人にフィジカルエンチャントを施し、体制を崩させないようにする。

シグナムがカートリッジをロードし、シュランゲフォームに変じられたレヴァンティンを振るう。二人が受け止めている豪腕に蛇腹剣が絡みつき、紅い焰が迸る。

振るわれた豪腕が細切れにされ、炎熱変換によって生み出された莫

大な熱量の炎が肉を焦がす。耳をつんざくような悲鳴を魔獣があげ、涎が溢れる口から光が溢れる。

それをヴィータがギガントフォームに変じさせたグラーフアイゼンで殴り飛ばすことにより、明後日の方向へと強大な魔力砲撃が放たれる。

「リイン。あわせろよ」

「ええ」

ようやく準備が完了し、空に巨大な魔法陣が展開される。体の全身に環状魔法陣が幾重にも重なり、空には巨大な魔法陣が数十以上儀式魔法レベルの魔法が数十。二人で五十近いAAランク以上の砲撃魔法の数々。作つたはいいが、強力すぎて世界を滅ぼす気かとエヴァに突っ込まれた魔法である。

魔力の十分の一を一気に使用する強力な儀式魔法。夜天の書の処理能力があるからこそ出来る魔法だ。ちなみに俺の十分の一というのは莫大な量である。

Sランク魔導師レベルのナギの魔力量が250万程度でこのかの魔力量が280万、俺は5600万である。

魔法が起動し、大量の砲撃が放たれていく。ラグナロク、スターライトブレイカー、サンダーフォール、フォトンランサージエノサイドシフト、フリースヴェルグ、アーテムデスアイセス。

千の雷や燃える天空、最早節操無しと言えるほどの多数の魔法が魔獣を飲み込んでいく。莫大な魔力が空間を揺らし、轟音が耳朶を叩く。

煙が晴れた後、そこには既に瀕死の魔獣が居た。手足はもがれ、既に動くことも出来ぬというのに、首だけを動かし、何とかこちらへと魔力砲撃を放とうとする。

体を覆っていた魔力は殆ど消えている。先程の防御で殆ど消費したらしい。思念通話でこちらに逃げるか防御するかを呼びかける声が聞こえる。だが、不要だ。

唐突に魔獣が凍り付いていく。エヴァにトドメを刺して貰う為に、遅延呪文で永遠の氷河を準備してもらっていたのだ。

「おわるせかい」

静まり返った空間に、指を弾く音が響く。それと同時に、魔獣を包み込んでいた巨大な氷が砕け、魔獣は木端微塵となる。

空をキラキラとした氷の結晶が舞う。紅い鱗を持っていた魔獣が砕け散ったため、紅い雪が降る。

一瞬遅れ、歓声が溢れた。当然だろう。あの魔獣は古龍である龍樹よりも遥かに強力。恐らくはナギとラカンが二人がかりでやっと倒せるかというくらいの強さ。

つまり所、総合評価SSランク以上の魔導師が二人係で倒すべき相手なのだ。しかも長期戦で。しかし、この戦場には既に疲弊した魔導師しか居ない。つまり所、敗退必須だったのだ。

こちらへと数人の魔導師が近づいてくる。俺達は特に何もせず以待った。

「ご協力感謝します」

ミッド語でビツと決まった敬礼をされた。俺は軍人ではないが、魔法世界に居た頃に軍で少々訓練した事がある。戦争が終わった後に俺の戦いは矢鱈滅多ら魔法をぶつ放すのと、障壁を頼りにカウンタ―を叩き込むだけだったからだ。

人の殴り方に拳の振り方、走り方やらをやらされ、しっかりと軍人としての教育を終えた。ちなみにだが、俺は名誉准将の位がある。少将よりも偉くなくて大佐よりも偉いのだ。准将としては基地司令

となる権利がある。

という訳で、ヘラスの空軍式の敬礼を返す。鬼軍曹に仕込まれた敬礼は60年以上前の事でも覚えてるものだ。なつかしいなあ、ラッセル軍曹元氣かなあ。ゴリラみたいだったから元氣だろうな。

「気にしないでくれ。たまたま目に入っただけから助けただけだ」

「いえ。このままでは部隊の壊滅は必須。それを助けてくださり感謝の言葉ありません。司令官が礼を言いたいそうなので、ついてきていただけますか？」

「分かった」

ここで反抗してもいい事ないしね。というか、生活基盤を手に入れる為に助けに来たんだし。素直に連れていかれ、左腕を吊っている男に会った。

「此度の作戦の援助。真にありがとうございます。私は時空統合軍ヘルトラス方面第11軍クラウ基地司令官のクライル・アーカス准将です」

「ご丁寧にも。ヘラス帝国空軍の国後要名誉准将……なんだけど、どうやら時空漂流してしまっただけだな。あんまり意味がないから気にしないでくれ」

咄嗟に敬礼しようとしたクライルとやらを押し留める。ちなみにだが、名誉准将は名誉が与えられるくらいの働きをした人に贈られるものだ。

つまり所、階級が准将だった人が凄いことすれば頭に名誉がつくと考えればいい。階級としては同じだけど、名誉准将が与えられてる

って事は凄い人なんだろうと思ったんだろう。あるいは先任だと思っただけか。敬礼いらないんだけどね。

「しかし……時空漂流、ですか？」

「ああ、帰る望みはもうない。さっぱりだね。ぶっちゃけた話、ここに來たのだって飯が喰えるかも知れないかと思っただけだからだ。

腕には自信があつたし、まあ、流石にあんなレベルのバケモノとは三回くらいしか戦ったことはないが……」

ちなみに、三回とは造物主とリヨウメンスクナ完全版、龍樹である。造物主はさっきのバケモノの数百倍は強かったが。

ああ、ついでに言っておくと完全復活してるリヨウメンスクナは千の雷や永遠の氷河の一発くらいじゃ死なん。ナギの千の雷は半分ほどレジストされるくらいのバケモノだ。

魔力としては俺よりは低かったと言つて置く。あれ？今更だけで俺って凄いバケモノだな。伝説の鬼神よりも強い魔力って馬鹿なの？死ぬの？

龍樹についてはヘラス帝国の観光の際に喧嘩売られたから買っただけだ。結構強かったぞ。あの時は確か魔力を封印してたから、気だけで戦ってたはず。

「でしたら……指揮経験はおありですか？」

「んー……」

一応、ヘラス帝国の空軍は小隊が五人か六人だったから、小隊規模の指揮なら平気なはず。それに尉官から将官までの教育に指揮官教育も受けた事がある。

「小隊規模の指揮なら何百回も。中隊や大隊規模はないけど、一応、尉官、佐官、将官教育を全部受けてるし、指揮官教育も受けてる」

「となると……先程の魔獣を倒した事から鑑みても戦時大尉……というところでどうでしょうか？扱いに関しては将官になりますけど」

面子からして大尉が限界だけど、もしもヘラス帝国が出てきて文句言われたら自分の首が飛ぶ。だから階級は大尉だけど扱いは将官になると言う事か。

俺としては大して気にもしないんだがなあ……紅き翼の頃は大変だったしな。周囲を障壁で覆って地べたに寝る。食料がなければ草でも齧ってる。ホームレスかなんかか？

まあ、そんな事は滅多になかったけどな。だって誰かがドラゴンだろうとなんだろうと倒して持つてくるし。ちなみに俺は兎とかは全然取れなかったので魚が巨大生物しか取れなかった。

魚に関してはバインドで吊り上げた。サーチャー飛ばせば水中でもある程度見えるから、結構楽。巨大生物は肉が減ったりしないように打撲で殺す。全力全開で気を込めれば大抵の場合一撃で死んだしね。

「ああ、それじゃあ、俺の仲間はどうなる？」

「えーと……どういった関係ですか？」

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。カナメの妻になるものだ」

クライルが吹いた。俺も吹いた。何ゆえ堂々と公言する？

「つ、妻、ですか……」

俺の事をちらちらと見る。

「俺の裸が見たいのか？変態め」

「違いますっ！」

クッククックク……若いなあ。若いと言っても二十代後半だろうけどね。でも、二十代後半で准将って言うのは凄い。他の場所を知らないから分かんが、凄いはず。

普通は准将になるのは順当に行っても三十後半か四十前半だからだ。大抵の場合は四十を超えるのが当たり前。二十代後半ならどんなに上手く行っても少佐辺りが限界だろう。

そこら辺は魔力量とかが原因なのかも知れないけど。見た所、Sランク程度の強さはあるそう。どうやらこの世界はリリカル世界なので、魔力量と戦闘力さえあればドンドン出世できてしまうのだろう。原作で八神はやては20くらいで二等陸佐になっていたが、アレは軍で言うところの中佐だ。ちなみにリンディは次元航行艦の提督なので、将官クラスである。

若く見積もれば二十代後半（15くらいでクロノを生んだとしてクライドだったけ？ロリコンか？仲間だな）なのでこの世界では二十代で将官クラスになるのは、それほどおかしいことではないのかもしれない。

「剣の騎士シグナム」

「鉄槌の騎士ヴィータ」

「盾の守護獣ザフィーラ」

「湖の騎士シャマル」

「幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

お前等それ練習してんのか？まあいいや。

「あー……リインフォースはユニゾンデバイスで、他の四人は俺の騎士だ」

「マジっすか!？」

クライルが目を驚愕に見開く。そりゃあそうだろ。ユニゾンデバイスなんてこの時代には殆ど現存してないのだろうし。

「ちなみに、使う魔法はエヴァ以外は全員古代ベルカ式。エヴァは既存の魔法とは全く違う種類の魔法を使う」

魔法陣が出ないしな。あっちでは魔法陣を使うのはよっぽどの大規模魔法か、ヘタクソな奴が補助に使うかだ。

ちなみに、俺達は別にヘタクソではない。アレは負担を減らすためのものでもあり、衝撃の緩和や魔力の収束をしたり、砲台として扱うからだ。

というか、系統が全く違うので比較の仕様がなない。ただ、強いて言うなれば、ネギまの魔法は使い勝手がいい。炎熱変換や氷結変換、電気変換もないのだ。

単純に生来の属性という物に左右される。ちなみに、俺は光、雷、火の順番で得意で。何故攻撃に偏るのだろうか？

また記憶を覗き見る魔法は意識を喪失してればレジストは不可能だし、犯罪者に対してギアスクロールで制約を施せば二度と犯罪が出来なくなる。

魔力が全くなくとも魔力供給がされていれば魔法が使えるし、アー

ティファクトがある。非魔導師でも戦闘が出来るようになるのだ。人材不足はなくなるだろう。

それにこっちの魔法じゃ出来ない事も出来る。例えばだが、Aランク魔導師程度の力でも数回は千の雷が使えるのだ。アレは半径五十メートル以上の広範囲殲滅魔法なので、こっちは違って誰でも扱える。

雷の暴風ならこっちで言うCランク魔導師でも使える。アレは威力としてはデイベインバスターくらいだと思ってる。完璧に優劣が出てるね。

ただ、使い勝手はネギま魔法がよくても、習得速度はリリカル魔法の方が速いだろう。デバイスが術式を構成してくれて魔力も勝手に運用してくれる。便利過ぎワロタ。

「こんな風にな」

パチンと指を弾くと、エヴァの指先に炎が灯る。

「炎熱変換じゃないぞ。氷とか出してみて」

「？」

よく分からないと言った風になっているが、言われたとおりに氷や光を生み出してみせる。

「なるほど……確かにこれは……デバイスは使っていないのですか？」

「これは完璧に頭の中で術式を組み立てて制御は自分でやってる。俺も出来るぞ」

そう言っと、俺も掌に炎を生み出してみせる。もつと派手な方が分かりやすいのだが、天幕を消し飛ばすわけにも行かない。

雷の暴風なんぞ出せばクライルは消し飛ばし、千の雷なんぞ出そうものなら俺のおかげで助かった部隊は俺の所為で壊滅だ。別に敵側に撃つてもいいが。

「なるほど……これは確かに。ええ、分かりました。では、エヴァンジェリンさんは独自系統の魔法を使うという事にしておきます。

では、こちらの書類に各種項目を記入してください。それと、デバイスに部隊の認識票を送ります。貴方はカナメさんの部隊という事になりますので」

「分かった」

ひとまず、言われたとおりに項目を埋めていく。

「今は何年だ？」

「次元暦674年ですけど？」

なんでそんなことを？といった顔をしている。となると、俺は次元暦593年生まれか。エヴァは次元暦74年生まれかな。

「ちゃんと正直に書くんだぞ」

「分かっている」

ニヤリとした顔でエヴァが笑う。クツクツク。

えーっと、魔力ランクはエヴァがS+でそれ以外は全員SSSランクと。術式は古代ベルカ。使用デバイスは夜天の書、シユベルトク

ロイツ、リインフォース。

性別男。出身世界97管理外世界だけど、今は管理外世界ではなく、外部世界97番というらしい。時代が古いと色々変わるんだなあ。

該当世界での生年月日は1859年5月18日生まれ。家族構成は両親と姉。指揮官経験有。戦功……多いな。全部書かないといけないだったな。

えーっと……グレートブリッジ奪還作戦。詳細も書かないと駄目？200キロ超の巨大要塞奪還。後は68回の出撃。夜の迷宮の破壊。造物主の打倒。

勲章は……国民栄誉賞、俺は一応ヘラス帝国の国籍を持ってる。終戦締結名誉賞。紅き翼。神金龍翼賢石賞（オリハルコンと賢者の石で作った勲章）

皇女の護衛の勲章、王女の護衛の勲章、立派な魔法使いとして二十年働いた勲章、etc etc……多すぎるだろ。というか、何で全部勲章なんだ？賞状とかでもいいだろ？

結局全部で39個になってしまった。もしも俺が軍服を着たら、前面が全て勲章で埋まってしまうほどの量だ。俺用に特注したサイズだしな。まあ、儀礼用の軍服につけるんだが。ちなみに、勲章は格納領域に入れてある。記念に持ってきた。

全ての項目を書き終え、クライルに渡す。読み進めていくうちに噴き出し、顔を真っ青にする。

「どうした？顔色が悪いぞ？ん？」

「わかって聞いてるんですよ……？なんですかこの功績は！明らかに不味いじゃないですか！僕の首が飛ぶくらいじゃ済みませんよ！？統合軍はおしまいだあ！」

「いや、だからね。俺の故郷は絶対に帰還不能だし、あっちがこっちを見つけないことはないから。見つけたとしても五百年以上先だね」

多分、そんなくらい。あの超鈴音の事件から時間移動が出来たのだから平行世界移動も出来るんじゃないかと言う事で、新たな研究が始まったのだ。

俺はそこに適当に次元世界についての情報を少しだけ渡した。あの世界にも一応次元世界はあった。ロクな場所はなかったが、幻獣が平然と闊歩してる場所もあった、何かの役にはたつだろう。

魔法的には証明されるだろうけど、今度は移動の方法だろう。あっちの魔力炉は大した出力でもない。次元の壁を越えるにはそれ以上の出力がなければいけないのだ。

更には場所の指定等の高度な演算。仮に実現できたとしても、少なくとも五百年は科学が進歩しないと無理だ。それまでに滅びていないかが疑問だけだね。

というか、仮に見つけられてもここに来れるのかどうか。ここが次元世界の一箇所だって言う証拠もないし。別世界だから来るのはほぼ確実にない。

「本当ですね!？」

「ああ、本当だって。しつこいな」

「もしも向うからいちゃもんつけられたら飛ぶのは僕の首なんですからね!？ 比喩的にも物理的にも!」

そりゃあ大変だ。だが俺には関係ない。物理的に切られそうになったら助けてやるから安心しろ。

「はあ……って、これは何の冗談ですか？」

「あ？」

「生年ですよ。次元暦593年って言ったら81年前ですよ?」

「何かおかしいか?」

「どう見たって貴方は10歳にしか見えません!」

「俺は不老だ」

「不老って……常識を期待した僕が馬鹿だったのかな……他の人たちも同じだし……次元暦74年生まれ?ハッハッハッハ、面白い冗談ですね」

「私は不老不死だ」

「すみません、胃が痛いので軍医のところに行ってもいいですか?」
居なくなれると面倒なので、催眠魔法で胃の痛みを感じさせないようにする。

「うっうっ……なんで僕がこんな目に……」

「五月蠅い。早く認可しろ。外を歩けないだろ」

「ちっくしょー!」

天幕に男の咆哮が響き渡った。

あれから幾らかの事情を説明してもらった所、ここにロストロギアを悪用している組織があり、その組織を壊滅させる為に戦闘を行っているらしい。

時空統合軍は次元世界の平和を願うために設立された組織で、軍とはいうものの徴兵権限もないらしい。

その為、次元世界全体に広がっているのに、人員は三万にも満たないという人数らしい。しかも、戦闘員は半分以下。

更には軍というものの、治安維持の為にしか動いておらず、戦争のような行動はしていないらしい。どちらかというと自治軍というべき存在だろう。

恐らくは時空管理局の前身とでもなるべき存在だと推測できる。話を聞いている限り、そうとは思えない。

ここに来たのも、そのロストロギアを悪用している組織が余りにも大規模すぎるかららしい。この世界も元はと言えば無人世界だったらしいのだが、そこを利用しているらしい。

相手側の人員は軽く五千を超えると推測されており、現在Sランク魔導師が二人、S・ランク魔導師が一人、AAAランク魔導師が六人も確認されているらしい。

今までに相手側から接收したロストロギアは20を超えており、全てが大災害を起こしかねないレベルのロストロギアらしい。先程の魔獣は接收されるくらいならと起動されたものらしい。

相手側の基地は要塞型ロストロギアであり、こいつ等を倒さない限りは次元世界に平和は訪れない。ならば、俺達が協力しないわけがない。

既に老兵といえども、俺達は平和を願って戦った紅き翼の一員。それに、今からなら時空管理局の腐敗を防げるかも知れない。予防策は発症の前に打たなければいけないのだから。

二日後。全員の回復を終えた。というのも、俺がアスクレピオスの杖とヒュギエイアの杯を使って治療したからだ。

人の身でありながら、優れた医療技術によって死者すらも蘇らせ、後に神の位にまで上り詰めたアスクレピオスの象徴たる杖はありとあらゆる傷を治し。

その傍に仕えたアスクレピオスの娘、ヒュギエイアの持つ杯にはありとあらゆる病を治す薬とも水ともつかぬ液体が治められている。この二つを使って負傷者を治し、流石に手足の欠損は治せないのが俺が再生魔法を使って治した。医療側の魔導師の負荷も減らせたし、戦線に復帰できる魔導師も増えた。

それに、アタッカーよりのSSSランク魔導師が三人。結界、治癒よりのSSSランク魔導師が二人。最後にS+ランクの特殊な魔導師が一人増えたのだ。これほどの加勢は滅多にありえない。

更に、ダグダの大釜によって無限に食料が出てくる為、糧食の不安もなくなった（本来は徳に応ずるのだが、宝具には関係ないらしい）。あとセーフリームニルも使った。

「それじゃあ、進軍が開始されるんだな？」

「ええ」

進軍開始まで後五分。世界に響き渡る笛。ギラルホルンを取り出し、それを吹き鳴らすために用意しておく。

というか、俺の持つ王の財宝のチート具合にはあきれ返る。古今東西全ての宝具が入っているというのは本当らしく、日本神話に出てくる宝具すら出てくるのだ。

節操無しもいい所で、中国の寶貝（ほうぐ）ではなくパオペエ、もし

くはホウバイ」まで出てくる。

開始時刻と同時に笛を吹き鳴らすと、戦場に角笛の音が響き渡り、進軍が開始される。

縮地天疆で瞬間移動にも等しい速度で移動し、魔導師に魔法の射手を乗せた拳を叩き込む。属性は雷。雷華崩拳だ。

ちなみに、崩拳というカッコイイ名前がついてるものの、実際はただの中段突きだ。震脚からの中段突きという指定はあるが、結局はただの中段突き。

強いて言うなら、殴るというよりも突き通すという方向性の拳だと言う事だろうか？あと、親指が上に行くようにして放つという決まりもある。

流石に傭兵崩れの魔導師は強く、俺の移動に反応してプロテクションを張っていた。それをぶち破り、くるりと体を半回転して肩と背中を使った体当たりを繰り出す。

今日は中国拳法とネギま魔法だけという縛りで戦うことにしている。まあ、騎士甲冑は展開しているが、これも本当ならやめたかったのだ。だってクライルが泣いて頼むし。

怯んだ魔導師の腹に指を突き刺し、遅延呪文で用意しておいた白き雷を解放する。白雷掌だ。黒こげになった魔導師を蹴り捨て、近くに居た魔導師に魔法の射手を連射。

「ナイト・スカイ・ナイト・アラルブラ！来れ雷精 風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！」

ナイト・スカイ・ナイト・アラルブラは俺の始動キー。カタカナで書くとは分かりにくいけど、英語にするとこうなる。Night sky Knightとなる。俺は英語が得意じゃないので適当だ。夜天の騎士という意味なんだが。

「雷の暴風！」

こちらへと砲撃魔法を放ってきた魔導師へと放つ。砲撃中は動けない。なら、こちらがそれ以上の攻撃力で叩き落せばいい。

俺の放った縦二メートル程の雷の暴風が相手の砲撃魔法を容易く飲み込み、そのまま相手の魔導師に直撃し、バリアジャケットがほんの数瞬の抵抗を見せた後、蒸発して消滅した。

俺の視界の先では、エヴァが断罪の剣で男を切り刻んでいる所だった。こつちの世界で言う魔力刃に似ているのだが、実態は精霊の力が集まったフィールドだ。

つまり所、フィールド干渉攻撃タイプの攻撃でなければ防げず、防御するならば炎や氷を防御する対気候バリアと普通のバリアを同時に展開しなければならない。

事前情報がなければ確実に喰らってしまう攻撃だ。まあ、空間歪曲防御魔法や重力場の盾を使えばそれ一つでも防げるのだが。こつちでもデイスティンションシールドがあるが、あれはSランク防御魔法だ。

ただの魔力刃にしか見えない攻撃では、そんな物は使わないだろう。まあ、手から直接発生させているのだから、それくらいわかってもらわないと困るが。

「いづくぜえ！カナメ適当に全力右パンチ！」

限界まで圧縮された気を右拳に乗せて放つ。凄まじい轟音と共に直撃し、ナグルファルが展開している防御フィールドがたわむ。

更に気の出力を上げると、たわんだ防御フィールドが一気に砕け散る。そして、防ぐべき壁を失ったナグルファルに俺の気が激突する。轟音、後に凄まじい衝撃。まるで核兵器が直撃したかのような音と共にナグルファルの一部が吹っ飛ぶ。

攻撃に対する迎撃か、艦載砲や対空砲が火を噴く。質量兵器と魔導兵器がごちゃ混ぜになった迎撃装備だな。

背後の統合軍側の艦隊が一気に火を噴く。6機の艦が限界までチャージされた主砲を解き放ち、ナグルファルに殺到する。

それに対し、ナグルファルは奇妙なフィールドを展開して見せた。そこに主砲の砲撃が吸い込まれて、消えた。

「冗談キツイぜ……」

悪夢のような光景だった。ナグルファルの損傷部位が再生を始め、迎撃の火勢が一気に強まる。恐らくは純粹魔力砲撃をエネルギーとして吸収したのだろう。

エネルギーをオーバーフローさせれば自壊するかもしれないが、エネルギーの許容量も消費量も分かっていないのだ。それは無茶というもの。

もう一斉射して、動きを見るのだろう。今度はフィールドの展開数を見るためか、主砲の発射タイミングが少しずつれている。中々手い連携だ。

しかし、それすらもナグルファルはすべて吸収してみせる。艦隊からの思念通話で、純粹魔力砲撃による攻撃の禁止が言い渡される。それと同時に、凄まじい地響きが襲う。陸戦魔導師が動きを止め、敵側は喜悦の表情を浮かべる。気味の悪い笑顔を見せた魔導師を殴り殺し、何が起きているのかを見極める為に動きを止める。

ナグルファルが浮上した。そして、唐突に俺の脚が何かに掴まれる。咄嗟に振り払い、目を向けると、そこには頭のない魔導師が居た。

「嘘だろっ！？ネクロマンシーかよ!？」

今度は塵も残さないために炎で焼き尽くす。ナグルファル……死者の爪を集められて作られた船は伊達じゃねえな……しかも死体を動かすとか、冗談じゃねえ。

下を見れば、死体が動き出して動揺が広がっている。咄嗟に下に移

動し、炎で結界を作り出す。死体は炎に弱いのが当たり前だからだ。というのも燃え尽きたら復活できないし。

この程度だと、強力なバリアジャケットを装着している奴には意味がないだろうが、普通の魔導師では突破するのは難しいだろう。

仮に出来たとしても、後方の部隊が倒せばいい。思念通話で炎熱の変換資質があるものと炎熱魔法が使える奴は前線に出るように指示する。他の奴等は後ろでバックアップ。

死体となっている空戦魔導師がこちらへと一斉に飛翔を開始し、俺はそれを燃える天空で迎え撃つ。

他の面々に目を向けると、苦労しているようだ。シグナムは剣という武器の特性上炎で敵を焼き尽くすしかない、しかも一対一に特化したベルカ式の使い手だ。

一応、広範囲攻撃のシランゲフォームがあるが、あれも斬撃。相性は悪い。向うで習った魔法で相手をしているが、ネギま魔法は余り練習していなかったのが悔やまれる。

ヴィータも苦戦している。ヴィータは打撃で一对一特化。シグナム以上に相性は悪い。やっっぱちになってナグルファルをギガントフォームで殴り続けている。いいぞもつとやれ。

ザフィーラは鋼の楔で敵を拘束。死体には思考能力がないため、バインドブレイクが出来ない。他の魔法はデバイスがやってくれているようだ、バインドブレイクは自分の脳味噌でやらなくてはならないのだ。

シャマルは負傷者が一気に増えたため、結構苦戦しているようだ。アレでは魔力が持たないかも知れないな。一度戻って、デイバイドエナジーで回復させるべきか。

リインフォースは大活躍だ。広域攻撃は死体に対して非常に有効だ。デアボリックエミッションやフリースヴェルグで敵が跡形もなく消滅していく。

エヴァはというと、広範囲殲滅呪文で敵を圧倒している。火炎魔法は相性が最悪なので使っていないが、こおる大地などで凍りに閉じ

込めている。アレもいい手だな。

まあ、氷結資質は変換資質で最も希少な資質だから、こつちには殆ど居ないと考えていいだろう。一万人居れば五人居ればいいほうな程に希少なのだ。ちなみに炎熱は千人居れば三十人は居るし、電気は千人居れば十人は居るくらいだ。

エヴァのアーティファクト、プライミッツ・マードーも大活躍だ。真っ白な姿が血濡れになって紅く見える。俺にとってはエヴァに見えるのだがな。ちなみにヴォルケنزには俺に見えるそうだ。

状況は最悪。このままでは俺達の魔力が尽きたら戦線は崩壊する。相手を完璧に殲滅し切れればそれで勝ちなのだろうが、要塞からは敵がどんどん出てくる。

出し惜しみはしてられないか……宝具には出来るだけ頼りたくなかったんだが、この状況じゃあ仕方ない。このままだと、被害が拡大しかねない。

「行くぞ、エア」

乖離剣ではない。エアの剣だ。ヒツタイトに納められていた天空と大地を切り離れた伝説の剣だ。

銅の配合率が高く、鈍く煌く青銅の剣。だが、そこに秘められた魔力は桁違いなほどに高い。

恐らくは乖離剣エアはエヌマ・エリシュとエアの剣が混同された結果の剣なのか、あるいは乖離剣エアからエアの剣が生まれたのか。それは誰にも分からない。

ただ一つ言えるのは、この剣は乖離剣エアよりは劣ると言えども、凄まじい威力を持つ剣だと言う事だ。乖離剣エアは時空断層や次元震が起こりかねないので封印してあるのだ。

射線には誰も居ない。先程の勧告で下げられたのだ。

エア！

「天地切り裂く始まりの剣！」

解放された真の名の下に、風が駆け抜ける。空と地を分けたのは、空を駆け巡り、大地を乾かす、始まりの風。

金色の風が空間を切り裂いて行き、ナグルファルへと直撃する。空間ごと切り裂かれたナグルファルは自壊を始める。

とはいう物の、真ん中から分かれたれ、後ろ側のほうだ。恐らく、あちら側にエネルギーの生成器官及び貯蔵器官があったのだろう。耳をつんざく様な悲鳴が上がる。何かと思えば、ナグルファルから聞こえているのだ。生態型ロストロギアだったのか？古代に作られた魔道兵器でありながら魔道生命だったと言う事か。

その咆哮には痛みと悲しみ。そして喜びが溢れているようにも思えた。遥かな昔から生き続け、死ぬ事もなかった。そんな苦しみを理解するほどの知能があったかも分らない。けれども、魂の牢獄にも等しいその堅牢な肉体は滅び、その魂は解放されていく。

「主よ、憐れめよ」

祈りの言葉が届くはずがなくとも、言わずには居られない。

生態型ロストロギア・ナグルファルは崩壊し、後には何も残らなかった。

後はあっけなかった。降参するものは受け入れ、それでも戦おうとするものは倒した。それで終わり。

第一話 それから（前書き）

今回はダイジェストというか日記形式みたいなもんです。

第一話 それから

それからは大変だった。余りにも強すぎたし、俺が別に意見を言わずに従うので、あちこち渡り歩いて戦い続けた。

仮契約の方法と魔法陣の書き方。仮契約カードの使い方などを伝えた。これだけで戦力が一気に増えた。一般人でも強力な武器が使えるからね。

何時の間にか平和の守護者という二つ名がついてた。俺自身平和を願って戦ってるから願ってもない。

エヴァが妊娠した。後方に退いてもらい、ネギま魔法を本格的に教えることとなった。ミッド、ベルカの二つの魔法が主流だったが、そこにアース式魔法が加わった。アース式とは無論の事ながらネギま魔法である

仕事が忙しい。次元転移を単独で使えるほどの馬鹿げた魔力と制御力があるので毎日帰ってるけど、出来ることならずっと一緒に居てあげたい。

おなかの大きさはあんまり変わらない。そもそも妊娠した吸血鬼の知り合い所か、吸血鬼の知り合いすら居ないので、子供がどうなるか自分でも分からないらしい。

エヴァが妊娠して一年と半年が経った。未だに生まれないしおなかも大きくならない。そういえば来月は結婚記念日だ。何を贈ろう？

散々迷った挙句、地球に行って沈没船からワインをこっそりサルベ

ージしてきた。500年物のワインだ。潮流の影響が少ない場所です。探したので、500年間常に同じ状況で保存され続けたワインだ。

一本ほど試飲したところ、凄まじく美味かった。200本ほどあったので、不要な30本をオークションにかけて売り飛ばした。驚いたことに資産家が200万ドルで購入してくれた。

結婚記念日にワインを贈った。魔法で年代計測をしており、凡そ1400年代のワインだという事が判明している。一週間かけて探し続けたのだ。30年ほど小刻みで集めてある。

どれがエヴァの生まれた年か分からなかったけど、頑張って探した。その話をしたら、1397年生まれだと教えてくれた。聞けばよかった。

エヴァが生まれた年のワインと一緒に飲んだ。エヴァには手編みのマフラーを貰った。今の戦場が寒い所だっけと覚えててくれたんだ。嬉しかった。

戦争がまた一つ終わった。終わりの見えない戦争は何時終わるのだろうか？家に帰ってエヴァに癒してもらった。エヴァが帰りを待っていてくれるから俺は頑張れる。

エヴァの妊娠が判明して二年と四ヶ月が経過した。シャマルの診察では生きているのは確かだそう。自分が戦えないのが心残りだとエヴァが拗ねた様な口調で言った。家を守ってくれているのが俺には嬉しいよ。

クライルから唐突に呼び出された。行ってみたら、ベアトリックスという女性とグラーションという男を紹介された。二人とも知的な雰

困気がする奴だった。

なんでも、統合軍の最高権力者が殺されたので、今の三人が新たに就任することとなったらしい。そこで、俺にも就任しないかという相談だった。もしかして最高評議会なのか？

是非もないので所属しておいた。四人はバランスが悪いので、エヴァも加わることに。600年生きた戦術眼は伊達ではないし、何が正義で何が悪か理解している。もしも俺が死んだら最高評議会の腐敗を正してくれると信じている。

最高評議会になったものの、俺は相変わらず戦場に出てる。出来ることは全部やっておきたい。出来るだけ戦争も早く終わらせたいし。

大規模次元震で六つの世界が滅んだ。後もう少し、俺が早く封印処理できれば滅ばなかったかもしれない。こんなのは仮定の話だと思っ
ていても、思わずには居られない。

家に帰ったら辛気臭い面を見せるなとエヴァに殴られてしまった。
ごめん、エヴァ。次からはこんなことがないように頑張ればいいんだよな。うん、だったら、君を心配させないように笑おう。

エヴァが妊娠して三年と10ヶ月。負傷者の治療の際にシャマルからの次元間思念通話で産気づいたという報告が来た。一昨日家に帰ったときは全くおなかも膨らんでなかったのに。

すぐに帰りたいが、俺の治療を待っている人が居る。どうすればいいのかわからなくなり、パニックに陥りかけたが、苦しい声でエヴァが俺に生まれてくる子供に誇れるように動けといった。

今すぐ帰って、エヴァの傍に居るのが父親として正しい姿だろう。
このまま治療を続けて、負傷者をなくしてから帰るのも、また正しい父親の姿だろう。

結局、俺は負傷者の治療を続けた。ここで死人なんて出したら、生まれてくる子供に顔向けが出来ないだろう？

アスクレピオスの杖とヒュギエアの杯を乱用しまくった治療を終えた急いで次元間転移。連絡されていた病院に急いで向かっていた所、魔力駆動車に撥ねられた。俺の歩みはそんなものでは止められんぞ。

急いで駆けつけ、紅き翼時代に開発した浄化の炎で汚れを落とし、白衣（という割には緑色）を着用して分娩室に通された。俺にはエヴァの手を握って励ますことしか出来なかった。

生まれた子供は双子だった。男の子と女の子だった。男の子は茶髪で女の子は金髪。茶髪の方が優性遺伝のはずなんだが、どういう事だろうか。アニメ世界だから気にしないべきだろうか。

名前はもう決めてあるんだ。男の子ならルイス。女の子ならリウムだ。ルイスは名高いと戦いという語を含めた名前で、強くなって欲しいという意味を。

リリウムはユリという意味を。ユリの花言葉は威厳・純潔・無垢。ユリのように美しく育って欲しいという意味を。

一応、大昔からエヴァと一緒に居る影の薄いチャチャゼロにも聞いたが、ロクな意見が帰ってこなかった。別に忘れてたわけじゃないんだよ？

二人はダンピールだった。ちなみに男ならヴァムピールで女ならヴァムピールという。大抵の場合、生まれてすぐに死んでしまうのだが、俺はそんな事をさせはしない。

ダンピールが伝承どおりならば、不老不死とは行かずとも、非常に強い再生力と生命力があり、基本的に不老だ。20歳前後まで成長して、そこから成長が止まるはず。

二人からは強い魔力を感じる。恐らく、命の源である魔力が制御出来ずに死んでしまうからダンピールは生まれてすぐに死んでしまうのだろう。

ルイスからはSランク程度。リリウムからはS-程度の魔力。途轍もない魔力だ。出力制限リミッターをかけておかないといかん。

二人にリミッターを施し、優しく抱き上げる。小さく、儚い命だ。もしも、リミッターの存在を知らなければ、このまま死なせてしまったかも知れないほどの。

無垢な命だ。何も知らず、ただひたすらに純粋な命だ。こんな、血に汚れた手で、触ってもいいのかと不安になる。でも、守ると決めたから。

厭われ様とも構わない、背中に罵声を浴びせられようとも構わない。俺は守りたいから。守る手段に誇りはなくても、守ったという事実を誇りにするから。

だから、ありがとう。生まれてきてくれてありがとう。無垢な命にありがとう。きっと俺が、二人を守ってみせる。絶対に守ってみせ

る。

父親として頑張れるかは分からない。けど、精一杯頑張ってみようと思うんだ。だから、見ててくれ。俺が絶対に守って見せるから。

二人が生まれてから一年と半年。次元間の戦争とロストロギアの悪用などは収まった。都市のエネルギーとして使用されていたロストロギア等も回収した。

それが間違いだったかは分からない。使い方を誤れば世界を一瞬で滅ぼしてしまうほどのモノだった。けれども、その所為で貧窮に喘ぐ人も増えたのは確か。

幾ら食糧援助や新たなエネルギーの提供をしても、俺達が正しかったなどと思わない。誰もが平和を願っていた。理不尽な出来事で涙を流す人を減らすために。

だから、薄情と謗られ様とも、血も涙も無いと罵倒されようとも、俺達は戦った。誰もが皆一生懸命だった。涙を流す人を減らすために、その涙の意味を変える為に。

認められなくてもいい。死ぬ人やら悲しみに打ち震える人を減らせればいい。時空統合軍は解体となった。それが形と名前を変え、時空航行監査局となった。

次元航行艦を取り締まり、ロストロギアの違法運搬などをなくすため。やがて治安維持の活動が始まり、時空保安局となった。

時空保安局に裁判所を併合する事には反対した。日本では何の為に三権分立をしたかと思っているのだ。これでは将来甘い蜜を吸う為に

時空保安局を利用する輩が増えるではないか。

時空保安局は時空管理局とはならなかった。人が人を管理しようなどとはおこがましいにも程があるではないか。ただ、平和を守ればいい。

子供達は元気に育っている。ダンピールはどうやら普通の子供より成長が遅いようだ。最初に喋ったのはやはりママだった。次はわんわん。ザフィーラと一緒に居たからな。ザフィーラ狼だけど。

時空保安局の黎明期に生まれた二人。これからどう育っていくのか分からない。けど、元気に育ってくれば、それでいい。でも、何時になったらパパって覚えてくれるのかな？

時空保安局の規模が大きくなってきている。治安維持機構はやはり人が多くないといけないし、人数が居なければ治安維持も出来ない。

幸いにして、俺の宝具、ダグダの大釜やセーフリームニル等を使用して、食糧問題は一切解決。ダグダの大釜は真名解放無しで使う宝具なのだ。

アスクレピオスの杖とヒュギエイアの杯も真名解放無しで使えはするが、やはり真名解放がなければ強い効果は得られない。しかし、治療魔導師が居なくとも強力な治癒効果があるのは確か。

神代の酒や黄金のリング。馬宝石などの珍しい品の力もあり、資金問題は解決している。ちなみに、馬宝石は中国の資産家に売り飛ばした。

草を食わせてやれば勝手に育ち、家に栄誉と繁栄、そして栄華を齎

す。最後には石が割れ、見事な馬が生まれいずるのだ。二十億で売れた。

1900カラットのダイヤモンドが何故か王の財宝に入っていたので、半分に割って元に戻す。あら不思議、損傷が修復されるのでダイヤが二つに増えました。さしあたり五個ほど売り飛ばした。

あくどい？それにつけても金の欲しさよ。別に外道な事はしちやいないんだよ。向こう側の言い値で売ってるんだし。まあ、地球の金があっても物資がなけりや意味がないだけだね。

時空保安局は既に黎明期を向かえ、成長を続けている。嘗ての仲間、クライル達は未だにやる事があると、年老いた体を捨てて脳髓のみで生きながらえた。

数年ぶりに呼び出されて会いに行ったら、これでもまだ友達を続けてくれるかと言われた。俺はあきれ返ったよ。なんで俺に相談しなかったのかをね。

早急にホムンクルスを三体生成し、脳髓の移植措置を行った。遙か昔にあったF計画と同じような物だ。違いといえば、俺のホムンクルスは魔力に依存するものなので既に年老いる事も無いという事か。三人が若返ったものの、これは三人の魔力値が非常に高いからだ。クライルは魔力量だけでSランクベアトリックスはAAAグラーションはS。奇跡の才能とも言えるレベルだ。

リンカーコアは肉体に依存するわけではなく、意思に依存する器官だ。心臓部にあるが、あれは単純に血液に魔力を乗せやすいように固定されてるに過ぎない。

その為、三人は脳髓の中心にリンカーコアが移動しており、体の移植後に心臓部に移ったのだ。体が非常に軽いと喜んでくれた。まあ、生命維持に魔力を結構使ったが、先頭に出る事もないんだ、問題あるまい。

ちなみに、俺は質実剛健が信条なのでホムンクルスには極限まで無駄を省いてある。無駄な器官はなくし、無駄な経路も減らす。人間の血管は無駄に張り巡らされてる場所もあるのだ。

それを限界まで減らした結果、身長は170センチで普通の人間にしか見えないのに体重は三十キロ以下になってしまった。それ以外にも様々な技術を取り入れてるから、必要な器官も縮小させてるつてのがあるけどね。

次元暦が改められ、新たに新暦という年号となった。これといった違いはない。単純に時空警察保安局に次元世界の治安維持機構がすべて統合されたただけだ。

時空保安局に入隊するための学校が設立され、時空保安局の本局が設立され、ミッドチルダが正式に首都となった。

軍学校にも似た保安局に入隊するための学校でリンカーコアの負荷データの計測。リンカーコアの損傷は若い頃の無茶の所為が多いのだ。限界値を自分で知らなければいけないし。

俺も最初の頃は、自分のリンカーコアがボロボロになって大変だった。幸いにして気という莫大な力があつたので問題はなかったが、魔力しか使えなかったら、今頃俺はリンカーコアの損傷で前線から引いてるだろう。

色々な動きを続けた。時空保安局が正義の組織では無い事も徹底させた。俺達は正義の味方でもなく、ただ悪の敵であると。賞賛される為に動いているのではないのだと。

既におぼろげとなった記憶で覚えている。時空管理局の傲慢と横暴さを。正義の為に仕方ないことだった、正義を守る為に。正義のためなら何をしてもいいわけがない。

恥を知れ。正義を免罪符とするな。俺達はただ、法の番人。ただひたすらに悪を駆逐するためだけの尖兵。正義の味方ではないのだ。

救える命があるのならば救え。多くの命を救うために動け。その笑顔を守る為に戦え、我等は正義という理想に酔い正義を守るものではない。人を守る為に戦う兵士だ。

徹底的にそれを叩き込んだ。学校の教師にもそれを叩き込んだ。下らない正義のためという訳のわからないことを教え込まれでもしたら迷惑だ。

人の上に立つ者は正義を免罪符にしてはいけない。ただ、民の安寧を守るため。ただ、人を救うため。上に立つものは自分の手を汚すことを厭うてはならない。

俺達の行いを悪と思う者も居るであろう。抛って立つものが違えば、信義が異なるのは道理。されど、それを否定する事は許されない。双方の立場に立ち、その正統さを認めねばならない。

双方の願いすべてを叶える手段があるとは限らない。時には冷酷な決断をしなくてはならないだろう。俺達はその責任から逃れてはい

けないのだ。

懸念事項は早期に叩く。正義のためという免罪符の元に行動なんてするなど。それを徹底的に叩き込んだ。実戦の厳しさを知るものには分らない事だが。

戦いに明確な善悪など存在しないのだ。俺達が都市のエネルギー源となっていたロストログアを回収した。アレは下手をすれば世界を滅ぼす品だったから。

だが、その所為で飢餓に喘ぎ、死んでしまったものも居ただろう。ただ、それでも、将来涙を流すものが減らせたと思じた。明確な善悪なんてない。それが様々な視点から見て正しいと思った。それだけ。

最高評議会の人間も上手く行ってる。盲目のように正義を求めないように気遣った。俺達は涙を減らすために、涙の意味を変える為にと口をすっぱくして繰り返した。

リリウムとルイスの成長は遅い。今年で20にもなるというのに、未だに五歳くらいの体だ。仕方ない事だ。リミッターは既に外してある。今年は新暦14年か。

そろそろ、表舞台から引いてもいい頃だ。老兵は死なず、ただ去るのみ。最高評議会も仕事があるわけではないのだ。彼等も理不尽が許せぬと前線で戦い続けていただけ。

最高指導者が最前線で戦うなんて滅茶苦茶な組織だな。まあ……俺達はそろそろ去るべきだろう。老害にならぬ為に。俺達の意味が残ればいい。

ミゼット・クローベル、ラルゴなどの将来有望な若者も居る。そう、俺達の出番はもうないのだ。去るべきだ。

ジェイル・スカリエッティは生まれないだろう。それを指導する最高評議会は居ないのだ。戦闘機人も生まれないだろう。生み出すジェイルが居ないのだ。

次元世界には気が広く知れ渡っている。その内生まれてくるレジアス・ゲイズも魔力がなくとも気で戦えるはずだ。仮契約もある。人員不足は深刻ではない。まあ、解決もしていないが。

地球に小さな家を買った。戦争が終わったばかりの頃だ。余りいい環境とは言えない。しかしまあ、奇妙な家だ。

両親は10歳にしか見えず、子供は5歳くらい。かと思えば外国人が何人も居る。というか、俺とルイス以外は外国人にしか見えない。ルイスはどちらかというと日本的な顔立ちなのだ。

ゆっくりと生きていこう。種はまかれた、後は発芽して育っていくのを見守るのみ。それでいい。

第一話 それから（後書き）

なんだか主人公がカッコよく見える！不思議！

第二話 適当に

特にする事もないので、色々と武術を学び始めた。ネギま世界でも神鳴流や中国武術を幾つも学んでいたが、俺の体はチート性能なので他にも覚えたい。

強くなるのに理由なんて要らない。もっと強くなりたいから。ガキっぽいかもしれないけど、力なんて幾らあっても困らないんだ。

手始めにあちこちの流派を渡り歩いた。幸いにして天才とでも言うべき才能か、道場剣術やままごとみたいな拳法はすぐに覚えた。

かといって、習得の難しいとなると門外不出や一子相伝の技が目立つ。運良く御神の流派を見つけ、資金援助を行う代わりに御神の剣を覚えた。

この流派、大概チートである。俺はこういった時には気を一切使っていないのだが、相手は気を使ってるんじゃないかと思うほどの腕力に速度だ。

素の肉体でもフルマラソンを一日中続けられるくらいの体力と力があるのだが、あいつ等は俺と同等の肉体を持つてる。しんじらんねえ。銃弾を切るなんて化け物か？

気について教えたら、更なるチート流派になってしまった。神速使用中に気を使用し、体の負荷を減らす。奥義乃極み・閃を使える人間が続出。

神速の使用は脳に負荷が掛かる。気が使えるようになったので体の負荷は問題なくなった結果、脳が神速の環境に適応。常に神速の状態で活動できる御神の剣士が出現。

銃火器で武装した人間100人どころか300人でも勝てなくなるチート流派に生まれ変わってしまった。免許皆伝の人間に魔力を譲渡する魔法を試したら平然と感掛法を成功。

武の境地は無なり。平然と実行してる達人が闊歩してる御神の流派は恐ろしい所でした。ちなみにだけど、仮契約カードがなくても魔

力供給は出来るぞ？

感掛の力のおかげで、銃火器ではなく重火器で武装しているようにも御神の剣士は勝つようになってしまいました。どうしよう、このチート流派？

御神に新たな風を吹き込んだ人として名を知られるようになってしまった。いいんだ、別に。五十年もすりや噂も薄れるさ。原作開始まで五十年はあるんだし。

マンガの人間なんだから、マンガの流派も使えるだろうという事で、飛天御剣流を開発する事にした。幸いにして、この世界にもるる剣はあったので開発は比較的簡単に出来た。

単純にマンガの技を模倣して、後は練習するだけなので、一年くらいで実戦にも通用するくらいの技になった。どうでもいいが、飛天御剣流は御神流に通ずるものがある。

飛天御剣流は攻めの剣であり殺人剣で、御神流は守りの剣であり後の先を取る活人剣。だが、複数の敵を相手にするという方向性は同じだ。また、速さというものに重点を置いてある。

どうでもいい話だね。ルイスー、リリウムー、パパが帰るよー！

近所の火力発電所の煙の所為でルイスの喘息が酷い。夜の王である吸血鬼の息子がそれでいいのかと不思議だが、基本的に人間と変わらないから仕方ないのだろうか。

火力発電所が気に喰わないので、核融合炉の基礎構造と設計原理と基礎システムを論文にして学会に発表した。1970年代では技術がおっつかないので魔力で何とかする事にした。

核融合について詳しくは知らないで、リインフォースに頼んだ。三十分ほどで完璧な制御システムを作り上げてくれた。しかし、それを運用するハードがなかった。

しかし、作成できるのは確かなので、仕方なく制御には俺が適当に作ったデバイスを使うことにした。このデバイス、保安局の黎明期に作ったもので、ジャンク品の寄せ集めだ。

それでもメモリだけで20G以上あるので問題はあるまい。そこらの下手なスパコンよりか十分処理能力がある。おかげで日本のエネルギー問題は解決した。

特許のおかげで一氣に大金持ちになった。強盗が五月蠅い。引越した。あれ？核融合炉なんて作らないで引越せばよかったんじゃない？

ルイスとリリウムは現在40近いのだが、未だに7歳くらいの容姿だ。成長速度は少しずつ遅くなってる。知性の点では普通の人間と同じ速度で成長しているんだが……？

まあ、細かいことは気にしないでおくでしょう。さて、今日の朝ご飯は焼き鮭、豆腐とワカメの味噌汁、柴漬け、ほっかほかの白米である。

日本人とはかくも素晴らしいものよな。ちなみに、ルイスは俺似の容姿でリリウムはエヴァ似の容姿だ。女の子は父親に似て、男の子は母親に似るんじゃないかなかったか？

ついでに言うと、リリウムはいかにも外国人らしい容姿だが、日本語以外は得意ではない。ミッド語、ベルカ語、ドイツ語、英語、フランス語なら日常会話程度が出来る程度。普通に天才なんだがな。ルイスは語学系が強い。先程のリリウムの話せる言葉に加え、ポルトガル語、スペイン語、何故かエスペラント語とアルベド語が話せる。アルベド語は冗談で教えたらマスターしたのだ。使い道ないんだけどなあ……。

魔法に関しては、リリウムは氷結の変換資質を持ち、資質として広域、遠隔発動があり、アース式魔法では氷、闇、重力の順で得意だ。ルイスは変換資質は無いが、魔力乖離というレアスキルを持つ。魔力を乖離させる事が出来るため、非常に強力。無詠唱の魔法の射手なら三十発程度は簡単に霧散させられる。

近ければ近いほど高い効果を發揮し、相手のリンカーコアの魔力すらも乖離させる事が出来る。俺を倒そうと一日中引っ付いて魔力を乖離させ続けていたが、半分も減らなかった。

俺に抱っこを求めてきたり、抱き付いてきたりと嬉しかったなあ。

ああ、魔法についてだったな。アース式魔法は炎、雷、闇、風の順番で得意だ。

性格に関してはルイスは勝気な子で、甘えん坊。よく俺に覆い被さって来たり、抱っこしてと言って来たり……俺似だから、はやてに結構似てるんだぜ。二代目男の娘が……。

リリウムは内向的というわけではないが、大人しい子だ。エヴァには容姿は似てるが性格は似てない。深窓の令嬢という表現がピッタリだ。

エヴァが徹底的に色々叩き込んだからな。テーブルマナーしかり、ダンス、男の断り方、魔法、吸血鬼としての振る舞い。それら全てを見事に吸収して見せた。我が子ながら、才能の塊という表現がぴったりだ。

でも、リリウムも甘えん坊だ。外に出るときは必ず手を繋いで歩く。うーん、今年で40というオッサンとオバサンに等しい年齢なのだが、なんでこんなに子供っぽい？

まあ、かくいうエヴァも精神が肉体に引きずられて子供っぽいところがある。そして俺も10歳程度の体なので結構体に引きずられる。うーん、肉体と精神の乖離って危険だったような？

細かいことは気にしないでおこつか。しかしまあ、昔では考えられないほどの大家族になったな。守護騎士も含め、総勢9人だ。もしもツヴァイを作っていたら10人になっていたところだ。

ユニゾンデバイスで思い出したが、烈火の剣精アギトは既に回収してある。今では素晴らしいロードにめぐり合えて嬉しいようだ。報告書で読んだだけだが。

しかし、うーむ……デバイスか。いい加減ルイスとリリウムのデバイスも作らないといけないのだが、どうにも納得が行かないのしか作れない。

俺がデバイスに求めるのは三つ。機能性、耐久性、処理速度。この

三つ。下らない飾りなどいらん。武器がなければ拳で、足で戦え。俺はそういう風に叩き込んでいる。

正面からぶち当たっても壊れない耐久性。困難な要求に応え得る機能性。迅速に魔法を発動する処理速度。特に重要なのは耐久性だ。ルイスとリリウムはダンピール。人間に比べて遥かに高い膂力を持っている。簡単に壊れるようでは駄目だ。俺は魔法使いではあるが、シュベルトクロイツで杖術も使える。

シュベルトクロイツは最初から夜天の書に組み込まれていただけあって、異常なほど丈夫だ。それに、処理機能はすべて夜天の書に回されているため、砲身としての最低限の機能しかない。

その為、俺が全力で人を殴ったり突いたり切ったりしても壊れない。以前に大枚はたいてオリハルコンで強化もしたし。しかし、この世界にはオリハルコンがない。

近接戦闘で完璧な性能を追及するにはやはりアームドデバイスなのだが、リリウムは後方型魔法使い。アームドにする必要はない。かといって、インテリジェントでは相性が悪すぎる。

俺独自のデバイスを三十年以上開発し続けているのだが、にっちもさっちもいなくなってきた状態だ。

「ふう……」

考え込んでいるうちに、鮭が焦げかかっていた。急いで取り出し、皿に並べる。危なく焦がす所だった。食い物を駄目にするのは食物への冒瀆だからな。

朝食の準備を終えて皿を並べ、テレビを見ていたルイスとリリウムを呼ぶ。今日は一日晴れか。

「それじゃ、いただきます」

俺の声に皆が唱和し、朝食を全員が取り始める。ルイスは元気よく。

リリウムは上品に。こちらへんは教育の違いだろうか？

エヴァはルイスにもテーブルマナーを教えるつもりらしいが。俺は上流階級のようなテーブルマナーは流石に無理だ。とは言っても、下品ではないと思う。

「ん……」

少し焦げ臭い。しまったなあ、メシを作ってるときは考え事はやめよう。危ないし。掃除が大変になるし。

そんな事を考えながらも朝食は終わり、出勤の時間である。とはいふ物の、時空保安局の権限を使つての独自行動になるのだが。

俺が捜査しているのは、新型エネルギー炉ヒュウドラの査察。本当に安全なのか。暴走した場合の安全確認は済んでいるのかという事。最高評議会の一人として、俺が立会い、その場合の危険性の確認を行うのだ。もしも史実どおりに暴走しても、研究員を一箇所に集め、空間断絶結界で完璧に防げる。

ヒュウドラは空気中の酸素と化合しての莫大なエネルギーを生み出すが、失敗すれば周囲の酸素を奪いつくして完璧な無酸素状態となる。

更には空気中に大量の魔力素がばら撒かれ、逃げようとして飛行魔法や空間転移を行った場合、凄まじい爆発が起こる可能性が起こり得る。

以前からヒュウドラの安全性には口を出してはいるが、改善されているかは分らない。最悪の場合を考えなくてはいけない。

「それじゃ、行つて来る」

「ああ、行つて来い」

エヴァが俺にキスをしてくる。いいだろ？夫婦っぽくて？かれこれ

100年以上続いてるんだけどね。

「いつてらっしゃい、パパ」

「ああ、行つて来る」

リリウムの頬にキスをして、次元間転移を発動。何時もの転送箇所
に辿り着き、騎士甲冑を纏ったまま外に出る。

ヒュウドラのある開発区画まで、結構遠いので、転移許可を取って
空間転移で向かう。一々許可取らなくちゃいけないのが面倒だ。ネ
ギま世界ではそんなものなかったのに。

まあ、こっちは危険だしな。分をわきまえない奴が転移魔法を使つ
て窒息死したりするのはザラ。海や空なら騎士甲冑の保護設定が働
くが、石の中何ていう一ミリの隙間もない場所に放り込まれたら死
ぬしかない。

手だけめり込んで、引つ張つて抜いたら皮が全部剥がれて、それ以
来転移魔法が使えなくなったという奴も居るらしい。規制すれば？
埒も明かないことを考えても仕方ないか。ヒュウドラの開発区画に
辿り着き、門前払い。局員IDを見せたら滅茶苦茶恐縮された。そ
りゃまあ……10歳児にしか見えないからねえ。

お偉いさんに案内されながら、ヒュウドラについての説明を受ける。
中々面白い話である。俺は技術畑の人間ではないが、デバイスを自
作するタイプの人間だ。なので、こういう技術の話は興味深い。

とはいう物の、俺の自作デバイスは通信用デバイスくらいしか使つ
てないのだが。他の人にあげたものといえば、タカミチとネギとエ
ヴァに上げたのだけだ。

ネギのはレヴァンティンをネギ用に調整し、強度を上げた程度。タ
カミチのは呪文詠唱するだけのペンダント。エヴァのは騎士甲冑を
展開するだけのブレスレットだ。

なので、俺はルイスとリリウムには完璧に武器として使えるオリジ

ナルのデバイスを作りたいのだ。しかし、難しいものだ。

お偉いさんに通され、主任研究者のプレシア・テストロッサさんであった。娘のアリシアちゃんも紹介してもらった。かわええ娘や。絶対に死なせたりさせへんで。

その後、ようやく起動実験が開始されることに。失敗すると、バリアジャケットを装着していないと即死してしまうので、非魔導師の人は俺のそばに集めてもらった。

俺が生成した空間断絶結界。まあ、俗に言う所のディストーションシールド。その中に非魔導師を全員押し込めた。これで実験開始だ。ヒュウドラが順調に動き出し、魔力を生成していく。喜びの声が上がり、研究所内に鳴り響いたアラートに掻き消された。

区画内の酸素能動が急速に減少。その声を聞き、魔導師はバリアジャケットの保護設定を最大まで引き上げ。俺は空間断絶結界の制御に意識を集中させた。

念話が飛び交う。最悪の場合、俺が破壊するしかない。爆発的な速度で空気中の酸素が減っていき、それに化合して魔力素が異常なまでの速度で生成されていく。

しかし、この状況で魔法が使えるのか。少なくともリリカルな魔法は使えまい。空気中の魔素の干渉で確実に発動しない。あるいは発動しても暴走する。

となれば、精霊の力を借りるアース式魔法ならば使えるのだろうか、空気中の精霊が凄まじい勢いで消滅していく。恐らく、酸素と一緒に精霊まで消費されているのだろう。

こうなれば、後は気の力だけが頼りだ。だが、この炉を破壊できるほど強力な気の使い手は俺以外には居ない。

もう破壊するしかないという段階になり、俺の『カナメインパクト（パクリです）』で吹っ飛ばした。幸いにして死者は出なかった。アリシアも死んでいない。よかったよかった。

人造魔導師の開発とかいう下らない事を上に提案してくる奴が居る。その中にレジアスという名は無い。

レジアス・ゲイズは地上の武闘課の二佐だからだ。武闘課とは気の使い手の部隊だ。気の使い手の部隊とはいう物の、別に魔導師が居ないわけではない。

気の使い手と同じく、近接戦闘しか出来ないような魔導師も居るのだ。ゼスト・グランガイツとか。

ゼストはどうやら、魔力よりも気の方が性に合っているらしく、魔力はちつとも使っていないらしい。仮契約での魔力供給程度にしか使っていないようだ。

感掛法を習得できれば魔力の使い道も増えるんだろうが、彼は魔力ランクA A A +なので感掛法では消費しきれないほどの量だ。一部隊に一人居ると便利な奴とも言おうか。

それはいいとして、保安局は人手不足ではあるものの、あっちこっちで人員の奪い合いをするほど深刻な人手不足には陥っていない。なぜかといえば、気とアーティファクトのおかげだ。戦闘訓練を施せば、魔力なんぞ欠片も無い奴が魔導師を倒せるようになるのだ。むしろ、魔力よりも気の方が合っている奴が出てくる始末。そういう奴は、自分の魔力を他の奴に魔力供給で明け渡し、更に戦力の向上を行う。

それに、アーティファクトは主人の力量によって力が決まる。局のあちこちに契約魔法陣と執行人を用意しているので、体液交換を行わなくても契約できるようにしてある。

その為、魔力量の多い人が主人になるのが増え、結果として強力なアーティファクトが使えるようになった。犯罪検挙率もうなぎのぼりだ。

市民には仮契約の魔法陣を漏らしていないため、アーティファクトによる犯罪は起こっていない。あれは危険だからな。読心が出来た

り、簡単に人が呪い殺せたりするのだ。

ちなみに、仮契約の魔方陣は最高評議会の人間しか書き方を知らない。下手に漏らすと、どんどん知る人が増えかねないからな。

今のところ、保安局は上手く行ってる。最高評議会の人間も、正義を妄信しての行動は起こしていない。これからも頑張ろう。

闇の書についての事件が再び発生した。既に俺の夜天の書は闇の書と同一に等しいものだという説明は終えてある。

夜天の書と闇の書は二つにして一つ。俺の持つ夜天の書はバックアップであり、最悪の場合、この夜天の書を使用して闇の書を修復する為に存在していると。

まあ、完璧に嘘っぱちだが、事実かどうかは分からないだろう。何しろ四千年以上前の話だ。無限書庫ならデータがあるかもしれないがな。

というよりも、無限書庫はどうなってるんだ？勝手に資料が追加されていき、文字通り次元世界全ての知識が存在するのだ。しかも、書籍という形で。

非常に考えたくない話だが、次元世界全ての量子を観測していると考えれば不可能ではない。一体どれだけの処理能力があれば可能なのか考えたくも無い。

そもそもどうやって観測してるのかも不明だ。次元世界全てにナノマシンよりも更に小さな観測機でも設置してるのか？ナノマシンはミッドでは実用化されてるし。

考えても仕方ないか。今は事件に集中しよう。現在起こっている事件は原作よりも24年前に起きた事件。これを取り逃した場合、次の事件でクロノの父親が死ぬ可能性がある。

クロノの父親は既に入局している。今年12歳のAAランク魔導師だ。ハラオウン家のリンディ・ハラオウンは現在六歳。魔法学校に入学する年齢だったはずだ。

これからどうなるのかは知らんが、どうせ管理局で出会っただろ。

職場結婚って奴か。もしかしたら世界が変わってるから結婚すらないかもしれないな。もしくは別の人と結婚するとか。クロノがプラチナブロードのオッドアイとかになったらどうしよう。

あるいは赤毛のツンツンヘアーになって聖剣の力を使えたりしたらどうしよう。カエルとかロボットとか仲間にして。流星にないか。むしろ母親最強伝説になってしまう。リンディ現時点でA A A + ランク魔導師だし。

現在地点、第十四近隣世界・エストルト。この世界は地球と少し似ている。星の形状が地球に似通っており、低ランク魔導師ばかりが生まれるが、高ランク魔導師が突然変異で生まれやすい世界だ。違うことといえば、魔法技術があることだ。この世界は技術力が高く、技術屋にとっては住みやすい世界だ。

その世界で突然変異で生まれたSランク魔導師の元に闇の書が転生してきたらしい。運がいい事に、未だに悪用はされておらず、一心不乱に解析を続けているらしい。

技術屋の元に生まれてきて幸運と思うべきだろうか？という訳で、今はそいつの家に居て闇の書は危険で、このままでは所有者を飲み込んで世界を破壊してしまうという事を説明。

俺に闇の書を解析させないつもりなんだろうとぶち切れヴォルケンリッターが襲い掛かってくる。SSSランクというチートではないにしろ、近接戦闘では二人同時に相手して勝つのは難しい。

敵側のザフィーラは他の局員に任せ、俺はシグナムとヴィータを相手にする。機械的で感情が表に全く出てこない。やりにくい相手だ。飛天御剣流の九頭龍閃でシグナムを一撃で叩き落とし、天翔龍閃でヴィータを一刀両断。いや、騎士甲冑があるから切れてませんよ？

バインドで二人を捕縛し、ザフィーラの方を見ると、既に捕縛済み。まあ、十人がかりだからねえ。今、俺が率いてる部隊はエリートつて訳じゃないけど、高ランク魔導師を相手にする為に結成された部隊だから。

基本的にB→Aランク魔導師しか居ないけど、三人居ればA A Aランク魔導師にも勝てることは実証済みだ。ザフィーラくらいなら倒せるだろ。流石にうちのザフィーラは無理だろうけど。

シャマルはどうやら突然の奇襲で罠を仕掛ける暇も無かったようで、さっさと捕縛。さて、後は徴収して改竄して修理するだけ。後は封印か。

そう思っていたのも束の間。巨大な触手が家の奥から伸びてくる。俺はひぎいになる趣味はないので、後退する。

最悪の手段をとったらしい。闇の書と融合するという手段を。こうなったら、こちら側からの修理は不可能。そうとなれば、破壊するしかない。

周辺の住民を退却させ、俺が個人で撃てるアルカンシエルで周囲を空間歪曲攻撃で破砕。こうして、第19次闇の書事件は終幕を告げた。

闇の書か……恐ろしいものだな。もしも俺の夜天の書が闇の書だったら………紅き翼のバグキャラたちのお陰でなんとかなってたよ。うな気がする。

ラカンが俺に不可能はねえと理不尽な事を言い出して、適当に修正したプログラムで直ったりしそうだ。あるいは防衛プログラムを根こそぎ引きずりだすとか。

あいつらなら苦も無く防衛プログラムを木端微塵に破壊するだろうな……以前に罠に掛かったときも、俺を真似できるはずがねえって言って、自分をコピーする魔道具を簡単に破壊してたし。

紅き翼がどれだけバグキャラなのかよく分かった。俺もその一人といえど、アレだけの理不尽な真似は出来ない。一応、時間遡行をするって言う理不尽は出来るが、大変だから滅多にやらないんだ。俺の魔力を全部使った挙句、数十分かけての儀式魔法。ヴォルケンリッターとリインフォースのサポートがあって出来る技だ。ただ、超鈴音とは比べ物にならないレベルの時間移動が出来る。

アルハザードが存在してる時間にも行けたしな。ちなみに、アルハザードは保安局本局のように、次元の海を漂っている浮き島だ。自分の記憶を転写しての復活とかも出来たらしいから、死者蘇生は不可能ではないのだろう。今よりも遥かに進んだ技術を持った、超大陸と言えなくもない。

実際、アルハザードは滅んだ訳ではなく、次元の海に打ち込んでいたアンカーが壊れてしまい、それから漂流しているらしい。今でも加速を続けているらしいから、内部はウラシマ効果で大した時間も進んでいないのだろう。

ルイスとリリウムのデバイスが完成した。苦節39年。流石に掛かりすぎではないかと思っただが、ようやく完成した。

今までのデバイスはルイスとリリウムの魔力が強すぎてぶっ壊れてしまったからな。一体あれでどれだけ金が掛かったことか。

それはさておき、ルイスのデバイス、フルンティングの説明をするとうかが。このフルンティングは、俺の血液を大量に使って強化されている。

下手な霊薬よりも遥かに高い魔力を持つ俺の血液を桶にみたし、剣に生命を与え、血を吸わせ続けた。凡そ二百リットルの俺の血液によって強化されており、魔剣としては一級品だ。

ベルカ式カートリッジシステムを搭載し、シグナムと同じくボルトアクション式のカートリッジシステムとなっている。

使用術式は古代ベルカ式。まあ、俺達が教えたのだから古代ベルカ式になるのは当たり前なんだがな。

リリウムのデバイスはケーリケイオン。伝承とは一切の関係が無いが、意匠が同じなので、そのような名前にした。二匹のヘビが巻き付いた杖で、使用術式は古代ベルカ式。俺と同じく遠距離の砲撃魔導師だ。

二人のデバイスには耐久性と実用性をとことんまで追求しており、

ノーマンテで一年は稼働するという自信を持っている。一級のデバ
イスマイスターの免許だって持つてるしな。
さーて、それじゃあ、実戦形式でとことんまで二人を特訓してやら
ねばならんなあ。ハーハッハッハッハッハ！

そういえば、御神が壊滅するという事を思い出した。サーチャーで
覗いてみた所、数人に飛針を投げ付けられた。あつれー？おかしい
なあ？これ一応隠密タイプだよ？

教えてもない瞬間術や雷光変換などを自分たちで編み出していた。
うん、断言するわ。こいつらぜってえ壊滅しねえ。

一応心配なので、龍には気をつけろという内容の伝書を送っておい
た。

第三話 生きて生きて生きて

久しぶりにプレシアのところに遊びに行った。アリシアちゃん大きくなったなあ。俺は小さくなったなって？お前が大きくなったんだよ。

いやしかし、デバイスの作成の折には世話になったね。俺の持つ技術は古代ベルカのものだから、新しい切り口は中々斬新だった。まさか魔道電池をコネクションにするというのは思いもつかなかった。お陰で耐久性が二割り増しだったよ。満足のいくデバイスが創れた。

「うん…… 美味しい。茶々丸並みだ」

「チャチャマル？」

「エヴァの従者だった奴だ。とはいう物の、自動人形の事なんだが」

「自動人形…… 調べてみたいわね」

そういえば、プレシアの専行はそれだったな。俗に言うロボットを作るのが目的の。とはいう物の、ミッドの技術は地球よりも遥かに優れている。

作れはするが、重要なのが足りない。何が重要かといえば、いかに人間に見えるかということが重要なのだ。人間は人をよく見えないが、よくみている。

些細な違和感すらも感じ取るのだ。例えば、呼吸の際の僅かな肩の上がり下がりが無いのも違和感と捉える。

だが、瞬きしていないのに気付いていなかったりと、変なところにはばかり気付くものなのだ。だからこそ、人間を完璧に模倣するロボ

ットを作ろうという考えがある。

人間を完璧にモニタリングし、個性とでも言えるべきものをロボットの持つAIに注ぎ込む。ここでストップしているのだそう。そこを考えればチャチャマルは上手く行っていたのだろう。

何しろ、ネギに恋という感情を抱くほどにAIが発達していったのだ。AIは自分をより進化させる為に成長していく。そこで人間のように進化するか。これが重要となるのだ。

「そういえば、アリシアちゃん、結婚するんだって？」

「はい。来年の六月に」

ジューンブライドだな。ミッドにはそんなものないが、地球の事は結構教えてるから。その内地球に引越すつもりらしい。

ミッドよりも遥かに治安が安定してるからな。それに、地球はHENTAIの集まりだ。俺が以前に作った核融合炉。それに触発され、未だに1980年代だというのに、前の日本よりも遥かに技術が進んでいる。

多分だけど、二十世紀にはナノマシンを作るんじゃないかと思っている。そこまで来れば、あとはHENTAIたちの閃きが重要となってくるだろう。

HENTAIは事閃きに関しては引けを取らない。あと、自分の好きな事に関しては。それこそほんの十数年でオタク文化が発達しまくったように。

1970年代には秋葉原はただの電気街だった。だが、今ではパソコンやらの電子部品から始まり、既にオタク文化が発達してきている。メイド喫茶が既に花開き始めたほどだ。

もうHENTAIにはついていけない。俺の前世……180年ほど昔の俺は、オタクと言うほどではなく、ただのアニメ好きだった。もうオタクとか考えらんない。

だから、プレシアにとっても中々いい環境だというの間違いない。それに、話によるとアリシアちゃんの結婚相手の先祖が97外部世界の出身らしいし。

アリシアちゃんは今年で19。ミッドでは平均的な年齢だろう。早ければ14位で結婚する世界もあるくらいなのだ。地球が遅いだけだ。

「結婚……結婚か……」

「それがどうかした？」

「いや……」

俺とエヴァには子供は居るんだが、籍は入れてないんだよな。一段楽したら、結婚式を挙げようっていう事になってるから。

かれこれ子供が生まれて50年。結婚していたとしたら、既に金婚式を行っていてもおかしくないような時間が過ぎていくわけだが。どうしよう。

話し合いの末、結婚式は日本で行うことになっているんだけどね。

「結婚式……か」

恐ろしい事になりそう。というか、確実になる。外部世界で結婚式を行おうとも、絶対に参加する奴が居る。

まずは最高評議会の三人。まあ、俺とエヴァが最高評議会の一員だから当たり前とも言える。次に保安局のお偉いさん。確実に五十人規模。

次に聖王協会の人たち。何故なら俺は夜天の書の主であり、ヴォルケンリッターは聖王教会からも正式に雲耀の騎士として認められている。確実に数十人規模。

更には個人的な交友関係。つまりはプレシアとかが、他にも俺が任務に出ている際の部隊の知り合いが数百人規模で来る可能性がある。

「もしも俺が結婚式を挙げるとするなら、まずはデカイホテルを貸しきりにしなくちゃなんのだらうなあ……」

「あはは、相手がいないじゃん？」

「居るに決まってるだろうが、俺には息子と娘が既に居るんだぞ」

とんでもなく失礼な事を言いやがる奴だな。って、おい。なんでお前等はそんなに驚いてる？

「相手が居て結婚してないだけって言うのは知ってたけど、子供まで居るとは知らなかったわ……」

「子供さん幾つなの？」

「どっちも今年で60だ」

場がフリーズした。そりゃそうだろう、俺の子供が自分の母親より年上なんていう事態。

「これ、写真」

デバイスに保存していたデータを呼び出す。俺がルイスを、エヴァがリリウムを膝に乗せている写真だ。後ろにはヴォルケンスの面々も居る。

「これ、何時の写真？」

「三ヶ月前の写真」

確か、ヴォルケンリッターと初めてあった日の記念日の写真だったはず。

「この子、お孫さん？」

「いや、息子」

俺の膝の上に乗っているルイスを指差し、孫か？と問うアリシア。残念、それは私の息子だ。

「若っ！これで60歳！？」

「なんかの冗談でしょ！？」

まあ、仕方ない。控えめに見ても8〜9歳にしか見えないし。

「遺伝だ」

「凄く納得できる！」

何しろ俺は教科書に載ってるくらいの人物だ。次元暦593〜なんという風に書かれているが、未だに存命。

俺は今年で210歳。一応、長寿種族という事になっている。他のクライルやベアトリックスはアース式魔法の特殊な延命術を受けているという事になっている。

俺にやってくれという奴が居るんだが、それは無理な話だ。何しろ

ホムンクルスを創る為にネギま世界から持ち込んだ賢者の石を使っ
たからな。

ちなみにだが、賢者の石というのはフルメタルな錬金術師のような
外道のモノではない。錬金術に長けた者のみが生み出せる究極の触
媒。

超高価な魔法薬やら素材を使わなくてはいけない上に、技術的にも
難しい。その為、非常に生産が難しいモノだった。俺は資金援助を
して作ってもらったのだ。

何の為に作ったかといえば、もしかしたらエヴァを人間に戻せない
かと考えての事だった。生憎と、それは全て失敗に終わったわけだ
が。

という訳で、残ったものをホムンクルスの材料に使ったのだ。三十
グラムしか残っていなかったので、胎児の状態から生成することに
なって大変だった。

「というか、俺は大抵の場合10歳にしか見えないが、肉体年齢は
変えられるんだぞ？」

「初めて知ったよ？」

「そりゃ初めて言っただけかな」

というか、このことは家族くらいしか知らない。

「じゃあ、私と同じくらいになっただよ」

「お前は俺のフルチンを見たいというのか」

「え？あ、あー……」

年齢変えたら服が着れなくなるだろ。

「あ、騎士甲冑ならいいのか」

という訳で、夜天の書をセツトアップ。そして肉体年齢を20歳まで引き上げ、性転換魔法で女性に変化。

「魔法美女リリカルカナメ！推参！わたしの道にはストロベリーキユートな血塗れの愛が道を作るわ」

びしーっ！バッチリ胸も膨らんでますよ。女になって戦闘すると、男ならちよつとで済む魔力の消費が治癒魔法の所為で一気に跳ね上がるし、変態すぎるのでやめたいところだ。

ちなみに、キメ台詞に意味はありません。人工天然精霊を洒落つ気を出して作つたら、本場の奴よりも酷い事になったなんて事は無い。ないったらない。

「……カナメ、貴方疲れてるのよ」

「ごめんね、無茶な事言っちゃって……」

なんか失礼な奴だな。

「まあ、それはいいとして、どうだ？」

「なんで胸膨らんでるの？」

「今は女だから」

「さらっと性転換しないでくれるかしら？」

「出来るから仕方ない」

「理不尽の塊みたいな人よね、貴方って」

「あんま褒めるな、照れる」

「褒めてないと思うけどなー……そういえば、気になってただけど、なんでバリアジャケットスカートなの？」

「騎士甲冑だ。形は似てるけど、一応違いはある。なんでスカートかといえば、設定が面倒臭いだけ。かれこれ200年近く同じデザインのままだな」

夜天の書の主には女しか選ばれないのだろうか？あるいは、自分で騎士甲冑の設定を決めろという事か？

俺の場合は面倒だったからそのままにしたが、ゴツイオッサンが設定のことなんぞ知らずに起動したら悲惨な事になるに違いあるまい。

「ふうん……女装趣味でもあるの？」

「そんなものは無いが、女装に近い事はよくする」

ぴぴっと数枚の写真を取り出す。シャルルが何時の間にか撮影していたのを没収したものだ。

そこには、エヴァと色違いのゴスロリを着ている俺の姿が！この格好で秋葉に行けば、写真を取られまくる事間違いないし。

双子ロリ、ロリババア、ロリジジイ、男の娘。なんて美味しい二人組みなんだろう。

「うつわ……似合いすぎ……何ていったっけ、これ……ゴスロリ？」

「なんでこんな満面の笑顔なのよ……」

「ペアルックを着て何が悪い？」

「もつとまともなペアルックを着なさい！」

「むしろこれ以外には保安局の制服くらいしかもってねえよ！」

「逆ギレ!？」

「120年くらい前はまだまだもな服持ってたんだけど、だんだん古くなったしな。ゴスロリが二十着以上あつて、普通の服が四着しかないんですよ？」

夏用二着、冬用二着だ。無論、着まわしする。なんでこんなに貧乏みたいななの？俺の給料ってかなり高いんだよ？統幕長とかよりは低いけどさあ。

最高評議会って言うのも最終的な決定と組織の方針を決めるだけの組織だから、半分以上名譽職なんだよね。だから、そこまで給料は高くない。

とはいう物の、俺は戦闘に出てるから手当てが出る。危険な任務や高難度の任務ばかりだったから、多分だけど、局員の中では一番高いと思う。

何しろミッドの長者番付に乗るくらいだ。エヴァは子供の面倒があるから仕事に出てないけど、俺はバリバリ仕事してる。それが100年近くだ。

無論ながら次元震を止めたり（次元干渉型の結界魔法で半ば強引に）

次元断層を防いだり（こつちも次元干渉型結界で）なんかで報奨金が出たりもする。

三世代にわたって遊んで暮らせるくらいお金があるのだ。普段の生活は普通なので、それほどお金は使ってないし。

どうでもいいが、俺はかなりの人事部泣かせである。なぜかって？有給が溜りまくってんだよ、ざっと500日ほど。

保安局は戦闘もあるし、休日出勤や時間問わずの出勤もあるので、一年に20日の有給がもらえる。そうだ、京都に行こう。というわけの分からない考えで時折使ったりもするが、全然減ってない。50年分は使ったが、30年分程の有給休暇が残ってるのだ。人事部なんぞもう泣くしかない。新しく人事部に入った人が驚愕するのは通過儀礼だそうだ。

「色々大変なのね……」

「ズボンよりスカートに慣れるのは男としてどうかと思ったりもするが、そんなのは200年前に通った道だ」

具体的に言うと、騎士甲冑を始めて身に纏った時。ズボンタイプの騎士甲冑があると思っただが、そんなものなかった。

じゃあスカートのままでいいやっていうことになり、ここまでできたのだ。

「ん……もうこんな時間か。すまんが、そろそろ勤務時間だ」

今日は夜間出勤なのだ。五時頃にこつちに来たので、時間が余ったから遊びに来たのだ。

「そう？残念ね、また今度、ゆっくり話しましょう」

「またね」

いい家庭だ。優しさゆえに狂った科学者も、理不尽に死んでいった少女も居ない。暖かな母親と、快活な女性、そして年老いた山猫が居る家庭。

ミッドの山猫は魔力を持つから二十年ほど生きるのだそうだ。

「それじゃあ」

年齢を十歳に戻し、男に戻って転移魔法で保安局に戻る。
頑張ってるよ、俺。

闇の書の事件が再び起きた。今回、俺は出動する間もなく捕獲されたそうだ。今は次元航行艦により輸送中だそうだ。
万全を期するという事で、次元間転移で俺だけがそちらへと向かった。次元航行艦エステシアに。

そこは最悪の場所だった。

闇の書が理由不明の暴走を起こし、植物型の魔法生物のコピーを大量に生み出し、エステシアを侵食していく。

転移が可能な者には即刻退避を促し、少しでも闇の書の侵食を防ぐ為に通路を焼き払っていく。

封印術式が施されているブリッジへと強引に突入する。生存者が居る可能性もなきしにもあらずだからだ。

「生存者は居ないか！」

「逃げるんだ！」

俺の声に返事が帰る。若い男性の声だ。確か、エスティアの艦長。クライド・ハラウンといったか。俺の記憶が正しければ、原作では死んでいた人物だ。

「お前は退却しないのか？」

「もう逃げられないんだ……僕には次元間転移も出来ないし、船の転送装置は制御を既に奪われてる……君一人なら何とか転移魔法で逃げられる。」

外ではグレアム提督が保護部隊を展開してくれている。外にさえ出られれば、なんとかなるはずだ……」

「お前、死ぬつもりか？」

「死にたくはないけど、もう、逃げられないから……それに、僕は転移魔法がからつきしだから、登録もしてないんだ。もうちょっと練習しておけばよかったかなあ……」

このバカヤロウめ……お前には嫁さんと息子が居るんだろうが。死なせたりはしない。

「バリアジャケットの保護設定を最大まで高めろ。リンカーコアがぶち壊れてもいいから、何とかして耐えろ」

「へ？」

魔法を物理破壊設定に変更して、周囲の魔力素を収束していく。魔

力は温存したいしな……。

「貫け硬き稲妻！カラドボルグツ！」

超長射程の砲撃魔法。ケルト神話に登場する三つの丘の頂を切り落としたとされる剣。

不思議と夜天の書に記録されている魔法は、97外部世界の神話に関するものの名前が多い。

放たれた閃光がエステアを貫通し、俺はクライドの手を取った移動魔法で一気に船外へと脱出する。

『グレアム提督。聞こえているか？』

『聞こえています。クライド提督の救出に成功したようですね』

『ああ、アルカンシエルの使用は出来そうか？出来ないなら、こちらで何とかできるが』

『いいえ、チャージは完了しております。射線から早急に退避してください』

それを聞き、俺は次元間転移を起動する。だって、向うの座標を算出してる暇がないし。

何時も転移してる場所ならば、早く転移が可能になる。という訳で、俺は家の前に転移していた。

「あだっ！」

クライドが顔から庭に突っ込んだ。手、握ったままだったからなあ……芸術的な格好で地面に埋まってしまったクライドを掘り起こし、

頭の怪我を治してやる。

転移の時に傷口が広がっちゃったみたいだしな。結構出血が酷いし、このままだと前が見えんだろう。

「どうだ？助かったぞ？」

「へあ？」

「どうした、マヌケ面して。生還した感想くらい言ったらどうだ？」

「……しろ」

蹴っ飛ばした。サッカーボールのように、クライドの頭を。

「誰が私の下着の色を言えと言った！クライド訓練生！男の下着を見て楽しいか！？」

だったらスカート履くなよという突っ込みはなしだぞ。俺以外にも男でスカートのバリアジャケットか騎士甲冑つけて奴も居るしな……変態め。

「はっ！」

引っくり返っていたクライドがばね仕掛けのように飛び起きる。今の保安局員は、デカイ声で訓練生と呼ばれたら、反射で対応してしまふ。

養成学校では軍隊のような訓練を受け、理不尽な真似すらもやらされるのだ。返答がしつかり出来て居なければ殴られる。

無理と理不尽が徒党を組んで進撃しているようなところ。そんな言葉もあるくらいだ。タップダンスを踊れと言われれば踊れ、這い蹲

つて犬のクソを舐めろといわれれば舐めろ。軍隊はそういうところだ。

「生還した感想を言えっ！」

「Sir！教官殿！私は大変喜ばしい気分でありますっ！また息子にも会えます！」

「よろしい。休め」

「Sir！了解いたしました！」

体から力が抜ける。今更生きて帰った実感がわいたのか、涙を流している。

「自己紹介を忘れていたな。私は国後要最高評議会員だ。君はクライド・ハラオウン提督だったな」

「あ、はいっ！し、失礼致しました！先程は最高評議会の方とは知らず生意気な口を……！」

「いい、気にするな。あの時の自分の身元を明かしていなかったのは私のミスだ。貴様の気にすることではない」

保安局は基本的に軍と同じだ。昼飯を外に出て食えたりと、ある程度は自由があるといえども、上官に対しては絶対服従、敵前逃亡があれば厳重処分もありえる。

流石に銃殺刑はないとはいえ、敵前逃亡は基本的に二ヶ月の営倉暮らしだ。その後は一ヶ月の無料奉仕。大変だなあ。

「さて、一番手早く転移できる私の家に戻ってきてしまったが、問い合わせの結果、ポーターが開くのは大分後だそうだ。次元間転移も無茶な転移の所為で、魔力切れだ」

途中に出会う奴等全員転移で送つてた所為で、あんまり魔力が残っていない。何しろ二百回近く転移魔法使ったからなあ。

これから仕事があるので、さっさと回復させないといけない。リンカーコアは周囲の魔力素を集積する器官なので、魔力密度の高い場所に移動しなければ。別荘とか。

「そ、そうでしたか。ここは何処なんでしょうか？」

「97番外部世界だ。星の名称は地球。私の家がある」

「あ、ここがですか……」

あの稀代の魔導師の出身地。という事で、結構有名なのだ、ここは。

「私の個人転移が使えるようになるのは二時間ほど後だ。それまでは私の家でゆつくりしていけ」

「あ、いいんですか？」

「構わん。というか、貴様はこの世界の貨幣を持っていないだろう。しかもバリアジャケットの下は局の制服。職務質問されたら一環の終わりだ」

「ありがとうございます！」

敬礼して来たので答礼してやると、窓が開く。庭先で騒いでれば気

付くわな、そりゃあ。

「あ、パパー！」

「ああ、リリウム。ちょっと仕事の途中でな、ルイスはどうした？」

「えっとね、今はママと一緒に訓練してるよ」

というと、別荘の中か。

「えーっと、娘さん……ですよね？」

「ああ、可愛いだろうー！」

「え、ああ、はい」

「コイツはクライド・ハラオウン。仕事中のトラブルでこっちに逃げてきたんだ」

「リリウム・V・国後です」

ぺこりとお辞儀をする。可愛いなあ。ちなみに、VはヴァムピールのVだ。ルイスもVが入っている。ルイスの場合はヴァムピールになるな。

とつとつと家の中に入り、客が来ている事を既に察知していたシャルがお茶を入れていた。

「粗茶ですが」

「あ、ああ、どうもありがとうございます」

ヴォルケンリッターの面々は、今回の闇の書事件の守護騎士と全くの同一人物なので、自宅待機という形になっている。

戦場では混乱するだろうし、相手側のプログラムに何が起こるか分からないしな。

「えっと……要さんの奥様は……？」

「今は別荘だろう。見に行くか？」

「別荘ですか？」

「ああ、別荘っていうのはあれだ、ダイオラマ魔法球の事だ」

「ああ……あの物凄い高い奴でしょう？」

あれは金持ちの趣味みたいなものになってる。時間設定をしなければ、外部と時間の流れが同じなので、箱庭のように出来るのだ。

保安局の休憩室には一時間が12時間になっているダイオラマ魔法球が設置されている。仮眠を取る為に使うのだ。これは俺が寄付した。ダイオラマ魔法球の素材はそれほど高くは無いが、製作が難しいだけなのだ。

他にも食糧生産プラントに使われていたりする。何しろ三日で作物が収穫できるので。季節の設定も自由自在。夢の道具だ。

「あそこで修行をしてる。あそこなら二時間の休憩でもゆっくり休めるだろう。行くか？」

「いいんですか？」

「構わん。それと、うちの別荘は、俺の嫁さんが心血注いで作った傑作だ。腰抜かすなよ」

そんな事を言いながら、魔道具の安置室に案内する。テーブルに置かれたダイオラ魔法球を見て、クライドが驚いた顔をする。

そりゃそうだ、ダイオラ魔法球は作成者の力量次第で小さくなる。保安局で使用されているダイオラ魔法球は一メートル近い大きさだ。食料プラントの魔法球は五メートル近い。

保安局と同等の内部の広さを持ちながらも、サイズは大きめの金魚鉢ほど。接続された追加魔法球のサイズは手に収まるほどの大きさだ。

こればかりは俺も真似できない技術だ。そこらの職人よりはよっぽど上手いものを作る自身がありはするが、流石にエヴァには敵わない。

というか、ダイオラ魔法球は手が疲れるので作りたくない。以前に使っていた俺の別荘も、店で買ったものだ。

「入るぞ」

「あ、はい」

魔法陣に乗り、魔力を流して転移術式を発動する。中に入った瞬間、氷の欠片がこちらへと飛び散ってくる。

物凄い水蒸気が発生してるところからすると、燃える天空で氷神の戦槌を迎撃した、そんなところだろう。

水蒸気から、炎属性の魔法の射手が幾つも飛び出していく。上空に居たエヴァが……なぜ幻術魔法で大人になってるんだろう？ まあいいや、風の射手で落としていく。

紅き焰と同種の氷魔法、暗き氷が飛んでいき、ルイスの脇腹がごっそりと削られる。容赦なしだな、オイ。

「と、とめなくていいんですか!？」

「あー、あれくらいじゃ、うちの人間は誰も死なん……………まてよ？俺の家に人間って居たかな…………？」

遺伝子上俺は人間なのだが、最近自信がなくなって困る。気は修行すれば幾らでも増えていくし、魔力は流石に増えないが、どんどんチートになっていく。

「まあ、いつか」

「いや、よくないですよ!」

「俺がいいと言ったからいいんだ。分かったか。うちの人間はアルカンシエルでもぶち込まれない限り死なん」

アルカンシエルは空間歪曲攻撃と反応消滅なので、空間歪曲に耐え切るほどの物理的強度があり、魔力に反応しない物体で構成されていれば破壊されない。

無論の事ながら、そんなものは存在していないが、ラカンとかなら気合で耐え切りそうだから恐い。肉体強度が金属を超えてるからな、アイツは。

「アルカンシエルって…………」

「耐え切りそうなら知り合いが二人ほど居る」

ナギとラカンの事だ。ラカンの得意技は理不尽だからな。俺も得意だが。ナギはチートだからな。適当にやって耐え切る方法を見つけ

かねない。

一応、俺は空間断絶結界で防ぐ事が出来るが……ナギなら一回見ただけでパクリそうだから困る。

「要さんは……」

「防げる」

「そうですか……」

魔法の打ち合いが終わると、手に断罪の剣を発生させたルイスが一気にエヴァへと斬りかかる。実戦さながらの訓練だな。

エヴァも同じく断罪の剣を発生させ、受け止めると思いきや、瞬間的に出力を一気に高め、ルイスの断罪の剣がキャンセルされる。

まるでガラスが割れるような音と共にルイスの断罪の剣が消え去り、首筋に剣が突きつけられる。

「私の勝ちだな」

「まーけーたー」

ぐでりと俺によく似たルイスが引っくり返る。俺はといえば、別荘の豊富な魔力を体内に取り込み続けている真っ最中だ。

「で、どうした、要。仕事は？」

「ん、ちよつとな。任務の途中で闇の書が暴走して、アルカンシエルで消滅させるから、転移でこっちに戻ってきた」

「って、話してもいいんですか？」

「私も最高評議会の一人だ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルといえば分かるか？今は国後というファミリーネームになっているがな」

エヴァンジェリン・A・K・M・国後という事になっているな。ミドルネーム多いな。アラブに比べりや少ないが。

ちなみにだが、アタナシア・キティと言うのは洗礼名だ。どういう思惑があつて不死の子猫という洗礼名をつけたかは知らないが。

「あ、そ、そうだったんですか……」

「というか、なんで幻術なんか使ってるんだ？」

「うん？意味は無い。意味は無いが……何となくだ」

ああ………リリウムに発育で負けたのが悔しいんですね。分かります。

「ハハハ、どうしたんだ、エヴァ。いきなり殴りかかってきて」

「その、憐れむような目が気に食わん！ええい！避けるな！」

避けるなといわれたので、顔面に思いつきり拳を受ける。

「あぶろあつ！いたい痛い！もつとおおお！」

追撃で体の急所に突きやら肘が入る。騎士甲冑つけてなかったら死んでるわ。だって騎士甲冑つけてても痛いんだから。

いや、むしろ騎士甲冑を着けてるからこそ気持ちいい程度の強さに

なってる。これはいける！これで勝つる！

「まえがみえねえ」

「フンッ……！」

「へへッ、エヴァは可愛いなあ、もう。照れ隠しに常人なら十回は死ねる攻撃を繰り返してくる君が大好き」

「変態め」

「もう、エヴァったらツンデレさんなんだから」

「馬鹿っ！」

普通なら頭がサッカーボールのように吹っ飛ぶ蹴りを、打点をずらし、蹴られた瞬間に首を動かす事によって防ぐ。打点をずらさなかったら頭に穴が開いてるところだ。

「あはは……仲がいいんですね……」

「うちじゃ普通の光景だよ……パパとママは何時もあんな感じ」

何時の間にかクライドの横に居たルイス。

「で、大抵この後に……」

ルイスが言ってる間に、既に再びいつもの光景が展開され始めていた。

エヴァが要を膝枕し、数十年の間に上手くなっていた治癒魔法で怪

我した箇所を治している。自分で怪我させたんだから治すのは当たり前だが、どう考えても魔力の無駄遣いだ。

二人とも笑顔で、ベッタベタ。ラブラブのカップルにしか見えまい。

「目の前でやられると、ちょっと迷惑かなって……」

「あ、あははは……」

まあ、国後家はこんな感じだ。両親が殴りあった後は、必ずこんな感じでラブラブになる。喧嘩も滅多にしない、仲良し夫婦なのだ。

アリシアちゃんに娘が生まれたそうだ。名前はフェイトちゃん。これが世界の修正力って奴だろうか？

偶然かどうか、隔世遺伝で高い魔力資質を持って生まれたらしく、プレシアさんが最高のデバイスを作り上げてみせると言っていた。申請通る程度にしろよ。

それとは関係ないが、大分前に御神の家が襲撃されたそうだ。爆弾でぼっかーんと吹っ飛ばされたらしいが、大したこと無かったらしい。

そりゃあそうだろう、以前に送った忠告の手紙の中に、気を使った防御術を入れておいたからな。独鈷杵を使った気の術で、かなりの強度だ。

不破の所の頭首が旅に出てしまったらしく、足取りを探ったら既に高町に名を変えてた。既に娘が居るらしいヨ！高町なのはちゃんです、分かります。

やはり原作の修正力というべきか、三人娘は生まれている。このままだと八神の家に闇の書が転生するのだろうか？だとしたら早く確保したいのだが、何故か海鳴に居ない。

元々は関西出身なのだろうか？だとしたら、海鳴に移住する人物の見張りを行っていた方がいいだろう。

それに加えて、ロストロギアの輸送の際には局員の監視がつくことになってはいるが、ジュエルシードがどうなるのか皆目検討もつかない。

プレシア・テストロッサが狂って居ないから、そういった事は起こらないと思うのだが、どうなるのだろうか？気になって仕方ない。

「うーむ……」

「どうした？」

「いやね、富樫頑張ってるなあって」

「そうだな」

この世界の富樫はしっかり『週間』連載をしているのだ。この世界の富樫すげえっ！ファンレター送ったわ。でも、前世の俺ってサンデー派だったんだよね。富樫の漫画読んだことねえや。

「ちょっと眠くなってきたかも」

「私もだ……昼寝でもするか？」

「いいね」

という訳で、二人で寄り添って寝る。エヴァの体温が心地よい。人の重み、人の温かさ、人の吐息、不思議と安心できる。

とつとつと、誰かが歩く音が聞こえる。この足音と歩幅からすると、リリウムかルイスだろう。半分覚醒した頭で考える。

「あ……パパとママ、寝てる」

リリウムだ。こちらへと歩いてきて、俺の膝の上に頭を乗せて、自分も眠り始める。

幸せ。これが幸福。安らぎ。暖かな気持ち。人の心地よさ。自分の遺伝子を受け継ぐ、愛しい子供。

また一つ、足音。外から戻ってきたルイスだろう。外を走り回った、若草の臭い。それと少し汗の臭い。そして太陽の光を浴びた香り。忌むべき太陽に何ら弱点を見出さないダンピール。愛しき俺の子供。愛する我が子。

それともう一つ、気配を断って歩いているシグナム。少しだけ左の足音が大きい。シグナムは左腰に剣を下けているから。

「なんだ、寝てるじゃん……」

「ルイス殿。起こしてはいけません」

「分かってるよ。シグナムは硬いんだから」

小さな声で。でも、シグナムはきつと気付いているだろう。俺とエヴァが半分だけ覚醒して、二人を感知していることを。

目は動かさず、耳と鼻だけで人を探知している。それに気付かないのは、まだまだだな、ルイス。

「僕も寝よう」

こちらに近づいてきて、エヴァのすぐ隣に座って寝る。きつと、外で鍛錬をしてきたのだろう。ルイスはシグナムに剣の使い方を教えてもらっているのだ。

シグナムは微笑ましいものを見るようにして、対面のソファに座って新聞を読み始めた。

心地よい時間が過ぎていく。まどろみの中で、エヴァの左手の感触だけが鮮明で。

どうしようもないほどに愛しい女性。この身すべてを捧げてもいいと、自分の命すらも明け渡していいと思えるほどに愛しい。

この小さな体の中に、どれだけの苦悩が詰まっているのだろうか？少しでもいいから、それを分かち合いたい。それを支えてあげたい。まどろみの中で、取り止めのない思考が溢れていく。その中で、エヴァが愛しいと心が叫んでいる。

「ん……」

目が覚めると、外は夕陽だった。地平を燃やし尽くすかのように紅い世界だった。

昼と夜の狭間。逢魔時の僅かな時間。隣に居るのはダレ？俺の愛しい人。膝の上に居るのは誰？俺の愛しい娘。そんな取りとめもない事を考える。

瞳を見開く。目線の先には、お茶を飲んでいるシグナムが居た。俺が起きた事に気付いたのか、声を掛けてくる。

「もうそろそろ、日が沈む頃です。夕飯の準備はいいのですか？」

「そうだな……今日は、どこかに食べに出かけようか？」

「外食ですか」

「うん。皆と相談して、どこかに食べに出かけよう」

「では、ヴィータに意見を聞いて参ります」

そう言うと、シグナムは部屋を出て行く。ヴィータは家に居る。ザフィーラは外に居るようだ。シャマルは買い物だろうか？リインフォースは相変わらず分からない。

昨日は長崎までちゃんぽんを食いに行った様だし。相変わらず仕事が無いと、何をしてるのか分からないな。

「ふわ……」

大きくあくびをし、酸素を取り込んで、少しばかり鈍っている脳を活性化させる。

外食か。そういえば、ここ最近の外に食べに出てなかったな。そういえば、ルイスもリリウムも、ジャンクフードの味を覚えたりしないように気を使ったなあ。

たまにはいいだろう。外に出て、晩ご飯を食べたら、ゆっくりと散歩をしよう。そんな、ゆっくりとした一日があってもいい。俺はそう思う。

第四話　そして、運命は動き出す（前書き）

長らく放置してすいませんでした……パソコン蛾物故割れたと言う状況になりました。

それ以前にも、展開に悩んでいたりしたのですが。これからはいくつとですが、更新を勧めようと考えています。

第四話　そして、運命は動き出す

日本で唐突に次元の狭間が開いたのが確認できた。記憶が確かならば、渡航ルートを使用するのにはウナルガンダー族の移民船と、スクライアー族の運搬船だ。

スクライアー族のほうには時空保安局の局員が待機していたはずだ。だとすると、かなりの強さの敵に襲われたのか？

ブレシアはまずありえない。理由がないし、ミッドからの次元跳躍攻撃なんて、俺ですら無理……でもないかな？法陣を使つてやれば出来なくもなさそう。

それはどうでもいいが、確かスクライアー族の発掘したロストロギアは次元干渉型で、祈禱形デバイスの雛形になったと思われるジュエルシードだ。

内包されている魔力は俺の保有する魔力よりも遥かに多いと思われ、共鳴現象を起こすことによって更に大きな災害を引き起こす可能性がある。

たった一つで大規模次元震を起こすほどの魔力を保有しており、危険度は高い。また、祈禱形のため、植物だろうとなんだろうと意思を汲み取って発動してしまう。

一番厄介なのが、人に渡ることだ。祈禱形デバイスは魔力のある限り、どんなことでも実現してみせる。時を遡ったりは出来ないが、とんでもない事をやってのけるのだ。

例えば、魔導師がこう願ったら？『自分に暴走しない程度に魔力を供給し続ける』と祈ったら。無限に魔力が扱える魔導師の登場だ。複数個あれば、自分を治癒し続けるとか、そういった事すらも出来る。二つあれば、無限の魔力があり、不死身の魔導師が誕生してしまうのだ。

恐らくは、遥かな古代の優れた魔導師の外部エネルギータンクだったのだろう。もしも次元犯罪者が手に入れたとなれば、大規模災害

が起こる可能性もある。

となれば、保安局の職員として動かなければなるまい。ったく、今日は休暇なのになあ。

「仕事か？」

「うん。ちょっと残念。仕事が終わったら有給を久しぶりに使うことにするよ」

「そうか……少し残念だが、人命が掛かっている。我俣は言わんさ。なに……私達には永遠に等しい時がある。私も後で向かう」

「そうだな」

触れ合うキスをして、空間転移で一氣に移動する。森に移動したかな、さっさと移動しよう。

騎士甲冑を解除し、森を降りていく。少し霧が出てるな。清涼な空気が漂って気持ちいい場所だな。修行をするにはもってこいだ。そんな事を思っていると、人が走る音が聞こえる。見事な氣殺だ。そして、一瞬の静寂の後、鋼が打ち合う音が……鋼？

閑静な森に刃鳴散らす音が響く。こんな所でなにやってんだよ！？ さっさと移動するでしょう。巻き込まれたらたまったもんじゃない。そんな感じで町に下り、肉体年齢を20歳程度に上げておく。体が大きいと、バランス感覚を忘れやすいので髪の毛を伸ばす。これで頭が引っ張られて意識できる。

そのままにすると鬱陶しいので、何時も腕につけているゴムで一本に縛る。生前は癖毛だったので直毛は嬉しい。

「さて、いくとしよう」

電信柱で町の名前を確認。海鳴っていいのか。町の名前を確認して、喉が渴いたので自販機を探して……ゲツ、万札と五千円札しかない。なんで小銭がないんだ。

仕方ないのでコンビニで缶コーヒーを買う。MAXコーヒーである。悪いが、これが好きなんだ。家ではブラックコーヒーだがな。だって砂糖入れたりするの面倒だし。

飲んだら砂糖で喉が焼け付くようだった。喉が渴いてたんだから、素直に水を買えばよかったな。自販機でミネラルウォーターを買って飲む。

これから探索するわけなので、自販機の横で集中して町中にサーチャーを飛ばしまくる。漂流者が居たら救助して事情を聞かないといけないしな。

ジュエルシードでも見つけられれば僥倖なんだが、こういった類のロストログアは個人のサーチでは見つけられない可能性が高い。

ひとまず、魔力を保有している人間を見つける方向で探査を続ける。この世界の人間は滅多なことではリンカーコアが発生しないので、案外楽だ。

しかしみつからなかった！

なんだ今のナレーション。いつそのこと広域思念通話で呼びかけてみるか？ いや、駄目だな……既に次元犯罪者が探索を開始してる可能性もある。

サーチャーは一応ステルスにしてるけど、探知に特化した魔導師には見つけれられる程度の精度だ。どうするか……。

一応、シャマルたちには仕事が終わりに次第来るように言っているんだが……後二時間はしないと戻って来られないだろう。

シャマルは補助に特化してるから、俺よりも遥かに探査魔法が上手い。彼女が居れば、作業は格段に楽になるだろうに。

まあ、んな事言っても仕方ねえか。軽く探索はした。後は拠点を確認

保して、そこで集中的に探査を開始しよう。

安宿で部屋を借り、遮音結界で音を遮断する。そのまま探査魔法を発動し、町の全域にサーチャーを飛ばし続ける。

数は凡そ200個。正直な話、サーチャーを制御するだけで手一杯。異常が見つけれたら、夜天の書が知らせてくれるという形になる。人間の脳味噌何てそれが限界だ。

ふと、違和感。脳を駆け巡る数百の映像情報に非常に胸糞悪いものを見つけた気がした。サーチして、先程の映像を見ると、金髪の女の子と紫色の髪の子が無理やり車に乗せられている場面だった。

何で俺はこうも厄介ごとに巻き込まれるんだろうか。考えても埒が明かない事を考えながらも、探索を一時中断し、何時も使っている小太刀を取り出す。

窓から体を出すと、縮地天疆を使って移動する。長距離瞬動術は飛行魔法と違って完璧に目に見えない速度だから安心だ。入りと抜きは流石に見えるが、見間違いだと思う程度だ。

縮地天疆による移動を繰り返し、先程からサーチャーで追いかけていた車に追いつく。壁を蹴って走り、丁度人目がない廃工場らしき場所に到着し、金髪の女の子を持って降りてきた男を蹴っ飛ばす。何故か後頭部と踵がくっ付いてしまったようだが、治癒魔法で死なない程度に治療する。加減が難しいな。ひとまず、紫色の髪の女の子を捕まえている男の腕をもぎ取り、銃を構えている男に向かって腕を投げる。

腹から腕が生えた男を峰で殴り飛ばし、六人ほどいた普通の男を気を撒き散らして気絶させる。弱いなあ。気無しでやればよかったかな。

「き、貴様っ、何者だ！」

「はーっ……永全不動八門一派・御神真刀流・小太刀二刀術・仮師範代国後要」

一応の名乗り。この世界では結構使える。事実、閃以外は全ての技を修めている、神速は便利だ。

「自動人形か」

強さは茶々丸よりも少し弱いくらい。茶々丸はデータの追加だけで強くなる。手を剣に変化させるようになったりとか、どう考えてもオーバーテクノロジーだし。

まあ、この世界には居ないのだが。やれやれ、150年程度の昔のことなのに、最近茶々丸の事を思い出すな。

気絶している二人の少女を傷つけないように誘導してから、気を込めた蹴りで自動人形を蹴り飛ばす。腕に装着していたブレードで防がれたが、被害は甚大。

瞬動で一気に追いつかり、虎切で一刀両断。下半身だけで動いてきそうな気もしたので、そのまま縦にも両断する。

次は恐慌状態に陥った、血の臭いのする男。随分と薄いが……吸血鬼のような臭い。そうか、夜の一族だな？この世界の吸血鬼の末裔既に血は薄まりようがない所まで薄れている。恐らくは、種族的な強さで、エヴァはモチロン、ルイスとリリウムに絶対服従せざるを得ない程の薄さだ。

身体能力は、魔力供給された一般人よりも弱いくらい。気さえ使えば、一切の問題がない程度の強さだろう。

どうせ吸血鬼だ。そう簡単には死にはせんだろう。しかし、血が薄い。死んでしまうのではないだろうか。二つの考えが出るが、結論が出ない。

腹から手が生えたり、後頭部と踵がくっ付いた奴は治療をしてあるので死にはせんが、一刀両断したら死んでしまうのではないだろうか。

しかし、生物だから再生しないと限らない。木端微塵にしても生

き返るのなら思う存分木端微塵にするのだが、殺してしまうと面倒だ。

考え込みながら、男の拳やらを適当に捌く。バインドを使えば楽なんだが、法に触れてしまうしなあ。鋼糸があればいいんだが。

四肢を全部砕いてしまえばいいのだろうか。しかし、それでも再生しかねんしなあ。確か、とら八では腕を繋いでた気がするし……（血が大量に必要です）

いつその事、救援が来るまで適当にやっていたればいいのだろうか。そんな事を考えながら捌いていると、人の足音。増援だろうか、それとも救援だろうか。

視線を向けると、紫色の髪の少女と似通った顔立ちをした女性と、あのクソガキに似た顔立ちをしている青年。味方だろうか。

「助太刀「しなくていいよ」……」

「生かさず殺さずの範囲を教えてくださいいいんだけど。手足をもしたら生えてくる？」

「流石に生えないわ……」

「じゃあ……貫通孔「それも再生しないから」なら四肢を砕いて「発狂するわよ」」

なら、一般人が瀕死になる程度に殴ればいいのか。じゃあ小太刀は邪魔だ。ぺいっと捨てて、男を蹴り飛ばす。

瞬動で背後に回り、斜め上に蹴り上げる。虚空瞬動で上空に上がり、今度は真下に蹴り落とす。今度は斜め上に蹴り上げ。

それをほんの数瞬で何度も繰り返し、まるで男が周囲360度をトランポリンで囲まれたように吹っ飛ぶ。これがたった今編み出したパクリ技、裏蓮華である。適当に真似られて忍者も浮かばれんたる

うに。

「やっべ、ちょっとやりすぎたかな……」

二人が啞然とした顔をしているが、少々やりすぎただろうか。

「じゃ、そういうわけで」

ピツと手を挙げ、小太刀を回収して歩き出す。

「待って！」

「なに？」

「何処の誰かは知らないけど、妹を助けてくれてありがとう」

「仕事中に偶然見つけたから、気まぐれに助けたただけ。気にすんな。じゃ、今度こそ」

「待ってくれ！」

「またか！で、なに？」

「先程の業は御神の技だ。どういう事が教えてくれ」

「人の事忘れんなクソガキ」

つつてもまあ、コイツがまだ五歳くらいの頃のことだから、忘れるのも仕方ないか。

「そうだ。恭也。どうでもいい話だが………お前、俺の乳を触るのが好きだったよな」

俺は男と女の両方で御神流の鍛錬をしたのだ。御神流は、筋繊維の一本の動きまで抑制する流派。男と女ならば、体の組成が違うのは当然。筋肉の質も変わる。

御神の血筋ではない俺が習得するのは、他の人間に比べて長い時間が掛かったが……まあ、今ではいい思い出だ。恭也と風呂に入ったものな。

士郎が7歳くらいの時に一通り教えてもらい、恭也が五歳くらいの時に女として御神流を学んだのだ。大変だったなあ。

俺の言葉に恭也がフリーズし、紫色の髪的女性が絶対零度の瞳で睨みつける。

「まだお前がこんな小さい頃……要おねえちゃんはなんでここが大きいのか？って言うて来てだな」

「あ、それは興味あるなー」

「で、俺はこう言ったわけだ。フフツ、女の子はね、子供におっぱいを上げる為に胸が大きくなるんだよ、このエロガキって言ったわけだ……」

「それで？」

「よく分からないって言ったから、だったら体に教え込んでやろうと思って、ひとまず俺の乳を触らせてやったわけだ……恭也はおっぱい星人でテクニシャンだったぞ」

ちなみに当時の肉体年齢は20歳である。御神流は10じゃ流石に

使えないからな……。

「五歳の頃から……流石は天然ジゴロね」

「その日は体が熱くて眠れなくなって……恭也の親父に相手をしてもらって体を鎮めたんだ」

無論の事ながら剣の話である。性的興奮とは一切の関係がない。
「うわー……で、本当なの？」

「……………覚えがないな」

「今の沈黙はなんだ」

「ないったらない」

「そうか、なら士郎に聞いてくるとしよう。士郎は何処だ？」

「今は喫茶店にいるはず」

「やめろっ!」

「必死になるという事は何か隠してるって事よねー」

「よし、それじゃあ喫茶店とやらにいこうか。店の名前を教えるんだ」

「えっとねー、翠屋っていう名前よ」

「じゃあ、行こうか」

恭也の後ろに回りこんで当身で気絶させ、気絶してる少女二人組みも俺が運んだ。死屍累々の男たちはメイドさんが片付けてくれるそ
うだ。メイドさんすげえ。

ぶんがー たったぶんがー たったとー、おお、いい店だな。ここを士
郎が経営してるのか。

「いらっしやいま……」

フリーズする士郎。そりやそうだろう。恭也が背負われ、二人の少
女は横抱きになっているのだから。抱き方が雑ですまん。

体を揺すって恭也を地面に落とし、二人の少女は席に座らせてやる。

「で、何でお前は年を取ってない。どう見ても二十代前半じゃない
か」

「そういうお前こそどう見ても十代後半じゃないか……」

「最近青汁を飲んでるからな。その所為だろう」

「少なく見積もっても50歳超えてるはずだろ!？」

「特技は若作りだからな」

「ハア……理不尽はお前の代名詞だったな。もういいや、で、何が
あったんだ？」

「女の子が誘拐されそうになった。全美少女及び美少女の味方で
あり、最強のロリコンである俺が、美少女を救わないはずがない。
助けたら二人が駆けつけた。」

恭也がおっぱい星人であり、テクニシャンだという事を懇々と説明してやろうとしたら、恭也が暴れようとしたので、実力行使で寝かせてつけた」

「なるほど。突っ込みたい所があったが、気にしないで置いてやる」

「何処に突っ込むべき箇所がある？」

「普通はあるんだ」

「そうか」

唐突に出されたコーヒーを啜る。む、いい豆使ってんな。2000年以上コーヒー飲んでりや味くらい判別できるようになる。外でなにやらしていた女性。月村忍という女性が入ってくる。

「じゃ、話してやれよ。具体的に言っと恭也が、五歳の頃、風呂場で、俺に何をしたか」

「ああ……俺は直接見てないから分かんが。恭也が要の胸を揉んで、吸って、イかせたらしい」

「吸って!？」

「要が悪ふざけで、赤ちゃんは吸うんだから、吸ってみるか?って言ったらしい。何を思ったか恭也は頷いてな。なら吸わせてやるって吸わせたらしい。」

しかし、それが予想外に気持ちよかつたらしく、初めて男にイかせられたらしい。というか、お前は何を考えてるんだ？」

「あの頃の俺は黒歴史。疲労困憊の頭が意味不明な結論を出してもおかしくない。男で言う疲れマラ。極限の疲労が生存本能を刺激したんだろ。むしろ母性本能を刺激した」

「うわー……要さん大胆……というか、その頃何歳？」

「んー……俺の記録で残ってるのは、1970年頃に核融合炉を発明した頃だ。当時既に成人していて、子供が二人居た」

「えっ……子供はその頃何歳だったの？　というか、核融合炉？」

「40歳くらいだったな」

「……何歳で生んだの？」

「俺は生んでない」

「あ、ごめんなさい……」

「妻が産んだ」

「コーヒーをリアルで吹いた人を始めてみた。」

「い、意味が分からないわ……年齢不詳に性別不詳って」

「戸籍謄本には男性として登録されてるぞ」

「なにその本当は女性だ見たいな言い方」

「やろうと思えば子供だって産める。むしろ俺が生みたかった。ア

イツの体では子供を生めるか分からなかったからな……」

「奥さん体弱いのか？」

「むしろあいつより体が強い人間を見たことがない」

「じゃあなんで？」

「十歳だから」

「は？」

「だから、俺の嫁さんは十歳だ。分かったか？」

「いや、それ犯罪だから」

「いや、肉体年齢が10歳なだけだ。実年齢は俺よりずっと年上だ。問題はない」

「……………具体的にどれくらい年上なの？」

「俺の三倍」

俺が220くらいでエヴァが750くらいだから。

「最低でも150歳!？」

「ハッハッハ、どうだろうね」

「ああ……………なんだか考えると頭が痛くなってくるわ……………」

「そうそう。考えるだけ無駄無駄」

「うんうん。要の得意技は理不尽だ。あんまり真面目に考えると、頭が爆発するぞ」

あはははと笑う士郎。この時間帯は客も少ないようで、常にカウンターに居るようだ。

「そういえば、ルイスさんとリリウムちゃんは元気か？」

「元気だよ。最近はエヴァに戦い方を叩き込まれてるところだ」

そんな事を言いながら、常に持ち歩いている家族の写真を取り出す。主に魔法関係者以外には見せられない時の為に、俺とエヴァが20代の姿の写真だ。

「うわっ、奥さん凄い美人だね」

「そうだろうっそうだろう！」

「……で、下に居るのが娘と息子なのよね？」

「俺似がルイスで、エヴァ似の子がリリウムだ」

「何歳？」

「確かエヴァの10分の一くらいだったかな」

「最低でも15歳……どう見ても10歳くらいだけど？」

「こんなもんだろう」

「いや、三十年くらい前にも会った事があるから、少なくとも30歳を超えてるはずだぞ。当時は6〜7歳くらいに見えたが」

「意味不明な家族ね」

二人が俺の家族の意味不明さに嘆いてると、店のドアベルが楽しい音を鳴らす。ふと視線を向ければ、亜麻色の髪の子。その肩には魔力を持った人間。とはいう物のフェレットである。恐らくは渡航者であった人物だろう。動物に変身する変身魔法を使うといえば、今回の探掘者であるスクライアの一族と一致する。

「お、おかえり。なのは。その肩のフェレットはどうしたんだい？」

「あ、あのね。森の中で怪我をしたから、拾ってきたの」

「ふむ……ちょっと貸してくれるか？」

「え、はい」

素直に渡されたフェレットに手をあて、気を流し込んで細胞を活性化させる。俗に言う内養功という奴だ。

暫くすれば、フェレットの傷は大分癒えた。やはり、回復魔法を使えないとこんなものだろう。流石に大っぴらに使うわけにはいかない。

「それも気、だよな？」

「中国拳法の内養功だ。気は生命的エネルギー。接触さえすれば、それを使って治療するのは造作もない事だ」

「へえ、それは聞いた事なかったな」

「これは制御が難しいし、気を覚え始めたばかりの人間には制御が難しい。体に回すのはチャクラを通して練ればいいが、他人の体に使うのは難しいんだ」

「へえ、失敗するとどうなるんだ？」

「まるで一子相伝の暗殺拳法を使ったようになってしまつ。ひでぶつてな」

「ああ……」

俺の手の中のフェレットが驚いて逃げ出そうとする。既に治療は終えたんだがな。

（既に治療は終わっている。安心しろ。俺は時空保安局最高評議会所属の国後要だ。次元震の調査に来た。それに伴って、君の保護について）

（ほ、本当ですか！？）

（君は次元航行艦に搭乗していたユーノ・スクライアで間違いないな？）

（はい。間違いありません）

（では、君のほかの搭乗者についてわかる事はあるかい？）

（いえ、他の人は皆……）

死んだ、か……悔やんでいても仕方あるまい。

（保安局については応援も要請した。SSSランク魔導師が五人ほど居る。今回の事件は恐らく問題ないだろう。俺の直属の私設騎士団だ）

（ええっ！？っていうと、ヴォルケンリッターの方々ですか！？）

（ああ、公式にも知らされているだろうが、私は保安局局員であると同時に、聖王教会において、夜天の書の主として登録されている。ヴォルケンリッターも同様だ）

（そ、それなら今回の事件も大丈夫ですよね？）

（世の中に絶対はないが、手は尽くす。私の妻にも応援は要請しているしな）

（す、凄いや！最高評議會の人が二人も今回の事件に出てくるなんて！）

ヒーローに対する憧れ、のような物を抱いてるんだな。まあ、次元世界に置いては珍しくもない。

何しろ150年以上も戦い続けている伝説のような人物だ。

（えっと……な、何を言ってるんですか？）

コーヒー吹いた。

「す、すみません」

なのはちゃんが謝りながら、こちらに渡して来た布巾で拭き取る。

（ユーノ・スクライアくうううん？これはどういう事かな？）

（ええっと、そのお……魔力を持っていて、リンカーコアも活性化してましたから、魔法についても知ってると思っちゃって……）

ああ、クソッ！いきなり前途多難だな！

第四話　そして、運命は動き出す（後書き）

駄目だ……面白くかけているか分からない……

第五話 流転する運命と、鏡写しの願い（前書き）

今回ちょっと短めです。

第五話 流転する運命と、鏡写しの願い

所変わって、高町家のリビング。

俺は構えを取ると、一気に飛び上がった。空中にて一回転したのち、地面へと体を叩き付ける様にして頭を下げる。

「申し訳ございませんでしたあああ！」

ジャンピング後方宙返り土下座。それが俺が今放った技である。技かどうかは知らん。

「い、いきなりなんなんだ？」

「今からそれを説明します。まずは座ってください」

局員としての口調で、土郎達の着席を促す。

「まず……魔法の存在は信じますか？」

「魔法か……あってもおかしくはないだろう」

恭也が言う。まあ、吸血鬼を知っているのだから、その反応もおかしくはあるまい。

「そのとおり、魔法は存在します。ただし、異世界においてですが」

「異世界？」

「はい。この世界のほかにも世界は存在し、その世界の幾つかに置いて魔法は技術として使用されています。」

ただ、この世界のファンタジーのように、呪文を唱えたりするようなものではありません。

プログラムとして術式が存在し、魔力はエネルギーというように、パソコンと同じような物なんです」

「そうなのか……」

「あ、いや、信じるんですか？」

「嘘なのか？」

「いや、本当ですけど」

「まあ、嘘を言ってるようにも見えないしなあ」

「はあ……説明を続けますね。それですが、魔法の世界にも当然のように法律は存在し、魔法の存在しない世界において魔法を使用したり、他人に話すのは犯罪です。」

それはこの世界の人間に対し、魔法という技術を渡した場合、その人間が魔法を悪用する可能性がないとも言いきれないからです」

「俺達に話しているのはいいのか？」

「それについての話です。今日未明、次元間を航行する船が何者かにより襲撃され、運送されていた危険な物品がこの世界にばら撒かれました。」

その際に、搭乗していた民間人の一人がこの世界に流れ着き、魔法技術を貴方の娘さんである高町なのはさんに話してしまっただけ

いのです」

「そうだったのか……それで？」

「なのはさんは次元世界に置いて、類稀なほどに優れた魔法の才能を持っています。保安局は規模にして数百万人の人間が居る組織ですが、その中で5%に満たない才能です。

そして、なのはさんは魔法について知ってしまった……こうなれば、記憶消去措置を取っても記憶が再現される可能性もあります。

最悪の場合、こちらに拘置しなくてはならない可能性もあります。それについては、魔法の悪用、または次元犯罪組織によって誘拐される可能性もあるのです」

「なるほどな……で、なのははどうなるんだ？」

「出来ることならば、12歳になれば保安局に入局し、それまでは保安局による監視をするという事になるでしょう」

一瞬なのはちゃんが驚いたような顔をしたが、なんでだ？

「今すぐには駄目なんですか？」

「時空保安局に入る前には養成学校による教育を受けなくてはなりません。その養成学校の入校資格は12歳からなんです。

もしくは、保安局員のある一定以上の地位……一佐以上の者三名の推薦状があれば、それ以下からの入校も可能ですが……」

「それを書ける程の地位がある人物が居ないという事か？」

「いえ、私は最高評議会……まあ、日本で言うなら総理大臣のよう

な立場で、私の妻も同じです。また、直属の部下である五人は、全員が中将です。

書くだけならば全く問題がないのですが……」

「なのはには訓練が耐えられない。そういう事か？」

「ええ。見たところ、御神流の訓練を受けてはいるようですが……養成学校は軍隊の訓練と全く同じです」

「なるほどな……」

「どういう事なんですか？」

「軍隊は理不尽な真似すらもやらされる場所です。殴られても文句ではなく礼を言わなくてははいけません。犬のクソを舐めると言われたら舐めなければなりません。」

死ねと言われれば死ぬ。上官の命令には絶対服従。敵前逃亡は銃殺刑。それだけ危険な場所です。また、時空保安局の任務も危険です。命の危険が常に付き纏います。

幾ら厳しい訓練を積もうと、実戦での危険はなくなりません。また、外部世界の人間は本能的な魔法の使い方を知りません。リンカ―コアと呼ばれる器官を損傷する可能性があります」

「そうなんですか……」

「それに……私としては、子供には戦いはさせたくはありません。戦いは私のような老兵に任せればいい。そういう事です」

「でも……私は、私に出来る事があるなら……」

「貴方に出来る事はありません。残酷な事を言うようですが、今回の事件においては殺傷行為も認められています。貴方は人を殺せますか？」

たとえ殺せても、貴方が手を汚す必要はありません」

「でも……でもっ！フェイトちゃんが……！」

「フェイトちゃん……ですか？」

「あ、えつと、その……」

士郎をちらちらと見る様子からすると、何か言いにくい事があるみたいだな。魔力があるものを取り込むように設定した封鎖領域を展開する。

内部には俺となのはちゃんだけが残る。

「士郎さんには話し難い事があるのでしょうか？ここならば、私と貴方しか居ません。どうぞ、話して下さい」

「えつと……」

「安心してください。私はこれでも口が堅いほうです。犯罪行動ではない限り、他の人には話しませんよ」

そう言うと、なのはちゃんは驚くべき事を話し始めた。なんでもなのはちゃんは未来から逆行してきた人物らしい。

逆行した原因は、時を遡ると言われていた時の砂礫というロストロギアで、フェイト・T・ハラオウン、高町なのは、八神はやてが巻き込まれたらしい。

他の三人も逆行しており。既に八神はやてとは交流もあるらしい。

また、リンカーコアが活性化していたのは、魔法の練習をしていたからだそうだ。

「なるほど……驚くべき事ばかりですね」

「あの……信じるんですか？」

「まあ、私の友人がタイムマシンを作った事もあるので、別に驚くような事ではありません。

ですがまあ、貴方の言う事件は絶対に起こらないと断言できます」

「なんでですか？」

「まず、貴方の言うフェイト・テストロッサですが、生まれていません。正確に言うなら、生まれる可能性が潰えたという事でしよう。それについては今から27年前に起こった新型魔力炉ヒュウドラの暴走は、私が防いだため、アリシア・テストロッサは生存しています。

また、F計画の根幹となるであろうジェイル・スカリエツィも生まれていません」

「そんな……」

「ですが……アリシア・テストロッサは現在結婚しており、彼女の娘はフェイトといえます。

彼女は赤ん坊の時点で知性を所有しているような素振りを見せているため、恐らくは、彼女が逆行者だと思えます」

既に離婚して、アリシア・テストロッサに戻っているのは言わないでおくべきだろう。

「本当ですか!？」

「ええ、今度、あわせてあげますよ。彼女とは友人ですので。しかし、大体分かりました」

「にゃ？」

「フエイトさんは私の事を不思議そうな目で見てくるんですよ。最初に会ったときも、はやて?と言われました。

恐らく、私とはやてさんは似ているんでしょう。どうなんでしょうか?」

「ええつと……はい、そつくりです」

「そうでしたか。でしたら、間違いなさそうですね。次に、闇の書事件ですが……これについても問題ありません」

「え、なんでですか?」

「私の所持しているデバイスは、夜天の書と言います。闇の書のバックアップとして製作されていたデバイスで、最悪の場合はこちらのデバイスを使って修復するんです。

修復プログラムも、闇の書の破損状況が分かれば作り上げることが可能です。リインフォースも消える事はないでしょう」

「本当ですか!？」

「ええ。次に、J・S事件ですが、彼は生まれていませんので。また、最高評議会もそんな事はしません。何しろ、私も最高評議会の

一員です。

ですが……貴方の言うスバル・ナカジマ、ギンガ・ナカジマ、ヴィヴィオという三人は生まれていませんし、これから生まれる可能性もないでしょう」

「そう……ですか……分かつては、いたんです。もしも、ヴィヴィオが生まれても、私の知ってるヴィヴィオじゃないっていうのは……でも……でも、悲しいです……」

「そうですね……こればかりは私にとにかくいう事は出来ませんがまあ、クイント・ナカジマさんはKIAとはなっていますので、もしかしたら将来的には生まれるかも知れませんね」

「あはは……そうですね」

「それと……保安局の入局をするならば、私が養成学校への入校推薦状を書いても構いませんよ」

「本当ですか!」

「ただし。中学校を卒業してからです。養成学校は短期訓練もありますが、最低でも一年は帰れません。ですので、15歳になってからです」

「分かりました」

「ああ、それと。先程ワーカホリックとか言われていたそうですが、保安局には貴方よりも上の人物が居るんですよ」

「ええっ!? 本当ですか!」

何でも、かれこれ10年近い間、殆ど有給も使っていなかったらしい。しかし、100年程有給を溜めた俺にはかなうまい。

「私の有給の残り日数は……………1929日。だそうです」

「1929…………えっと、一年でどれくらい有給がもらえるんですか？」

「20日です」

「ええっと……………100年近く勤務してる事になるんですけど……………」

「保安局は創設されてから140年ほど経っています。また、最高評議会は管理局創設から生きています。意味が分かりますね？」

「はい……………要さん幾つなんですか？」

「220歳くらいですかね」

「凄い長生きさんなんですね……………」

「いえいえ、私などまだまだですよ。私の妻は今年で740歳くらいですので」

「それまた凄いですね……………」

「いえいえ、妻なんてまだまだで。私が住んでいた世界には2600歳くらいの方が居まして……………」

「それもまた凄いですね……」

「それだけじゃなくて、今度は未来から来た火星人居まして」

「もう何がなんだか分からなくなってきました」

「終いには15歳の子供先生や、人間と同じ心を持つロボット、羽が生えた人、お姫様と、なんでもありな場所でしたよ」

「ええ、本当になんでもありですね……」

「麻帆良学園は」

「学校だったんですか!？」

「学校ですよ?」

「もう何がなんだか分からなくなってきました……」

「それだけじゃなくて、今度は獣人や角の生えた人が沢山暮らしてる魔法世界と言う場所がありました。

そこでは世界を滅ぼそうとするライフメイカーという人物と戦いましたよ」

「世界を滅ぼすって……」

「まあ、私達は裏切られてしまって、連合や帝国、総数にして数億を超える相手と戦うこともありましたね」

「うわー……それって大変ですよね」

「ええ、大変でしたよ。何しろ仲間が十二人しか居なくて」

「12人ですか!？」

「12人です。とはいう物の、非戦闘員も居たので、正確には10人だけが戦闘要員でしたけど」

「10人で数億と戦ったんですか……?」

「まあ、こつちにはSSSランク魔導師が六人と、SS+ランク魔導師相当が二人、Sランク魔導師が数人以上居ましたからね。

特に、ナギ、ラカンという二人はバグキャラと言われるくらいでして。ラカンは戦艦を137隻叩き落した猛者ですよ」

「凄いですね……」

「剣で」

「近接戦魔導師がですか!？」

「ええ、五十メートルくらいの大きさの剣を振り回して、戦艦をドカドカ落としてましたね。付け加えるなら、陸戦魔導師でもありましたよ。」

他にも、両腕が吹っ飛んでもミジンコみたいに生やしたり、脱出不可能と言われる異界空間……まあ、SSSランク魔導師が張った結界をCランク魔導師が破壊するようなものです。それを破壊したり。

マッハ三くらいで跳んだり。マッハ三で剣を投げたり。気合で究

極技法と呼ばれる業を真似したり。理論上魔王すらも消し飛ばす……まあ、こっちでいうSSランク砲撃を吐血くらいで耐えたり」

「それ、人間ですか？正直な話、戦闘機人って言われても信じられません」

「全て事実です。次に、ナギですが……彼もチートですね。ええつと……グランガルトというロストログア知っていますか？」

「えつと……巨大な人型の機動兵器ですよ？旧暦で戦争に使われてたっていう」

「ええ、有名な話ですから知っていてよかったです。それと同等かそれ以上の敵を、広域殲滅魔法で数体同時に消し飛ばしたりしてましたね。」

他にも……他人の魔力を自分の魔力と混ぜ合わせるような真似を一発でまねして見せたり（感掛法の事）。SSSランク以上の強さを持つドラゴンと殴り合って勝ったり。

彼も人間ではありませんね。はつきり言つて」

「もうなにがなんだか分からなくなってきました」

「一番凄いのはアレですね。適当に教えた魔法で、収束砲撃を使つて見せた事ですね。それも、SSランクの。一発ですよ。ぶっ殺してやるうかと思いましたね」

「ええつと……その……」

「ハッキリ言っていていいですよ。どうせ彼は居ません。さあ、心を解き放ちなさい。怒れ、怒るんだ御飯！おめえはまだ何処かで地球へ

のダメージを考えてる」

「誰ですか御飯って……まあ、正直に言うと、ムカつとしましたね」

「ですよ。バグキャラ許すまじです。まあ、かく言う私もバグキヤラでしたけど」

「……参考までに教えて貰えますか？」

「ええつとですね……魔力量SSSランクってどの程度か知ってますよね？」

「確か、300万でしたっけ？」

「はい、百万ごとにランクが増えるんですが……その勘定でいくと私はS×56ランク魔導師……まあ、魔力総量は5600万なんです」

「……確か、XVF級艦の魔力炉の出力量が……」

「2500万でした。ちなみに本局の魔力炉の出力は5000万です」

とはいう物の、最大瞬間出力の話だ。継続的な出力で言えば、一億を超える。だが、戦闘状態でも100万程度の魔力しか使わない。2500万もあるのは、主砲を使ったり、転移するときの為もあるし、出力を増やしておけば、出力が落ちても、ある程度の機能を維持できるからだ。他には魔力炉からの魔力供給を受けたり。

過去において、戦艦からの魔力供給を受けた聖王は無類の強さを誇ったという。それは聖王の鎧というレアスキルと、本人の魔力量に

よるものだったそう。

戦艦からの魔力供給を受ければ、提督クラスの間は異常な程の戦闘力を発揮する。まあ、俺よりは弱いんだが……。

実は知らなかったんだけど、魔法の術式って言うのは何百個も同時に展開できるようなものではないらしい。普通は十個も出来れば十分なんだそう。俺はやっぱ異常だという事だ。

だが、俺と同じように術式を大量に展開出来、戦艦からの魔力供給を受ければ俺を上回る事は可能だ。人間なんてそんなものだ。結局の所、一定以上の強さにはなれないのだから。

「人間ですか？」

「自信ありません」

「何かの本で読んだ理論限界地が四百万だった気がするけど……まあいいや。他にはあるんですか？」

「ええっと……世界で一番最初に時間逆行を行った人物で、殴り合いでナギとラカンに勝利し、魔法の打ち合いでナギに勝利し、人間には倒す事が不可能と言われている存在を倒したり。

両手足がもげて、内蔵が殆ど破裂しても三十秒で治したり。神を倒したくらいでしょうか」

「さっきの人達よりも凄いです」

「だって、私は魔法を使っても戦艦の撃墜数は218隻ですよ？」

「それ、十分に凄いですから。そもそも、神ってなんですか？」

「文字通りの神ですよ。とはいっても、神みたいなものですけど。

魔法世界という火星を元に作られた異相世界。そこを作り上げ、2600年間維持し続けていたバケモノです」

「はぁ……もう、並大抵の事じゃ驚けなさそうです」

「そうですか……では、そろそろ結界を解除しますよ」

「はい」

元の位置に戻り、結界を解除する。

「大体分かりました。その、フェイトちゃんというのは、小さい頃にあった友達で、魔法を教えてくれた人物。そういう事でいいですね？」

「はい」

怪しまれないように、結界内部で秘密の話をしていた事を士郎に軽く教える。

「もしも、保安局に入る意思があるのならば、家族とよく話し合ってから、家族がいいと言ったらこちらにも認めましょう。推薦状は書きます」

「はい」

「それと、士郎さん。さつきから魔法を使える人物と戦いたいと言う気持ちが溢れてるのは見て分かります。

民間協力者として、今回の作戦に参加しますか？気さえ使えば、魔法を使う相手に対しても戦闘は行えます」

「むう……それは魅力的な提案だが……」

「戦えば勝つのが御神。けど、奥さんには勝てませんか」

「ははっ、そういう事だ」

「そうですか。では、ここらでお話は終わりにしましょうか。あー、疲れた……っと、来たな」

「ふえ？」

「我が騎士。ヴォルケンリッターですよ……ああ、来た」

認識阻害を使っているのです、平然と飛行が出来る。こっちの世界の魔法には認識阻害なんてないからな。

出迎えをし、家に上がらせてもらう。先程ディバイドエナジーで回復させたユーノが、何処からともなく色紙を取り出してサインをねだっていた。

俺もサインをしておいてやる。売れば一体幾らするのだろうか。どうでもいい事だが、ふと思ひ浮かんでしまった。

「奥方に関してはご子息を寝かしつけてからいらっしゃるそうです」

「ああ、分かった。士郎とは久しぶりだったな？」

「ああ。まだ小さい頃にあった覚えがある」

というわけなので、なのはちゃんにだけ軽く自己紹介。

「なのはちゃんに一つ注意しておく、相手側は有能な魔導師を手に入れる為に、外部世界……なのはちゃんの言い方だと、管理外世界かな？まあ、保安局の手が入っていない世界の優秀な魔力資質を持つ人間を誘拐する可能性もある。

そしてだが、まだ判断力の低い子供を誘拐する可能性が高い。ともなると、君が誘拐される可能性は高い。

だから、もしかしたら学校には既に次元犯罪者が潜入している可能性が高い。もしも高い魔力資質の持ち主が居たら、教えてくれ」

「はい」

そういいながらも、念話で通信が入る。

（そのお、仲のいい男の子の友達が居て……その子、とっても強い魔力を持ってるんです。それに、デバイスらしきアクセサリーも持ってる……）

（ふむ……その子の家族構成、及び、何時頃からここに居るか知ってるかな？）

（えっと……両親はもう居なくて、一人暮らしをしてるんです。一年生の頃から居たんですけど……）

（それで、どういった経緯で仲良くなった？また、どういう目的があって仲良くなったか分かるかい？）

（私が、アリサちゃんとすずかちゃん。友達のことなんですけど、その二人が喧嘩してる所を収めて、その時に仲良くなったんです）

（なるほどねえ……その子についてはこちら側から監視をする。

魔力ランク、及び外見的特徴は？)

(魔力ランクは多分ですけど、SSSランクかな……？銀色の髪をしてて、右目が青くて、左目が赤いんです。

名前はローベル・ヴァイス・リヒターって言います)

すげえ名前。偽名にしたってやりようがあるだろう？というか、そんな人間居ていいのか？銀髪は色素欠乏症の症状だろう？なんで眼が青と赤なんだよ。いみわかんねえ。

しかし、SSSランクか。次元犯罪者側は一体どんな真似をしたんだ？魔力量SSSランクの生まれる可能性は天文学的な確立なのにもしかしたら違法研究の成果の可能性もあるな……次元犯罪者に強制されて動いてるんなら情状酌量の余地はあるけど……。

SSSランクなんて稀代の才能だ。敵なんて居なかったらう。天狗になって自分の意思でやってるのかもしれない。今回の事件、最悪の場合次元震もおきかねない。

そうだったら、いかに高ランク魔導師といえども情状酌量の余地はない。次元牢に数百年以上の幽閉になるだろうな。

「見つけた……うっわ……これはビンゴだな」

騎士甲冑を身に纏ってあちこちを探し回ってる。音声も拾えるかな……隠密性が下がるが、なんとかなるだろ。

『ここにあんだらうな……クッソ、めんどくせえ……探知魔法じゃ見つからないし……いつその事魔力を打ち出して励起するか？』

はかやめろ。そんな事したら世界が滅ぶぞ。流石にそれくらいは分かってたのか、それ以上は何もしてなかった。

「どうやら、ビンゴ。みたいだね。もしかしたら、君が魔法に目覚めたのを切欠に接触してくるかも知れない。」

魔法を教えてあげるとか、仲間になればいいとか言われたら、絶対にならないで、こっちに思念通話で伝える事。いいね？」

「はい」

「それと、騎士甲冑の設定は幾つか入れておきなさい。君はまだ若いから、見栄えも気にするだろうし、じゃらじゃらとしたのを作ってもいい。」

「だけど、敵から身を隠す場合もある。一切の変化がない騎士甲冑を作りなさいね？騎士甲冑はフィールドとバリア魔法の融合。」

本来なら、透明な魔力の膜なんだ。それを服みたいに変化させるだけだからね」

「はい」

それだけ言うと、眼を閉じて集中を開始する。しかし、この少年の服装はなんなんだろうか。

黒革のベルトを全身に巻きつけられたような服だ。腕にはスチールにも見える鈍く輝く鉄板が巻きついている。厨二病？

『あーあ……ハーレムを作るつても楽じゃないよな……しかし、どうすっかな……死者蘇生なんて出来ないし……』

当たり前だろ……。

『どうしたらいいかな……いつその事、プレシアが悪いつて事にすればいいのかな……』

なに言っただこいつ？なんでプレシアが出てくる？

『俺に依存するようになればいいのか？だとするとハーレムが……』

うるせえ。もう音声は切ってもいいだろ。という訳で、映像だけの監視に切り替える。

しかし、このSSSランクの少年は一体どういう組織との繋がりがあるのだろうか……まだ明確にあるとは決まっていけないけど……。

まあ、それはどうでもいいか。ひとまずは探索に集中しよう。ジュエルシードの探索に向かってもらっている三人の負担を減らさねばならんしな。

俺はまあ戦闘は出来るが、シャルとリインフォースの次に探知が上手い。俺とシャルとリンフォースは探知をして、残りの三人には探索をしてもらう。

これが一番いい方法だろう。ジュエルシードの詳細なデータがあればよかったのだが、そう簡単にいくわけがない。

「ん……見つけた」

見つけたジュエルシードの位置情報を夜天の書を介してヴィータのグラーファイゼンに送る。その後はグラーファイゼンのナビゲートで探すというわけだ。

ヴォルケンリッターの持つデバイスはアームデバイスといえども、かなり高性能な品だ。というか古代ベルカの品だから、チョット前まではオーバーテクノロジーだったのだ。

搭載されてるAIはストレージデバイスと同等の性能を持っているし、カートリッジシステムも高性能な物だ。そのおかげで既に改造が出来ないレベルだが。

「探索開始から五時間でようやく一個か……幸先がいいというべき

か、遅いというべきか」

「でも、普段はただの石にしか見えないわけですし……幸先がいいって言うべきなんじゃないんですか？」

「だが、敵側は既に探索を開始しているのだ。紅の鉄騎や烈火の将が如何に強いといえど、早く見つけるに越した事はない」

「そういうこつたな。今の所敵と繋がつてると思わしき少年を見つけたただけだけど、市内を移動してる魔導師は結構いるみたいだしな……」

全員の情報を連結しているので、市内を探索している魔力もちについてのはわかつている。

かなりの数の人間がそこらを歩き回り、何かを探すような動きを見せている。映像を出したい所だが、専門の設備がない状態では厳しい。

それからも探索を続け。桃子さんが戻ってきたら事情を説明。その後、なんなら部屋を貸してくれるという事なので、お言葉に甘える事にした。

別にホテルで暮らしてもよかったのだが、最悪の場合はなのはちゃんが襲われる可能性もある。部屋に関しては別荘を使う。

別荘は一日経たないと出られないが、あれはあくまでも時間経過を調整するためのものだ。内部と外部の時間を同一にすれば、いつでも出られる。

晩飯をご馳走になり、魔法を教えると言って来る桃子さんを士郎に預けておく。やれやれでござるのう。

場所を別荘に移し、なのはちゃんの魔法の力を見せてもらう。記憶だけが逆行した様子なので、リンカーコアは未成熟な状態のようだ。無理は出来ない。

「まずは……誘導弾制御。どれくらいの数なら精密操作が出来る？」

「そうですね……レイジングハートの補助もあれば、三十個くらいなら」

「中々だね。じゃあ、何個までなら作れる？」

「うーん……ある一定の動きをさせるだけなら70個くらいなら」

「うん。誘導弾制御は問題なし。弾速を見せてもらえるかな？」

速度に関しても中々。これだけ上手く誘導弾を使えるのなら、即戦力にもなるだろう。

「次は砲撃。本職は砲撃魔導師だったね」

デバインバスターやスターライトブレイカーを見せてもらい、スターライトブレイカーは体に負担が掛かるので多用はしないように言って置く。

レベルにすれば、遠距離でのランクはS・と言った所。この年齢……とはいう物の精神年齢は……なのはさんじゅっきゅうさいの名誉にかけて言わないでおこう。

まあ兎に角、なのはちゃんかなりのレベルの魔導師だ。かなり欲しい人材だが、無理な勧誘はすべきではない。

「要さんはどうなんですか？」

「俺？俺は基本的に広域攻撃だからなあ……君の言うはやてちゃんと基本的に同じだよ。」

とはいう物の、戦い方を教えてもらったのがリインフォースだからねえ……似るのも当たり前かな。

でも、本来の俺の資質は収束。つまり所、広域攻撃型じゃなくて、君と同じ砲撃魔導師になるはずなんだよ」

そっぴいながら、空間に漂う大量の魔力を収束してみせる。200年以上も研鑽し続けてきたのだ。収束に関しての技量は他の追従を許さない。

自分の魔力は制御や根幹部のみに使い、ほんの僅かな量でSランク砲撃を完成させてみる。

「これを使うと、別荘が危ないからやめておこう。まあ、収束っていうのはあくまでも才能があるってだけでな。

俺は基本的に広域攻撃が得意だ。というのも、俺みたいな高い魔力持ちの人間は戦場の要になるからな。

単体殲滅や狭い範囲内攻撃じゃ駄目なんだ。広域攻撃が出来ないとな……」

ナギに関しては千の雷が使えたし、ラカンがふざけた気の使い手だったし。俺は二人以上の魔力と気の量だったから、必然的に広域攻撃になる。

それに、最初はリインフォースとのユニゾンで戦っていたから、自然とそうなっていくのは仕方ない。

「にゃー……要さんに弱点なんてあるんですかー？」

「うん？んー……あるぞ」

「あるんですか？」

「うん。近接戦闘だ。そつちは本職じゃないからな」

「……御神流免許皆伝ですか？」

「うん」

「……それ、一般人にしてみたら弱点じゃないです」

「うん。分かってる」

「にゃー！本当はどうなんですか！？」

「俺に不可能はねえ」

「うにゃー！！！！！」

無論の事ながら、俺にだって弱点はある。あるが……教えると思つてんのかバーカ！

「ま、そんな事はどうでもよろしい。この別荘は俺の私物だ。魔法の練習や慣らしを自由におきなさい」

「はい」

「ここは外での一時間が六時間になるように設定するから、好きなだけ練習しなさい。ただし、出来るだけ早く寝る事。いいね？」

「はい」

それだけ言つと外に出て、シャルたちの所に向かう。

「どうだ？」

「駄目ですね……全然見つかりません。これは長期戦になりそうです」

「次元干渉型ロストログアだからな……ここから離れるわけには行かないし……近くを巡回してる船はどうだ？」

「21時間後に到着予定です。到着予定艦はアースラだそうです」

「確か、艦長はクライド・ハラウンだったな。同乗してる執務官は……だれだったか？」

「クロノ・ハラウンです。クライド・ハラウンとは親子関係との事。新暦59年に養成学校に入学。新暦61年卒業。

新暦63年に執務官試験に合格。その後、時空航行艦アースラに配属。現在14歳。魔導師ランクは総合ランクAAAです」

「まあ、問題ない程度か……今までの経歴は？」

「若手ナンバーワンの実力だそうです。既に戦場も経験しているとの事」

「なるほど。兵士としては完成してるって事か。アースラに搭載されてる武装は？」

「巡回任務中のため、基本的に魔導砲のみだそうです。質量兵器による武装は有。武装局員の平均ランクはB。

装備は携行可能な小火器と手投げ弾などの爆発物程度との事」

「なるほどね……」

時空保安局局員は質量兵器の所有を許されている。完全な廃絶など不可能なのだから。

そもそも、力は力だ。魔法なんぞ比較的クリーンだなどと言われているが、そんなもの関係ない。むしろ個人が保有できて町を一つ身一つで消滅させられるのだから、むしろ物騒だろう。

ちなみに、民間でも一応の所持は可能だ。ただ、制限はかなり厳しい。保安局員の監査が結構な頻度で入るし。

「敵の情報に関して分かった事はあるか？」

「はい。敵の騎士甲冑のデザインに共通点を発見。これです」

空間投影モニターに映し出されたのは、自分の尻尾を飲み込む蛇を図案化したマークだった。

「次元犯罪組織ウロボロス……か」

「はい。世界を破壊する事を目的とした犯罪組織です。声明として、この世界は夢であり、現実ではないとの事。

そして、夢から目覚める為に世界を滅ぼすとの事です。組織の首謀者の名はグレット・アルウェイク。

性別・男性。年齢・59。魔導師ランクSS+。経歴は不明。ですが、47内部世界のスラム出身である事が確認されています。」

「確かそこは……50年位前に戦争があつた地域か？」

「はい。51年前の戦争です。グレットは連合側の少年兵との記録

が残っています」

「ふうん……まあいい。そろそろ交代しよう。シャルは別荘で仮眠を取って来い」

「はい。お言葉に甘えますねー」

別荘に入っていたシャルを尻目に、俺は探索魔法を受け継いで探索を開始する。数百のサーチャーの情報なんて、プログラムであるヴォルケンリッターが俺でないと処理出来ん。

俺の脳味噌は検査の結果、異常な成長をしているらしいのだ。前に言っていた神の影響だろう。数百年分の記憶を保持できるようにしたのは、多分だが脳を成長するようにしたのだろう。

だから、マルチタスクの数も増やせるようになったのではないだろうか。普通は10個前後が限界で、公式記録では最大17個だそう。俺は198個に分割できる。

莫大な演算能力と思考速度。常にマルチタスクを使っていないと、世界がゆっくりに見えて仕方ない。常時神速の領域に入ってるようなもんだ。思考速度が速すぎる。

きつとあれだ、俺、生体コンピューターテンマのコアとかになれるぜ。亜空間の危機から宇宙を救うんだ……馬鹿言っでないで仕事するか。

まあ、それはいいとして、俺のマルチタスクのタスク数は年に一つの速度で増えてる。もっと酷使すれば早く増えるだろうがな。

思考速度に関しては、神速を使っている影響だろう。それに加えてマルチタスクを使えば使うほど思考速度が遅くなるから、無自覚ながらも、それを感じ取った脳が進化したのだろう。

一般人にとつての1秒が、俺にとつての4〜5秒程度に感じられる。マルチタスクでそれを分散させれば一般人の感覚を保っていられるのだがな。これの所為でタスク数が増えているのだが。

神速の領域に入ると、一般人にとっての一秒が俺にとっての40秒だ。もうバカなの？死ぬの？ってレベルだ。ちなみにだが、気なしの御神の剣士の神速は凡そ五倍前後に思考加速をしている。体の動きについてだが、凡そ三倍前後だ。理論上時速100キロ近くで走れる事になる。たびたび消えたと表現されるが、遠くから見れば普通に見える。近い場所で急加速するから見えなくなるのだ。あと貫のお陰だ。

「はあ……コーヒーでも飲むか」

夜天の書の格納領域から、遙かな昔……大体190年位前からチビチビと消費していた帝国の泥コーヒーを取り出す。これが不味いんだ。

凄まじく苦く、奇妙な酸味があり、どろつとした舌触り。喉にガツンと来る不味さ。最低の後味。どれをとっても不味いと言えない。

いいところがあるといえば、眠気は吹っ飛ぶ所だろうか。しかし、飲みすぎると中毒症状が出る。別に薬物が入ってるわけではないが、ふとした拍子に飲みたくなるのだ。

最早殆ど残ってない。保安局の元になった時空統合軍の泥コーヒーも中々だった。軍は寝てるときだろうがスクランブルが起きるので、こういった不味いコーヒーは必ずあるのだ。

飲みたくなるのは分かっていたので、毎日飲んでも五年はなくならない量を確保してある。加えて言うと、製法も調べてある。

「うん……こりゃ不味い。もう一杯飲もう」

「何故不味いのに飲むのですか？」

「説明が難しいが……匂いが強い料理があるだろ？」

「ええ。ありますね」

「あれってさ。一度食べたら暫くは食べなくてもいいと思うけど、ふと食べたくなったりしないか？」

「……あります」

「それと同じだ」

「はい。分かりました」

グルメなリインフォースには分かりやすい事だったかねえ。そんな事を思いながらも、不味いコーヒーを飲む。

昼に美味しいコーヒーを飲んだので、逆説的に不味いコーヒーの味を思い出したのだ。二杯目の泥コーヒーを飲み終え、空気中の水分を集め、それでカップを洗う。

そして、探索に戻った。

ふと、思い出す。今から……八十年くらい前か。その頃、俺は次元災害に巻き込まれ、異世界に飛ばされた。

次元断層に巻き込まれたのだ。当然の事ながら、そんな事が起きては死んでしまうだろう。俺以外に巻き込まれた人物はすべて死に至った。

そして、騎士甲冑を維持する魔力が尽きる頃に、ある世界に放り出された。そこは、地球とソックリの場所……平行世界だった。

そこで防いだのは、次元世界所の規模ではない大災害。平行世界間の災害。時を壊す災厄ヒドゥン。理由不明。原因不明。すべてが不

明の大災害。

全てを凍りつかせてしまふ、最悪の大災害……そして、それを撃退した少女……高町なのはとクロノ・ハーヴェイ。

クロノ・ハラオウンの写真を見て驚いた。クロノ・ハーヴェイとそっくりだったからだ。思えば、クロノ・ハーヴェイは父の旧姓と言っていたし、あの影の薄い妖精はリンディ・ハラオウンと言っていたし。

本当はクロノ・ハラオウンという名前だったのだろう……決別の意味を込めて、ハーヴェイという姓名を名乗ったのだろう。

ヒドゥンというのは、超大規模の魔力収束現象。それが波のように押し寄せ、時空間因果律を破壊してしまうのだ。その魔力たるや莫大。

今回の事件でばら撒かれたジュエルシード。あれを21個全て同時共鳴現象を起こし、然るべき手段を持って増幅させた魔力をぶつけたとしても防げるかどうか……。

理論上、必要な魔力量は8000億前後。俺でも賄いきれない莫大な魔力だ。それを、クロノはアイデアシードを使って得ようとした。けれども、悲しい記憶は大切だったからこそ悲しいという信念を持ったなのはによって防がれてしまった……。

二人の想いがぶつかり合って、二人の心が通い合って、あの大規模災害を防いだ。人の想いはとっても強いから。記憶から生まれる強い想い……。あの事は今でも強く心に残ってる。

ふと、あの時に撮った写真を取り出す。色褪せてしまったけれども、とっても大切な思い出。写真が色褪せても、記憶は色褪せない。それを、大切だと思う限り。

あの時、俺が居たお陰かどうかは分からないけれども、ヒドゥンは百年単位で起こらないそうだ。三十年周期で起こったことからすると、十分な事だと思う。

ヒドゥン……すべてを氷付かせる災厄。ヒドゥンが起こる理由……それは、次元災害の影響。次元間の時空断層や次元震。それが溜り

に溜まって、平行世界間で起こる災害がヒドウン。

だから、俺はヒドウンを少しでも減らす為に戦い続けよう。この命
尽きるまで、もう悲しい事を起こさせないために。戦って見せよう。
そろそろ、あっちのリンディさんに頼んで遊びに行こう。80年も
経ってるけど、こつちとあつちでは時間の流れは違うのだ。こつち
の八十年が向うでの五年程度なのだから……。

五年くらいで平行世界間の時空が安定するから……ここは平行世界
間でも端っこに位置する場所。だからそこまで時間の流れが違って
しまうのだ。

ミッドチルダは平行世界間で中心に位置する場所にあり、あの地球
があつた世界は、そこから比較的近い。ちなみにだが、あつちの地
球には次元世界はない。

「元氣かな……みんな……」

高町家の皆で撮った写真。そこには、なのはがいて、桃子さんがい
て、恭也がいて、美由希がいて、レンがいて、晶がいて、フィアッ
セがいて……。

とってもにぎやかな家族。でも、そこには士郎が居ない。寂しいけ
ど、皆が居るから寂しくない。

そして、その写真には、クロノがいて、リンディさんがいて、俺が
居る……大切な記憶の結晶。この大切な写真の思い出。

似てるけど、ちよつと違った世界。大切な思い出だ。

第五話 流転する運命と、鏡写しの願い（後書き）

ヒドウンやらなんやらはオリ設定です。

とらハ3持つてるんですけど、プレイする時間がありません。

仕方ないのでオリ設定で埋めます。調べても情報があんまり出てきませんし。

とらハ3の要素については、後々現れてくるので。

第六話 輪廻の輪と時を翔ける船

シャマルとリインフォースが交代し、シャマルと俺が交代する。そのローテーションを組んで探索魔法を続けていたが、ちっとも見つからない。

こうなったら結界を展開してから魔力流を起こして強制励起させた方が早いのではないかと思える。

「ああもう！やめやめ！もうやめだ！探索魔法なんてやめっちなえ！市内の監視で十分だ！

次元犯罪者側の動きだけ監視しとけ！それで十分だ！デバイスだけに任せろ！魔法を使ったら報告！それでおk！」

「それもそうかもしれませんがー……」

「発動まで一切の魔力が漏れないのでは、探索魔法で探知するのも難しいですし……」

形状と色のみで探索させた結果、町の宝石店やらにも引っ掛かってしまい、ちっとも探索が進まないのだ。もう犯罪者側の監視だけでいいや。

既に夜の二時ごろ。そろそろエヴァ来てもいい頃合だと思っていたところ、俺の影から金髪が浮き上がってくる。

「エヴァー！」

「うわぁっ!？」

飛び出してきた愛する妻を抱き締め、そのままゴロゴロと転がりま

わる。

「か、要か……驚かせるな……」

「ごめんごめん。にしても、遅かったな？」

「ああ、ルイスの戦闘訓練が思いのほか長引いてな。すまない」

啄む様なキスを交わし、強く抱き合う。

「それで、調子はどうだ？」

「もう全然駄目だ。21個のロストログアがばら撒かれたんだが、まだ一個しか見つかってない」

「ふむ？となると、励起するまでは待機といったところか？」

「そそ。という訳で、デートに行こう。デート」

「仕事中だろうが……ま、まあ、バレなければ問題はあるまい」

頬を紅く染めながらも肯定するエヴァに萌えながらも、子供達は二人でも大丈夫だろうかと少し心配になる。

実年齢は既に70歳近いが、精神年齢及び肉体年齢は10歳児前後のままなのだ。知識に体と精神が追いついてないというところと分かりやすいだろう。

まあ、なにかあったら連絡するようには言ってるし、チャチャゼロもいるから問題はないと思うが。

「とはいっても、まだ3時くらいなんだがな」

「フフン。私にとってはこれからが本領発揮といった所だな」

「じゃあ夜遊びに行くでしょうか」

「入るような店がないぞ」

「意味もなく町を練り歩いたっていいじゃないか。俺はエヴァが居れば楽しいから」

「フ、フン……世辞を言ってもなんにもならんぞ」

「エヴァったらツンデレさんなんだから。結婚してから150年近いのに、なんでそんなにツンデレさんなのかなあ」

「なにがツンデレだー！お、お前は毎回毎回私をツンデレツンデレと……！」

「そんなにツンツンしてても、俺とエヴァしかいないと、俺にくっついていつまでもはな「わー！わー！」い癖にい」

「言うなーっ！」

「ええ、仕方ないなあ。じゃ、あんまり騒ぐと、士郎達にも迷惑だし、外に出るとしようか」

「士郎？というと、あの御神の所の漬垂れ小僧か」

「そうそう。あいつの息子もでっかくなってな。ついでに言うと、娘のなのはちゃんが、強い魔力持ちでな。頑張れば総合ランクでS

Sを取る事も不可能じゃないだろう」

「ほう。それは凄まじい才能だな」

「その代わり、御神流の才能は殆どないらしい。体捌きと飛針や鋼糸の扱いを覚えてる程度らしい。それも3年近くかけて覚えこませたらしいし」

「確かに、そちら側の才能はないようだな。まるで、御神流の才能を魔法の才能に変えたようだ」

「ありえるかもね、っていうと、御神流の因子は魔力ランクにしたらSに相当しかねないのかよ。なのはちゃん是一般人程度の才能はあるらしいし」

「あのチート一族ならありえない話ではないぞ。なんと言ったか、あの一臣とかいう奴。アイツは魔法障壁を抜いてくるわ、魔法障壁を叩き壊すわ、生身で時速100キロ近い速度で走るわ」

「気を教えた所為で、更に早く強くなったしね……もうなんなのってレベル」

そんな事をいいながら、穩行を使いながら外に出て行く。暗い暗い、夜の時間だ。草木も眠る丑三つ時（午前2時の事）という奴だ。真祖の吸血鬼であり、夜の女王であるエヴァにとって、もっとも力が強くなる時間。月は半分ほどといった所だが、夜というだけでも吸血鬼は強い。

「いい夜だな」

「ああ」

肉体年齢を10歳程までに落とし、エヴァと手を繋いで歩き出す。エヴァは黒いロングスカートに、黒いハイネックのセーターを着ている。

子供らしい容姿ではあるが、雰囲気は大人っぽい。そのアンバランスさがそこはかない美しさをかもし出す。

「こうしてると、いつつも思う事があるんだ」

「なんだ？」

「俺、すっげー幸せ。こんなに美人で可愛い嫁さんが居て、家族が居て、子供が居る。エヴァが居るだけで、俺は幸せだ」

「なっ……い、いきなりそんな事を言うな……」

「んー、だって、思ったら言うのが俺の信条だからね。それに、エヴァには隠し事なんてしたくないし」

「わ、私も……お前が居れば、それでいい……お前が居て、娘と息子が居て……家族が居る……とても幸せだ……」

「そっか……嬉しいな……あの日の誓い。覚えてる？」

「ああ……覚えてるさ」

空を見上げる。俺とエヴァ。二人を見ているのは、空で優しく見守る月だけ。

「国後要は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを裏切らない」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、国後要を裏切らない」

「国後要は、その命あるまでエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを守り続ける」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、その命あるまで国後要を支え続ける」

「そして……」

「「死が二人を別つその時まで、二人は互いを裏切らず、二人は約定を違えない」」

声を合わせて、言う。とても暖かな気持ち。とても優しい気持ち。これが幸せ。

「私のファミリーネームは変わってしまったが、この誓いは永遠に途切れない」

「そつか。俺もだ。何しろ、一目惚れは一途だからな。もう、他の奴なんて眼に入りやしない」

「私もだ……お前以外、眼に入らない。お前が居る……それだけで幸せだ」

「愛してるって百万回言ったって足りない。一日中抱き合ってたっ

て足りない。気が遠くなるまでキスをして足りない。

俺の中の、エヴァが好きで、愛してるって気持ちは……」

「永劫に等しい命の中で、私の好きという気持ちをを前にとれだけ伝えられるだろうか……終わらぬ命の中で、どれだけの愛を前に渡せるだろうか……」

「俺達には永遠に等しい時がある。でも、それに甘えてちゃ駄目だから」

「積極的に愛を交わそう。この命尽きる、その時まで」

互いの瞳を覗き込んで言う。透き通る黒水晶のような瞳。月光を受けて輝いている。

「っと……ぼんやりと歩いてるうちに、妙な所に来ちゃったな」

「ふむ……この町を一望できる高台か……」

「おっ……エヴァ、見てみるよ」

「うん？」

空を指差す。そこには、綺麗な星空が広がっていた。春になる直前といった所の冷たい澄んだ空気が、星を綺麗に映し出している。町が近いけれども、空はとても綺麗に輝いて見えた。なんとなく、座り込んで、空を眺める。

「綺麗だなあ……」

「そうだな……」

「こつちの世界の火星の異相世界にはムンドウス・マジクスはあるのかな」

「ないだろう。既にこの世界では数百年以上昔に魔法が失伝している。もしかしたらあるかもしれんがな……」

「うん……ネギたち、どうしてるかな？」

「あれからもう150年以上経つのだぞ？死んでいるだろう……」

「それもそうか……まあ、ラカンはまだ生きてるかな？」

「アイツは確かヘラス族だったな……200歳くらいなら、人間で言う70歳前後か。生きているんじゃないのか？」

「そうだよな……茶々丸はどうしてるかな……ロボットだから、まだ生きてるかもしれない」

「そうだな……あいつは、私にとって二体目の従者だった……人形契約は世界を渡ってから確認できないしな……」

それでも、常に持ち歩いているカードを取り出すエヴァ。

「俺達……紅き翼が倒すべきだった敵……その尻拭いをネギにさせるのは、ちよつと心苦しいけど。」

俺達が何時までもでしゃばってちゃいけない。老兵は死なず。ただ去るのみ。それに、ネギなら絶対に出来るって信じてる」

「ぼーや……いや、ネギなら乗り越えられる。私も信じているさ。何しろ、お前と私が鍛えた弟子だ。出来てもらわなければ困る」

「そうだな……俺の、いや、俺達の想いが籠ったデバイスを渡した。そして、エヴァがネギの為に作り上げた魔法発動媒体を持っている……。」

乗り越えて貰わなくっちゃな。それくらいは……出来るさ。絶対に」

「ああ……」

気付けば、空が白み、太陽が顔を出し始めていた。

「見ろ……すっげえ綺麗な朝焼け……」

「ああ……綺麗な……」

「それに、エヴァが隣に居る……余計に綺麗に見える」

「違うだろう？ 私とお前が居れば……どんな光景だって、どんな場所でも綺麗に見える……二人なら、どんな場所も輝いて見える……」

「そうだな……」

空を見上げて呟いた言葉は、静かに風に流されていった。東から駆け抜ける風。東から登る太陽。

夜の暗さに慣れた眼は、朝焼けに染まる草原が、まるで黄金に輝いて見えるようだった。

「そろそろ、帰ろうか。あんまり体を冷やすとよくない」

「ああ、そうだな……」

手を差し伸べ、エヴァは俺の手を掴んでくる。暖かな手。とても幸せ。

「これが漫画とかなら、愛する吸血鬼の女性は、朝日に燃やし尽くされちゃうんだがな」

「ハイ・デライトウォーカー（日差しの下を歩く吸血鬼の王）である私には関係ない話だがな……まあ、100になる前は日を浴びると体が燃えたが」

「確か、50位まではあつという間に灰になってたんだっけ？」

「不老不死だったからな。夜になるまでは灰のままで動けなかった。100位までは体が燃えて、150位までは日差しの下を歩くだけで酷い日焼けになったな」

「吸血鬼つてのも難儀だね、本当に」

「まあ……不老不死だったお陰でお前と出会えたのだ。昔は恨んだが……今では悪くないと思ってる」

「そうさね……吸血鬼にした奴って、変態ヤローだったか」

「ああ……自分で言うのもなんだが、私の容姿は人形のように美しいからな。それを永遠に残そうとしたのだろう。」

あのロリコンジジイの家に預けられたのも、両親には借金があったからだしな……」

「まあ、その理論で行くと俺もロリコンになるといつか、ロリコンなんだがな……」

「私しか眼に入らんのだろう？」

「ああ、そうか。エヴァコンだな」

考えてみりゃーそうだな。俺のロリータコンプレックスっていうのは、父性愛と性欲によって成り立つ。特に父性愛が強いので、ヴィータとは200年以上一緒に居るが手を出して居ない。

エヴァとは再会してすぐに手を出したわけだが。んで、性欲と愛情っていうのはエヴァに向かって、父性愛っていうのは他の幼女に向かってるわけだ。

ヴィータ然り、リリウム然りってな。我が家は圧倒的ではないか。萌え要素と戦力的な意味で。ツンデレ洋ロリにデレデレ洋ロリ、ツンデレ赤毛悪口ロリ。元氣一杯男の娘。ルイスの娘

剣術馬鹿おっぱい剣士。どじっ子ほんわか僧侶。犬耳シヨタ。ハラペコクール。シヨタロリチートな男の娘（こっちは俺だ）。

戦力的な面で見れば、全員が全力の掃討戦を行えば一級ロストロギアの被害並みの被害が出るだろう。具体的に言くと世界が一つ滅ぼせる。

「要は特に隠すような事もないのだったな」

「うん。まー、あの世界に転移するまでは普通のガキンチョとして生きてた訳だし。前の容姿は普通だったな……可愛いつて言われる事が多かったが」

「フツ、まあ、確かに男といえば男だが、男らしいとは言えない容

姿だったな」

「まあ、戦争が終わった頃は20になってたけど、それからはずっと別荘で鍛錬してたりだったしなあ……なんかつまらねー人生送ってるな、俺」

「外から見たら凄まじい人生だな。言うだろう？ 悲劇は遠くから見れば喜劇だったな」

「なるほどねえ。自叙伝にしてみりゃ売れるかもしれんな」

「いや、間違いなく売れるだろう。お前、自分が150年近く次元世界の法を守っている最強の魔導騎士だという事を自覚しているか？」

「してるけど、どうでもよくね？」

「まあ、お前はそういう奴だったな」

笑いながら、高町家の門を潜り、修練をしているらしき道場に入る。

「おーっす。やってるかー？」

「ああ。要か。今日は小さいんだな」

「本当に小さくなってる……」

「そつえば、美由希は当時は3歳くらいだったか」

かく言うお前は当時7歳だったろうに。

「そつちの子は？」

「紹介しよう！俺の妻のエヴァンジェリン・A・K・M・国後だ！」

「ミドルネーム多いね？」

「驚くのはそつちか！？」

「要の妻がこんなに小さい事に驚くべきだろうが！」

おーい、お前さん方。エヴァが怒るぞー。

「あのね、見た目に惑わされちゃ駄目だよ？物事の本質って言うのは、外だけを見てちゃ駄目なんだ。内側こそが本質だよ」

「な、なんかいい事言ってる……」

「あの要が……」

「うちの一家なんて年齢詐称の巣窟みたいな所なんだから。うちで一番年下なの、何歳か知ってる？70歳くらいだよ？」

「お爺ちゃんおばあちゃんの年齢じゃん……」

「まあ、俺の子供なんだが」

「嘘っ！？」

「俺より年上だったのか！？」

「俺より年下にしか見えなかったぞ!？」

「うちの子は成長が遅いんだ。十中八九両親の影響だな」

何しろ俺は不老で、エヴァは不老不死だ。10年で1歳くらいしか年を取らないが、それでも十分だろう。百年で一歳とかだったら笑うしかない。

「そ、そうかー……そ、そろそろ朝飯だぞ? 桃子の飯は美味いからな!。た、楽しみにしておけよー?」

「おお、なら手伝ってくるとしよう。迷惑ばかりかけるわけにもいかんしな」

エヴァと連れ立って母屋に向かい。桃子さんの料理を手伝う事に。

「おはようござんす。桃子さん」

「あらあら、なんだか随分小さくなっちゃったのねえ」

「こっちの方が慣れてるんで」

戦闘になると、体格が小さい方が不利なのだが、体格が大きいままだと、微妙に感覚にズレが出るので、小さい方がまだマシだ。

「そちらの子は?」

「俺の嫁さんですよー」

「エヴァンジェリン・A・K・M・国後だ」

「こう見えても、世界中の誰よりも年上なんですよ。年上といったら屋久島の縄文杉くらいじゃないですかね」

「そ、そうなの……」

少しばかり笑みを引き攣らせたが、それでも笑みを崩さないのは流石だ。

「もう可愛いでしょ？自慢の嫁ですよーちょっとツンデレさんなんですけど、それがまた可愛くって」

「な、何を言っている!」

見事な拳が俺の顔に決まり、壁に激突する。

「フ、フフ……照れ隠しに常人なら十回は死ねる拳を出すのも、エヴァのチャージングポイントさ、全て受け止めて見せるよ」

実を言うと、俺の女性人格のマゾヒズムは男性側の潜在意識であり、軽度のMでもあるのだ。

「フンッ!」

顔を真っ赤にして歩き去るエヴァ。

「仲がいいのね」

「でなきゃ150年も夫婦やってられませんよ。出会ってからかれ

これ170年くらいで、結婚したのは150年位前ですかね」

「そう……だんだんと何に驚けばいいのか分からなくなってきたわ」

「いいんじゃないですかね、それで。あ、料理、手伝いますよ」

「あ、じゃあお願いするわ」

そんな感じで朝飯を準備し、食べて、そのあとはまた探索して……
気が狂いそうだ。アースラ到着まであと8時間もあるのか……。

「あー……コーヒーが不味い……ん？」

海軍式泥コーヒーを飲んでいた所、テーブルの隅っこに可愛らしい
ハンカチに包まれた弁当箱を発見した。

「ふむ……なのはちゃんのかね」

時計を見ると、そろそろ昼飯の時間だろうと言う所。気付いてい
なかったようだし、届けてやるべきなんだろう。

話を聞いた限りだと、天気の良い日は仲のいい友達と屋上で弁当を
食べているらしいからな。しかし、毎日お弁当だなんて桃子さん大
変だろうな。

でも、俺としては作り甲斐があるから結構嬉しいかも知れない。お
い！誰だ！主夫って言いやがったのは！嬉しいからもつと言え！

「シャマルウ。俺、ちよつとなのはちゃんに弁当届けてくる」

「はいはい。なんとなくウの発音に悪意が溢れてる気がしたんで
すけど？」

「いや、声は同じ癖に料理はヘタクソだなと思って」

そんな事を言いながらも、肉体年齢を20に引き上げて瞬動術で飛び上がる。魔法を使って飛ぶことは出来ないので、瞬動術で移動するしかない。

まあ、この世界にはHGSっていう天然の魔法使いが居るから……別に飛んでもおかしくはないんだがな。飛行魔法のスレイプニールもフィンって言えばいいんだし。

縮地天疆を繰り替えし、なのはちゃんの魔力を辿っていく。無論の事ながら弁当は揺らさないようにしてだ！

「つと……あそこかな……」

耳を澄ませて見れば、三人の話し声も聞こえる。二〇〇メートルくらい離れてるが、犬並みに耳がいい俺にとっちゃ普通に聞こえてくる。

というのは冗談で、サーチャーで見ているのだ。ローベルなんたらリヒターは気付いてない。

「あ、あれ？お弁当、忘れちゃったの……」

「なによ、ドジねー。土郎さんが届けてくれたりしないの？」

「今日は朝から入ってるから、気付くのは昼過ぎなの……」

「あ、私のお弁当分けてあげるよ。ね？」

「んじゃ、俺のも分けてあげるよ。俺の弁当の蓋使うか？」

と、これ以上待たせるといかな。足の裏で気を爆発させ、一気に接近する。

だあん！と壁に激突するように着地し、壁を蹴り、空中で半回転して着地する。

「うおおおお！？」

「ななな、なに！？」

「ひ、人が……」

「か、要さん？」

足がしびれた。まあ、それはいいや。懷からファンシーなハンカチに包まれた弁当箱を取り出す。

「はい、お弁当忘れてたよ」

「あ、ありがとうございます……じゃなくって！」

「うん？いらなかった？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど……」

「じゃあ、なに？」

何か駄目だったろうか？そう思って首をかしげていると、金髪の子が指を突きつけてくる。

「あ、あんた何者よ！？」

「うん？ああ、私はなのはちゃんの父である土郎さんとは旧友でね。それと、昨日、君達が誘拐されかった所を助けたんだけど、覚えてない？」

「あ、貴方が要さんですか？」

「そうだよ。君は確か……すすりちゃんだっけ？」

「すすかです！」

「で、君はアリスちゃん」

「アリスです！」

「分かった。月村アリスにすすか・バニングスね。覚えてよ」

「逆です！」

「私がバニングスよ！」

「そうだったのか、ごめん。私は国後要。土郎と恭也とは同門の剣を学んだ間柄だ。昨日の件については、仕事でこの町に来る必要があつて、偶然君達を見かけたからね」

「あ、それに関してはありがとうございます」

「礼は言つわ……それで、どうやってここに来た訳？」

「走ってきたんだけど？」

「どうやって空中を走るのよ!？」

「ええ!？これくらい出来ないと中学校入れないよ!？」

「うそつけ!」

「仕方ないな……瞬動術っていう技で飛んできたんだよ。縮地とも言っただけだね」

「それって中国拳法でしょ!？」

「これくらい士郎と恭也にだって出来るさ」

「嘘っ!？」

「それが、出来るんだよ……アリサちゃん……」

「すぐかちゃんを知ってるのか。ところで、なんたらかんたらうんたら君。ローベル・ヴァイス・リヒターですさつきから殺気とも呼べないような怒気を向けてるのはなんだね？」

「まあ、いいや。大した殺気でもない。どっちかと言うと、団欒を邪魔されたからって感じだろう。」

「それじゃ、私は仕事があるから。ああ、それと、なのはちゃん」

（そこの銀髪オッドアイ（笑）の事には気をつけてくれ）

「なんですか?」

（分かってます）

「お弁当。次は忘れないようにね」

（昨日の探索の時点で、既に次元犯罪者との繋がりがあることは濃厚だ。独自でジュエルシードの探索もしていた）

「にやにや……分かりました……」

（はい。最悪の場合、念話で伝えます）

「まあ、今日は私が居たからいいけど、次は居るとも限らないから……」

（うん。そうしてくれ。レイジングハートには渡したプログロムがあれば、すぐに転移で駆けつけられるから）

「はい。気をつけまーす」

（はい。分かりました。隊長殿）

「それじゃあね〜」

ジャンプして柵の上に立つと、そのまま後ろに倒れる。なにやら悲鳴がしたが、気にしないでおく。

虚空瞬動で移動し、木の枝を掴み、一回転して上空に体を放り出す。そして、更に虚空瞬動を繰り返し、家へと戻る。

（そつえば……なんで自分のこと、私って言うてたんですか？いつもは俺でしたよね？）

（ああ、今は仕事だからね。仕事的时候はいつも私って言うんだよ）

（そうなんですか。そーいえば、はやてちゃんは関西弁なんですけど、要さんはどうなんですか？）

（んー……まだ、私が小さい頃……小学校に上がる前は関西地方に住んでたよ。意識すれば関西弁も使えるし）

（あ、そうなんですか。やっぱりはやてちゃんとは共通点結構あるんですね）

（ま、どうでもいいことだけどね。それと、その内君の紹介でははやてちゃんの家に行かないとね）

（闇の書の修復……ですよね）

（うん。その件に関してだけど、修正プログラムの作成自体は難しくないんだ。覚醒はしてなくても、主の権限を使えばプログラム自体は見れるから。

でも、問題はプログラムの挿入……挿入するには完璧な掌握……つまり、666ページの蒐集をしなくちゃいけない）

（それって……）

（でも、あくまで理論値だけど、私を蒐集すれば550ページは埋まるからね。後はヴォルケンリッターの皆から少しずつ蒐集してもえれば大丈夫。

そして、主にプログラムを持たせて、闇の書が覚醒した瞬間に、

全員からのブルートフォースアタックをかける。

幸いにして、プログラムがゴチャゴチャと詰まって圧迫されてる闇の書よりも、今までずっと整理し続けてきた夜天の所の方が処理能力は高いから。

殆ど問題はないよ。強いて言うなら、防衛プログラムを弾き出しでの破壊だけど……蒐集した人物や生物が影響するからね……)

(という事は……)

(うん。私たちと同じ存在になる、だから、私は蒐集しない。アルカンシエルを使われたら勝ち目がないからね……。

幸いにして、ヴォルケンリッターの面々だけでも蒐集を完了させるのは可能だから。完全に蒐集したら消滅しちゃうんだけど)

(でも、ヴォルケンリッターの皆さんは要さんの魔力値を元にしてるから……)

(うん。大丈夫。問題はない)

そう言うってから、夜天の書が新生し、新たな祝福の風が生まれる事に思いを馳せる。

融合騎。ユニゾンデバイス。貴重で危険な品物だ。ユニゾン適合率が高くともほんの数パーセントの融合で融合事故を起こしかねない危険なデバイス。

しかし、それによって得られる力は強大だ。俺は自他共に最強であると認めているが、リインフォースとユニゾンした場合は更に強くなると思っている。

まず、魔法の並列使用数が一気に増える。200個前後の魔法を同時発動できるのが、更に三倍以上になるのだ。そして、魔力容量が更に増える。一億の大台に乗りかねない値だ。

体を完璧なコンディションに整え、思考速度を更に加速させ、主を完璧にサポートする。それがユニゾンデバイス。

現存している古代ベルカのユニゾンデバイスは非常に少ない。悪用を防ぐため、幾つもの違法研究機関を襲撃し、ユニゾンデバイスの実験台に使われていた融合騎も回収した。

ユニゾンデバイスは、デバイス側の自己判断で融合も出来る。もしもだ、要人の元にユニゾンデバイスを送り、ユニゾンデバイスが自己判断で融合したら？

デバイスは主を乗っ取り、周囲を破壊しつつし、主を殺し、その後は戻り、また新たに命令か何かで人を殺すだろう。ユニゾンデバイスは扱いが難しいのだ。

（闇の書は古代ベルカのストレージデバイス。相性としては私達の方がいいんだ。

ベルカ近接戦闘のレベルも高く、近接するための移動魔法も強い。だから、ミッドの魔導師は圧倒的に相性が悪い。

君のデバイスも、それなりの高性能インテリジェントだけど、アームドデバイスとの打ち合いでは負けるでしょう？）

（はい……）

（私のシュベルクロイツは、私の異常な魔力出力に耐える為に徹底的に改造したからね。理論上アルカンシエルの直撃にも耐えるよ）

賢者の石やオリハルコン。丈夫ならなんでもいいやって事で、神珍鉄とかも使ったからな。流石に伸びないけど。

モース硬度というなら18くらいはあるし、魔力への耐久性も徹底的に伸ばしたからね。

（正直な話、ヴォルケンリッターの蒐集をした場合、近接戦特化の

防衛プログラムになる可能性が高いんだ。

だから、戦闘は私達ベルカの騎士に任せなさい。ベルカの騎士は
一対一なら負けはないんだから)

(はい)

(まあ、一対一じゃなくて一方的なフルボッコなわけなんです)

(あはははは……)

思念通話を切り、高町家に戻る。探索の成果について聞くと、敵側の魔導師と遭遇してジュエルシードを奪い合ったそう。

戦闘には勝利して、既にジュエルシードは二つ回収した事になる。

敵側の本拠地についての尋問を行うべきか。

幻想空間で拷問しまくったが、現実では傷が付かない。なんて便利なんだ。聞き出した情報を記録し、シャマルにその箇所の探索を任せる。

敵側は次元犯罪組織ウロボロス。拠点は時の庭園という次元空間を航行する能力を持った巨大庭園だ。凡そ千人前後の居住能力がある。一部の大金持ちしか買えない値段なんだがな。

詳しい事は知らんが、どうやら犯罪者がかなりの数居るらしい。その中でも、貴重なレアスキルを持った人間が中核をなしているとの事。

例えば、レアスキル『剣製』。今までに保安局で五人ほど確認されている。その内二人は保安局に勤めており、残りの二人は既に捕縛し次元牢に幽閉。残りの一人はウロボロス所属だ。

次元牢に幽閉した二人は、似たような容姿を持っており、正義の為に、管理局の傲慢は許せないだのと意味不明な事ばかり言いやがる。管理局ってなんだ？

ロストロギア暴走の兆候を感じ取った現地民が時空保安局に鎮圧の

要請をした所、そのレアスキルを持った少年が、強盗のようにロストロギアを奪い取るなど、独善的な行為は許さんと保安局員を殺害その後、ロストロギアが暴走し、その次元世界の住民の14%が死滅した。連鎖的に次元震が発生し、レアスキル持ちの少年が、これが管理局が傲慢な行動をした結果だなどとほざいて逃走。

AAランク以上の魔導師で構成された、ランカーカウンター部隊に出動を要請。レアスキル持ちの少年を捕縛に成功。少年は最後まで自分が正義だと疑っていなかった。二人とも似たような行動を取って逮捕。出てくるのは4000年後だ。

ちなみに、レアスキル『剣製』の特徴として、黒と白の中華剣を使う人物が多いとの事。古代ベルカにて所有していた人物もそうだったらしい。不思議なものだ。

問題はといえば、剣製で作った武器は非殺傷設定が出来ない事か。最悪の場合の殺傷は許されているからいいのだが、平常時には刃を落とした武器を使うように言っている。

戦争の鎮圧の場合は非殺傷設定を使わないのでいいのだが。疑問といえば、俺の持つ王の財宝と同じ………そういえば、王の財宝が出てきたゲームに剣製ってなかったっけ？どうでもいいか。

他には、レアスキル『吸血』血を吸う事によって肉体を活性化させ、魔力の回復が出来るらしい。恐らくは吸血種なのだろう。『カウンター』ある程度の攻撃までなら反射出来るらしい。

こういった特異なレアスキルを持つ人物の特徴といえば、幼い頃からの脳の活性らしいのだが………どういう事なのだろうか………。

次元犯罪組織ウロボロスは強大な兵力を持っている。少なくともSランクが四名。ニアSランクが六名は居るらしい。最悪の場合、艦載兵器で攻撃する必要があるかもしれない。

最悪の想像を巡らせながら、対抗策を練る。一応、本局に向けて応援をいつでも出せるように待機してもらう。次に、デバイスたちを送ってもらうように頼む。

俺も巡回に出る事とする。なのはちゃんに聞けたジュエルシードの

発見場所がなんとなかるといい。それに、海の中に六つもジュエルシードがあつたらしいしな。

海に向かい、封鎖領域を展開する。海は広いから、わざわざ探索なんてしている暇はない。敵側に気付かれる前に強制励起して全部回収すべきだな。

保安局員としては褒められた行為ではないが、六個も一気に回収できる手を逃す必要はない。さっさと励起してしまうとしよう。

「生み出すは刃。血に染められし紅き鉄片。敵を屠りし獣の牙よ。今その身を以つて事を成せ」

ブラッディダガーの口語詠唱を開始する。もっと数が少なければ、短縮した別の呪文でもいいんだが。

ちなみに、この呪文は俺が作ったものだ。こういった小難しい言葉の方が魔法を行使するという行為に没頭しやすい。基本的に口語詠唱はイメージさえ作ればいいのだから。

背後に3000を超える紅い刃が形成される。杖を振り下ろし、それに合わせて一気に魔法の掃射が開始される。

海に沈み行く紅い刃が地面に到達したのをおぼろげに察知する。それに合わせて、莫大な魔力が放出を開始し、海が荒れ始める。

空へと魔力が放射され、巨大な竜巻が発生する。

「レイデン・イリカル・クロルフル……我、誓約を以つて命ずる者なり。貴き騎士の剣よ、今その刃を持って、災厄の源を散らしめよ」

レイデン・イリカル・クロルフル。この言葉に意味は無い。ただ、思い出として使っているのみの言葉。

解き放った魔力の帯が、六つの竜巻を縛り付ける。リンカーコアに僅かな痛みが走る。流石に封印術式六つの同時展開はキツイか。

封印術式というのは、純粹魔力による拘束のため、放出が激しい。

魔法というのが剣や銃弾だとすると、封印術式は放水みたいなものである。

封印すべき対象が爆弾と考えれば、魔法なぞぶつけたら爆発起こすしな。あるいは液体窒素だと考えてもらってもいい。

兎角、封印術式は魔力の放出が激しいのだ。使う量も多いが、一度に莫大な量を出すため、リンカーコアに強い負荷が掛かる。

俺にとっては既に慣れ切った事だし、時間は掛かるが、何故かリンカーコアの損傷が回復するのでそれほど気にする事でもない。

「はっ！」

封印を完璧に終えて、封印したロストロギアを収納するためのデバイスを掲げ、それを納める。これで、八個……。

ある程度のアドバンテージは取れたかもしれないが、相手側がどう出るか不明だな。そろそろ高町家を出るべきか。

そう思った所で俺へと向かってカツ飛んできた螺旋状に擦れた剣を、シュベルトクロイツで殴り飛ばし、縮地天疆で、狙撃地点へと一気に駆ける。

足元のコンクリートが罅割れ、偽装もせずに堂々と狙撃をしていた馬鹿の元に舞い降りる。バレないとも思ったのか？射線さえ分かれば狙撃位置を判別するなんて簡単なんだよ。

しかし、敵もさるもの。即座に手元に夫婦剣を生み出すと、こちらへと切りかかってくる。太刀筋は悪くない。だが、才能は感じられないな。

杖で剣を受け止め、腰に差していた小太刀二刀を抜き放つ。騎士甲冑生成の際に、同時に腰に着用されるように設定した花月と草月という銘の小太刀。普段は夜天の書の格納領域にしまいこんである。

「こちらは時空保安局最高評議会員の国後要だ。今、貴方は投降した場合、その身柄は保証され、情状酌量の余地もあります。投降し

てください。

投降しない場合、実力を持って制圧いたします。また、その際の命の保障は出来かねません」

「ほざけえっ！」

一気に切りかかってくる。敵の持つ武器は宝具。騎士甲冑で受け止めきれぬ道理ではない。宝具は概念の重みを持って切り裂く物。即ち、防御するには、それを超えた概念の厚みを持った武具でなければいけない。何の概念も持たない騎士甲冑にて受け止めれるはずがない。

「繰り返します。投降してください。今ならば情状酌量の余地があります」

「くどいつ！私の正義を認めぬ保安局に投降する訳がなかるう！」

「そうですか。ならば、実力を持って制圧させていただきます」

上段からの振り下ろし、それを打ち払い、衝撃を徹する。剣の応酬。斬撃の交差。

やがて、徹した衝撃が、青年の腕を痺れさせて行く。眉を顰めると、青年は一言、何かを呟く。

それと同時に、上方から感じた異常な魔力。

御神流奥義乃歩法・神速。

一瞬の逡巡の後に発動した奥義。瞬動術で一気に横へと移動し、上空から剣や槍が掃射されているのを見る。

それはすべてが宝具。BやCランク程度と云えど、人間一人を殺す

には訳ない武器だ。頬を歪め、自分の勝利を疑わない青年の懐に入り込み、剣を弾く。

そして、世界が色を取り戻し、青年の顔が驚きに染まる。

「貴様ツ……！何をしたっ！？」

「言っと思っか、莫迦が」

「貴様……それでも魔導師か！恥を知れっ！」

「人を背後から急襲して貴様こそ恥を知れ。阿呆が。投降するか？
今ならば、まだ情状酌量の余地もあるぞ」

「何度もしつこい！」

何か呟き、手元に魔力が集まる。それを察知すると同時、既に脊髄反射のレベルにまで覚えこませた技が、青年の腕を圧し折る。
小太刀の抜刀からの峰打ち。腕は複雑骨折。魔法を用いた治療を施しても、一ヶ月は安静にしなければならぬレベルの怪我だ。
本来、峰打ちとは相手を殺傷しないための技ではない。斬るよりも峰で殴り飛ばされる方が遥かに危険だ。剃刀で切られるのと、鉄の塊で殴られるのどちらが危険かという話だ。

「うっ、ギヤアアアアアアア ツ！？」

「外部世界における無許可の魔法行使、公務執行妨害の現行犯逮捕だ。貴方に、組織とのつながりがあると分かれば、余罪は更に増える」

「お、俺の腕がつ！腕がああ！？な、なんで！お、俺は、俺はチートを！」

「組織との繋がりを自白した場合、罪状の軽減もありえます」

「俺は、俺はオリ主なのに！？無限の剣製があるのに！」

「うるせえ！」

話も聞いていないようなので、側頭部を蹴り飛ばして意識を刈り取る。ひとまず、足の関節を外しておくか。後は、喋れないようにしておこう。

最後に魔力リミッターをかけてと……剣製は本人の脳のみで魔法を行使してるから、魔力のリミッターをかけないと駄目なんだよな。その後は、本局に連絡を送り、転送魔法で犯罪者を送り届ける。今のままなら五年程度の懲役ですむだろう。まあ、組織とのつながりがわかった場合、ロストログア不法所持も加わるんだが。そうなったら、二十年の懲役は確実だ。ジュエルシードレベルともなると、最悪の場合、終身刑になる可能性もある。

「剣製か……」

青年の剣術……何か奇妙だった。なんといえば言いのだろうか、自分の体とは違うというか……自分の意思と体の動きが反してるという所か？

絶妙な技巧で守りに入っただかと思えば、無理な攻めを行い、その攻めが妙に素人臭い攻撃だったり。

才能はないが、それなりの上手さの攻撃をしたかと思えば、無様な守りに移ったりと、戦闘技術は一流なのに、心構えが素人なのだ。攻撃を回避した場合も、妙に大きい動きで回避していた。しかし、紙一重で避けた次の瞬間には恐怖で顔をゆがめたり。

なんというか、まるで借り物の腕と技で戦っているような動きだった

た。保安局の剣製持ちも、根本は同じだったな……。
だが、それをしっかりと自分のものにしていたし、あそこまで戦闘に怯えるような様子もなかった。アレは一体どういう事なんだろう
か。

「今度、保安局の剣製持ちに聞いてみるかな……」

確か、アリウス・グローライトとか言ったか。若手ながらも既に陸戦AAAランクを取得してる期待の新人だったはずだ。

ひとまずは、あの犯罪者が情報を吐く事を願うとするかな。最悪の場合、精神汚染系の呪いをかけてもいいのだが。

そんな物騒な事を考えながら、高町家に戻り、お礼という事で、翠屋の手伝いをする事にした。それはいいのだが、なんなのだこのメイド服は。

「へい、らっしゃい！」

「ちょおーっと、違うかしら……」

「いらっさんせー！」

「そうでもなくて……」

「へい奥さん！今日はいいいトロが入ってるよ！」

「うちでは扱ってないわねえ……」

「旦那さん！今日はジャガイモが安いよ！」

「それも扱ってないんだけど……」

「あんまりわがままばかり言わないでくださいよ！」

「ええ！？これわがまま！？」

「仕方ありませんね……お帰りなさいませー ご主人様あー」

「そう！それ！いいわ！それでお願い！」

やべえ、軽い冗談でやったら、酷い事になってしまった。マルチタスクの三分の一が翠屋を消し飛ばしてやろうかという黒い思考にそまつたが、全てカット。

無心になって、客の相手をする。セクハラしようとした男子高校生が居たので、腕の骨を外してお帰り願った。ハハッ、スカッとした。

「お帰りなさいませー お嬢様あー」

店に入ってきた三人組の顔を確認せずに言ってから、フリーズした。

「か、なめ、さん？」

「ここ、何時からメイド喫茶になったの？」

「うわぁ……凄い似合ってます……」

そこに居たのは、なのはちゃんと、そのお友達のアリサちゃんとすずかちゃんだった。そして、後ろに居るのは銀髪オッドアイ（笑）なうんたらかんたら君。

「四名様ですね？お席に案内しますー」

最早羞恥心は捨て去り、席に案内してやる。なのはちゃん、引き攣った笑みを浮べてるんじゃないよ。

「かなめさん……」

「言っな……言わないでくれ……」

「その……似合ってますよ……」

「それ、普通は褒め言葉じゃないからね……?」

「ごめんなさい……」

注文を聞いた後、伝票を厨房に渡し、今度は接客したり、厨房に回ったりと忙しい。なんで厨房にまで回らなあかんのだ?

もうホールには回らない。そう思って、皿を洗ったりと、自分の好きな台所仕事を続ける。

しかし、御神流の鍛錬を終えた俺の鋭い聴覚は、ホールの会話すらも拾うのだった。

「ねえ、なのは。なんで要さんは泣きそうな顔してたの?」

「きっと、あの格好を見られたのが恥ずかしかったんだと思うよ……」

……」

「ええ?でも、淒く似合ってたよ?」

「ああ、確かに。なんで恥ずかしがってたんだ?」

「あの……要さん男の人だよ？」

「またまたあゝ、なのはは冗談が下手ねー」

「それは流石に騙されないよー」

「流石に……なあ？」

「う、嘘じゃないもん！そうですよね！要さん！」

御呼ばれしてしまったので、完璧で瀟洒なメイドを装ったまま席に向かう。

「なんでしょうか？お嬢様」

「えと、要さんって、女の人ですよね？」

「男ですよ」

「やっぱりそうですよねー……え？」

「お、とこ……？」

「嘘だろ……？嘘だと言ってよバーニィ……」

「ほら、ねー」

「御用件はそれだけでしょうか？」

「え、えっと、はい……」

「ほ、本当に……男の人だったんだ……」

そんな声を聞きながらも厨房に戻り、泣いた。

第六話 輪廻の輪と時を翔ける船（後書き）

受験落ちました。来月の公立入試頑張ろう

第七話 戦士の安らぎ（前書き）

今回短めです。また、閑話的な感じなのでぐだぐだです。

一応ネットはつながりましたが、更新速度は大幅に落ちると思います。

また、来月から学生になる……予定です。学校どうなってんだか。なので、更新速度はさらに遅くなります。毎日更新してる人は偉大だ……。

第七話 戦士の安らぎ

休憩を取っていいといわれたので、外のオープンカフェに移動してお茶を飲む。死にたい。

「何をしている？」

「パパ、なにか嫌な事でもあったの？」

テーブルに突っ伏していた顔を上げると、大人Verのエヴァとリウムが居た。

「リリウムー、パパはね、パパはね、男なんだよ……」

「なに言ってるの？」

「普段は女に見られても気にしない癖に、たまに気にするのだったな……」

「まあ、いいや。ルイスは？」

「ザフィーラに乗せてもらって来るそうだ。ほら、来たぞ」

確かに、魔力を探てみると、ザフィーラの背中にルイスが居るのが分かる。仕事なのに、いいんだろうか？

というか、一応危険だから、家で待っていた欲しかったんだが。まあ、ルイスとリリウムは既に空戦SSランクを取れるほどの戦闘技能はあるわけなんだが。

それでもやっぱり、親としては心配なわけで。ううむと唸ったが、

ルイスとリリウムに一応サーチャーをつける事にした。これだよとしておくか……。

ザフィーラの背中からジャンプしたルイスを抱き止め、膝の上に座らせる。愛いやつめ。

「昼飯は食べたのか？」

「うん。ペペロンチーノを作ったの。私が作ったのよ」

「ほー、今度、パパにも作ってくれよ。リリウムの手料理食べたいなー」

「でも、やっぱりパパの方が上手だよな？」

「そりゃあね。昔から家事はパパがやってたから。お前たちに早々負けるわけにやいかんのよ」

「いつか、参ったって言わせて見せるんだから」

「ハハハ、頑張れ頑張れ。今度は何に挑戦しようか？」

「今度はね、グラタンがいい」

「ホワイトソースから作る奴かー、あれは慣れないと難しいんだよなあ。時間掛かるし」

だが、俺は料理には妥協しない人なので、必ずホワイトソースから作る。だって、そっちの方が美味しいし。やっぱり子供には美味しいものを食べさせてあげたい。

「一杯練習するから大丈夫だよ。ね？」

「まあ、リリウムは努力家だからな。私の教えを全て吸収したのだ、問題はないさ」

「じゃあさ、僕にはアレ教えてよ」

「アレ？」

「ホラ、マギア・エレベア」

「無理無理」

「そうだな。ルイスには無理だろう」

「なんで!？」

「あれは心が重要なアースの方でも、特にメンタルが重要なんだ。適正がない物が使えば、二度と戦えない体になる可能性もある」

「それに、闇の侵食に耐え切れないだろう。私と要は問題なかったが……」

「どういう事？」

「そうだなあ……ルイスがもっと大きくならないと無理かな。少なくとも200歳くらいまでは」

「えー、なんで？」

「アレは闇も光も、全て飲み込み、受け入れる強さが必要だ。ぼーやならあるいは……」

「そうだな……アイツの心の原風景には闇が巢食ってる。十年間師匠をやったけど、あそこまで心に闇が根付いてる奴は滅多に居ない」

「うー……よくわかんない」

「大丈夫よ。私にも良くわかんなかったから」

「二人にはちつと早かったかなあ。もしも、あっちの世界だったらわかったのかもしれないけど……」

「あのような世界に、二人を住まわせるわけにはいかないからな？」

「そうそう。俺とエヴァのラブラブパワーがあれば何の問題もなかっただろうけどな！」

「ば、莫迦者……こんな場所で、そんな事を言うんじゃない……」

「たははー、ごめんごめん」

「やっぱり、うちのパパとママは仲がいいね……」

「僕達が物心ついたときからこの調子だもんなあ……」

「でも、仲がいいのはいい事だよね？」

「ま、喧嘩されるよりはね……」

ここにもバカツプルみたいな夫婦がいるのでした。まる。

愛する家族と楽しく優雅なお茶会をする。俺も大昔にエヴァに上流階級のテーブルマナーや、お茶会の作法を叩き込まれたので、実に優雅。

リリウムもエヴァに叩き込まれたし、ルイスには俺が教えた。ルイス一人だけ浮いてしまっしな。シグナムたちは古代ベルカ流のお茶会の作法は知ってるそうなので、教えなかった。作法なんてどこでも似たようなもんだ。

「翠屋の紅茶は美味いな」

「ああ、そこらの凡百の喫茶店とは違うな。しっかりとした温度で抽出されている」

「正直な話、僕ってお茶の味の違い、分からないんだけど」

「苦いのは苦手ー」

子供達はミルクと砂糖を入れてる。とは言っても、お茶の風味を崩さない量だ。ここらへんに教育生きてる。

教養はどれだけ身につけても無駄になる事はない。誰の言葉だったかは知らんが、事実だろう。

「このシュークリームも絶妙だな。今度作ってみようと思ってるんだが……」

「難しいな」

「ああ、時間が掛かりそうだ。完璧に再現出来るかも分からんし」

桃子さんは間違いなく天才だ。俺はお菓子作りはそこまで得意ではないが、エヴァは領主の娘として、お菓子や裁縫の作法を教え込まれている。

お菓子とお茶に関しては、まず間違いなく俺よりも上だ。そのエヴァが難しいというのだから、難しいのだろう。エヴァ、甘いもの好きだし。麻帆良では一緒に食べ歩きしたもんだ

「パパなら出来るよ。だから、頑張つてね？」

「リリウムは食いしん坊だな？まあ、頑張ってみるさ」

そんな感じでお茶をしていると、なのはちゃんたちがこちらを伺っているのが見えた。

手招きして呼んでやると、こっちに向かってくる。

「や、さっきの事については気にしないでくれると助かるよ。改めて、俺は国後要だ。よろしく」

「要の妻の、エヴァンジェリン・A・K・M・国後だ」

「リリウム・V・国後です」

「ルイス・V・国後です」

「あ、高町なのはです」

「私はアリサ・バニングス。よろしくね」

「あ、えっと……その、月村すずかと言います……よろしくおねがいします……」

「ローベル・ヴァイス・リヒターだ。よろしく」

一瞬、ローベルなんたらかんたらが驚いたような顔をしたが、どういう事だ？やはり、時空保安局に付いて知っていると考えるべきか。もう少し泳がせるべきだと判断したが、やはり、怪しい。ここで強襲された場合、対応出来るか分からない。

「要さん。本当に男の人なんですね……」

「しかも結婚してたなんて……」

「君たち、案外失礼だね。見た目はこんなだけど、男なんだから、恋もするし結婚もするさ」

「そういえば、要さんはエヴァンジェリンさんとういう風に知り合ったんですか？」

「うん？話してもいいか？」

「別に隠すような事でもあるまい。話したければ話せ」

「じゃあ、教えてあげる。そうだねえ、あれは全国を放浪してた頃だね」

「放浪って……」

「ああ、別に遊び歩いてたり、自分探しの旅をしてたわけじゃないよ。仕事で放浪してたんだ。」

その時に、崖から落ちそうになってるっていうとんでもない所を見つけてね。助け出したんだ」

「ドラマティックっていうか、ありきたりっていうか……」

「そして、私を助けた直後に、結婚してくれと言い出したんだ」

「まさかの超展開!？」

「まあ、当然ながらそんな事言っても受け入れられる訳がないからね。君に相応しい男になるって言って、俺の杖を預けた」

「杖？」

「杖って言うのは、命を預ける相棒って意味があるんだ。つまり、君に命を捧げてもいいという証だよ」

「アレは驚いたぞ、初対面で告白した上に杖を預けるのだから……」

「それでそれで？」

「それから十五年間一度も会わないままに時間が過ぎた」

「15年!？」

「うん。十五年。それで、とある学校で再開したんだ」

「ていうと、偶然赴任した学校にエヴァンジェリンさんが居たとか？」

「いいや、教師じゃないよ。どっちも生徒」

「生徒！？」

「年幾つですか！？」

「秘密。で、俺はそこに女子生徒として転校してね。モチロンだけど、俺に女装癖があったわけじゃない。近衛詠春っていう友人に頼まれて、そいつの娘の警護をしたんだ」

「それで、生徒ですか……」

「うん。教師だとうにも上手く行動出来ないからね。そこで、エヴァに再会したんだ」

「久しぶりに会ったと思ったら、女になっていてな、あの時ばかりは私も驚いた」

「再開して、すぐに恋人同士になったんだ。契約を交わして」

「ああ、そうだ。今でも覚えている。学園の屋上で交わした契約を」

「契約、ですか？」

「国後要は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを裏切らない」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、国後要を裏切らない」

「国後要は、その命あるまでエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを守り続ける」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、その命あるまで国後要を支え続ける」

「そして、死が二人を別つその時まで、二人は互いを裏切らず、二人は約定を違えない」

「うわぁ……凄いロマンティックですね……」

「凄いラブラブだったんですね……」

「当然だけど。この契約は今まで一度も違えてないよ。約定を違えたその時、命を以って代価を支払う事になってるから」

「うむ。もしもどちらかが先に死んだとき、契約は破られ、二人は死を迎える。そして、世界終焉の時まで共に在る」

契約のスクロールの誓いを破った場合、魂は相手側に送られる。即ち、双方が死に至った場合、誰の所有物ともならず、輪廻転生の環にも入らない。

世界終焉のその日まで、永劫に共に在り続ける。それが俺とエヴァの間に交わされた契約。

「うちの両親はラブラブだからな。今まで、一回も喧嘩したの見た

「ことないよ」

「うん？なんだ、知らんのか。私と要も喧嘩くらいした事はあるぞ」

「え？そうなの？」

「下らない理由の場合もあったがな。だが、互いの意見を真摯にぶつけ合っているからこそ、意見にすれちがいが生まれるんだ。

本当の自分を曝け出して、心の底から話し合った結果に起こった喧嘩だ。後悔なぞした事もない」

「俺もだよ。喧嘩をしたから仲良くなれることだってある。意見がすれ違つて、そのまま永遠に人生がすれ違ふ事だってある。

だけど、本当の自分を曝け出さないので後悔するよりは、ずっといいから。だから喧嘩するんだ。

互いを罵りあったり、手が出る事だってあった。それでも、後悔なんてしてないよ」

「……なんで僕が喧嘩したところを見たことないかわかった」

「うん、私も」

「え、なんで？」

「パパとママの喧嘩に巻き込まれたら死人が出るからよ。ママは合気道術とか鉄扇術の達人だし、パパは剣術の達人だから。

それに加えて、二人は色んな意味で世界最強だから……」

「うん。僕が喧嘩に巻き込まれたら、全力で逃げても十分持つかどうか……それくらい危険なんだよ」

「わかんないわよ……」

「二人の喧嘩を止めるには軍隊をつれてこないと駄目だと思うよ、うん」

「軍隊の規模によっては、喧嘩をヒートアップさせる要員にしかないわよ。ママ、照れ隠しに普通の人なら即死するような殴り方するんだもん。」

それを微笑んで受けるパパもパパだし……あの二人には常識なんて何の役にも立たないわよ。パパの昔の渾名って、なんだと思う？」

「戦う妖精とか？」

「それ、言外に可愛いって言ってるわよね。正解はね、バグキャラよ」

「バグ？」

「キャラ？」

「そ、バグキャラ。動作使用外。何が起きても不思議じゃない。せかいのほうそくがみだれる！って感じ」

「ぐ、具体的には？」

「それは、守秘義務があるから話せないよ。でも、教えていいとするなら……日本にだけ存在してる核融合炉って知ってるかな？」

「30年以上前のものなのに、今の技術力でも作れないようになって

「いう噂のアレですか？」

「そうそう。すずかちゃんはそのうにに興味があるのかな？アレ、俺が設計して開発した核融合炉なんだよ」

「嘘ッ!？」

「しかも、その理由が僕が喘息気味だったから、火力発電所なんぞ作ってんじゃねえっていう理由だったよ」

「凄い家族思いだけど、そんな事でオーバーテクノロジー発揮しないで!」

「ルイスが苦しそうに咳をしてるところなんて見てられなかったんだ!他のバグといえば……そうだなあ、若作りがバグといえばバグか」

「……ちょっと意味が分からないんですけど？」

「んー……あつた」

懐から写真を二枚取り出す。三十年くらい前に撮った、小さい土郎の写真と、12年位前に撮った小さい恭也が写ってる写真だ。

「これがどうしたんですか？」

「別におかしい所はないみたいだけど……」

「こっちの写真の小僧が土郎で、こっちの写真の小僧が恭也だ」

「写真といえば、こんなもある」

懐かしい写真。というのも、俺が持っている写真で一番古いものだ。ネガも持っていて、何枚も焼き増ししてる。

「この子が要さんですか？」

「そうだよ。赤毛の馬鹿そうなのがナギ・スプリングフィールド。一番でかくて馬鹿そうなのがジャック・ラカン。

白髪の奴はフィリウス・ゼクト。黒髪の剣持っててムツツリそうなのが近衛詠春。黒髪の胡散臭そうなのがアルビレオ・イマ。

ピンク色の髪をしてるのがシグナム。赤毛の三つ編みがヴィータ。金髪のうっかりそうなのがシャマル。灰髪のがザフィーラ。銀髪のがリインフォース」

「これ、どういう組み合わせなんですか？」

「国際NGO団体での活動してた頃の仲間だね。何処で撮ったんだっただけ……アリアドネーの国境辺りだったと思うんだけど」

「これ、凄い古そうですね、どれくらい昔の写真なの？」

「うーん……俺が16か17くらいの時の写真かな」

「17!？」

「どうみても10歳くらいですけど!？」

「遅れてきた成長期って奴だよ。うん」

「なんだか気にするだけ頭が痛くなってきた……他にはないんですか？」

「んー……なんで写真を見せる事になってるんだろうか……まあいいか。とはいっても、面白い写真なんてなあ……」

そういえば、あれがあったかと思い出し、取り出す。

「集合写真ですか？」

「そつだよ。さっき言ってた、麻帆良学園女子中等部3・Aの集合写真。俺はここ。エヴァはここ。俺の弟子一号がこいつ。弟子二号がこいつ」

「エヴァンジェリンさん、この頃は小さいんですね」

「弟子って？」

小さい発言に頬を引き攣らせるエヴァ。まあ、今の姿も変身魔法だからな。自分の成長した姿に変身するのは、骨格の成長には反していないので、それほど難度は高くない。

体型を大きくしてるだけだし、自分の骨格から逸脱した形状に変化しているわけではないからだ。

「弟子は弟子。俺の戦闘技術を徹底的に叩き込んだ。即座に傭兵やれるくらいは強くしたつもりだ」

「……要さん、何の仕事してるんですか？」

「今は治安維持機構に勤めてるよ。ここに來たのも、その仕事の「環」」

「私も同じく、その組織の一員としてここに來た訳だ」

実際の所、最高評議會に余り仕事は無い。俺が忙しいのは、單純に任務を受けて動いているからだ。

本来ならば、名誉職としての最高評議會の一員として、適當に隱居してポケポケ遊んでればいい。実際の所、エヴァは大抵家に居る。まあ、それはエヴァには家を守っていてもらいたいからだ。家に帰って、お歸りなさいと言ってくれる人が居る。それだけで、俺は頑張れた。

ちなみにだが、最高評議會には仕事は無いが、名目上は組織の一員なので、休む事は出来ない。だからこそ有給休暇がもらえるのだ。

「本当なら、昨日は休暇だったんだけどね。俺が動かなかったら、職務怠慢になっちゃうわけ」

「大変なんですね……」

「まあ、好きでやってるわけだしね。本当なら、働く必要も無いんだし。俺がやりたいからやってるんだよ」

「動く必要が無いって……事務の方の仕事なんですか？」

「いや、結構偉い人だから、前線に出ると怒られるんだ。まあ、それはどうでもいいか」

「どうでもよくはないんだが……第一に、私は既に引退しているというのに、お前は何時まで仕事を続ける気だ？」

「スーパーロボットが作られたら仕事やめて、スパロボの開発するわ。アルトアイゼンとヴァイスリッター作ろうぜ!」

エヴァに溜息つかれた。まあ、この後も楽しくお茶会をして、その日は終わった。

「うきーっ! 拙者はもうだめでござらあああああああ!」

「やっぱり駄目ね、要ちゃんこういう仕事大の苦手だから……」

「カチ込みが得意技だから……こういう仕事はちよつとな……」

かれこれ数十時間以上も探索を続け、海中にあったジュエルシードは回収したが、それ以上は未だに回収が終わらない。

到着した次元航行艦の武装局員も参加してはいるのだが、ウロボロスとの散発的な小競り合いがあるだけ。ジュエルシードは未だに8個しか見つかっていない。

既に相手側に奪われたジュエルシードもある。回収をしたいのだが、相手側の時の庭園のある箇所が分からないのだ。見つけたらカチ込むのに。

既に場所は移して、次元航行艦に移っている。高町家の面々も安全確保の為に、一応ここに移ってもらっている。八神さんは、一応の監視をつけている。まあ、俺個人の監視だけだ。

「権力は使ったためにあるって、こういう時の為の言葉だよな」

「そうですねえ……闇の書の修復を上手くするにはこうしかありませんよね……」

八神さんは、逆行する前は管理局員だったらしいけど、今の状態は敵対の一手手前だからなあ。俺個人の隠密サーチャーで監視するしかない。

にしても、本当にそっくりだな。ネギまの世界で始めて鏡見た時は驚いたけど、この世界で八神さん見て更に驚いたな。本当に瓜二つなんだから。

二次元と三次元は違うから、もうチョット違うかな？と思ったけど、実際は瓜二つ。本当に驚いたね。神はここまで見越してやったんじゃないか？

「ローベルなんたらリヒターは、保安局と敵対してるしなあ……」

「そうですねえ……シグナムが躍起になって戦おうとしてるけど、中々遭遇しませんね……」

「ああーメンドくさい！早く時の庭園見つからないかなあ、殺傷許可出てるし」

保安局員は警察と同じような物なので、逮捕の際に相手を殺してしまっても、始末書で済む。けれども、殺傷許可出てるなら話は別だ。最初から殺してもいい。つまり、警察ではなく軍隊と同じになるのだ。捕縛できる奴は捕縛するけど。

基本的に高ランク魔導師が敵側に居ない限りは出ない許可だ。今回の場合Sランク以上の魔導師が複数居るのだ。許可が出るのも当然といえる。

こういった場合の基本戦術は、高ランク魔導師が突入して、バックを他の武装局員が補う。最初に高ランク魔導師が薙ぎ払い、次の残

った残党を他の面々が制圧。

あるいは、とり逃したのを捕縛し、艦の方に転送するというのが基本となる。それが一番楽な作戦なのだ。

「なんだか、要ちゃんシグナムみたいですよ？」

「体を動かしたいんだー！鍛錬してないと落ちつかないんだあああああ！」

戦闘要員の面々は出払ってて居ないし、俺達が全力全開で戦えるような場所もない。俺の家に設置してある別荘は特別製で滅多な事じや壊れない。

その為、サイズが大きくなって持ち運びが出来なくなってしまったのだ。この艦の訓練質を使うわけにもいけないので、鍛錬も出来ないのだ。

数日やそこら鍛錬しないくらいで鈍る体を作ってるわけではないが、戦闘の感が鈍る。早く仕事終わらせたい。

「前世だと一日14時間はパソコンしてたけど、今度は一日のうち別荘で二時間も修行することになるとは思わなかった」

浪人生の頃は、勉強しないで一日16時間パソコンしてたけどな。凄い時間だけど、目が悪くならなかったのが自慢。

「暇だよ暇だよおお！ちょっとクライドいじめて遊んでくる」

「いつてらっしやーい」

誰も止めない。それがヴォルケンリッタークオリティ。

「ハハハハ！いけ！粉碎！玉碎！大喝采！」

「あああああ！？」

ヴィータの駆る真ゲッターを叩き潰し、俺の勝利が確定する。なにをやってるかといえばACEだ。

仕事しろよと思うなかれ。この艦で出来る仕事なんて無いのだ。最高評議会の書類処理するのは保安上の面からして却下。

俺の教導は、死ぬか廃人になるかの二つしかないって程に厳しいので、俺の教導を受ける奴も居ない。ちなみに本当に廃人になった奴は居ないぞ。人として少しばかり壊れただけで。

だが、貧弱な坊やでも、俺の軍隊仕込みの訓練＋漫画的な修行法＋ハートマン軍曹の罵り＋保安局の恋人にしたい局員ランキング10の人員で構成された世話係という飴。

コレを用いた訓練をすれば、あつという間に立派な兵士に。実際の教導期間が2ヶ月でも、精神を取り込むスクロールを使って2年くらい修行してるからな。

それはさておき、暇で仕方ないので俺に宛がわれた部屋にゲームを持ち込み、そのゲームを俺の魔法で起動していると言う訳だ。

下らない事と思う無かれ、ゲームが出来る定格電圧の出力は難しいんだぞ。電気変換資質の持ち主でも早々できる事じゃないんだ。おれったらてんさいね！

「んじゃ、次はテトリスでもするか」

「えー、ぶよぶよがいい」

「ダメだ。俺はテトリスをやりたい。超級霸王電影彈が使えるようになったら何でもやらせてやんよ」

「なんだよそのわけのわかんない条件……」

「バツ……！おまつ……超級霸王電影彈が訳わかんないとか……はあ……はあ……」

ため息をついてヴィータの顔を見てからもう一度ため息。

「全くだな。ヴィータ。お前は超級霸王電影彈のなんたるかを分かっている」

至極真面目な顔でザフィーラが言う。

「そうね。超級霸王電影彈のポイントは、顔は回転させないことよね」

と、シャマル。

「流石は風の癒し手だな。物事の何たるかの中心をよく捕らえている」

と、リインフォース。

「最も大事なのは掛け声ですね、主」

と、シグナム。

「流石だな、お前等」

俺の下らないネタフリにバツチリ気付いて乗っってくれるなんて。

「な、なんなんだよ！？なんであたしだけ変な奴みたいな扱いになっ
てんだよ！」

「ヴィータ。潔く認めろ」

「紅の鉄騎。お前は超級霸王電影弾の何たるかを理解していない。
お前にゲームを選択する権利は無いのだ」

自分で言っておいてなんだが、お前等訳わかんねーぞ。
結局、ヴィータがマジ泣きする直前までになった。必死で慰めるこ
とになったのは余談だ。

第七話 戦士の安らぎ（後書き）

本当にぐだぐだ……。次回更新は再来月の初めくらいで……。
楽しみにしてください方にはすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487n/>

ネギまで夜天の主(偽)番外編・魔法老人リリカルカナメと魔法人外エヴァンジ

2011年3月27日04時30分発行